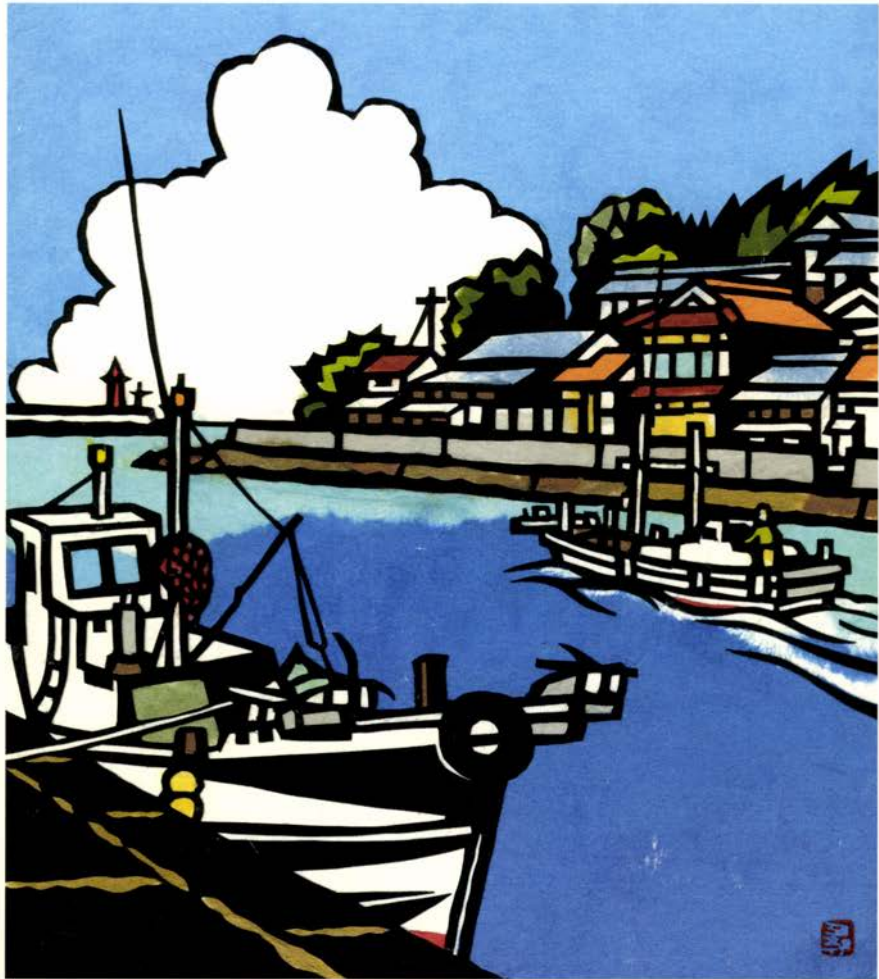


川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十三年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇二一 号



日川協加盟

No. 1011

八月号

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

ご宿泊 10,500円～

ご宴会 15名以上からの受付

※送迎可、片道1時間送迎範囲あります。

『春夏秋冬溢れる自然
吟行句会に最適』

牛滝温泉
いよやかの郷

ご予約・お問い合わせ

TEL 072-479-2641

〒596-0114 大阪府岸和田市大沢町1156

<http://www.iyoyaka.jp/>

いよやか

検索



川柳に
出逢える温泉郷

■(土)・(日)のご利用は混み合いますのでお申込みは早い目に。

■岸和田川柳会 井伊東吉 (TEL 072-444-3227) にご連絡頂ければお取次ぎ致します。

ふたつの句碑

小島 蘭 幸

AKBは秘書にゴリラは門番に 芳山
今回も佳句をたくさん聴くことができました。

今年も路郎賞、川柳塔賞の応募の締切（8月10日必着）が迫って参りました。すでに準備をされている方も多いと思いますが、まだの方は応募資格をしっかりと確認して、全員、応募されますようお願い申し上げます。

路郎賞は川柳塔創刊翌年の6月号に「受賞の対象は同人作品すなわち川柳塔の雑誌から一句をとることになった、七選者委員厳選の上、生々庵主幹が決定する」と創設されました。川柳塔賞は路郎賞の一年後に創設。

路郎賞、川柳塔賞は共に権威ある賞で当時の柳誌を開くと選考委員の皆様の情熱がまっすぐ伝わってくるのです。

握手した手が離れないまま坐り 久米雄

昭和45年度的路郎賞受賞作品です。還暦を祝して、句碑建立を計画していた浜田久米雄氏は急きょ予定していた句を変更して自宅の庭に建立されたのです。路郎賞、川柳塔賞の応募の時期になると、私はいつも尼緑之助氏と浜田久米雄氏の句碑を遙かに思い、両氏を偲んでいます。

7月9日、いずも川柳会85周年記念大会が出雲市のホテル武志山荘で開催されました。いずも川柳会は、大正15年、尼緑之助氏が川柳たかせ会を結成された事から始まります。その後「川柳は人間陶冶の詩である」と主唱された麻生路郎師に心魂を打ち込んで師事、川柳雑誌「簸川支部」を創設されたのです。いずも川柳会会長、川柳塔社参事として、川柳の普及、発展に尽力された氏は昭和58年に句文集『生かされて』を発刊されています。

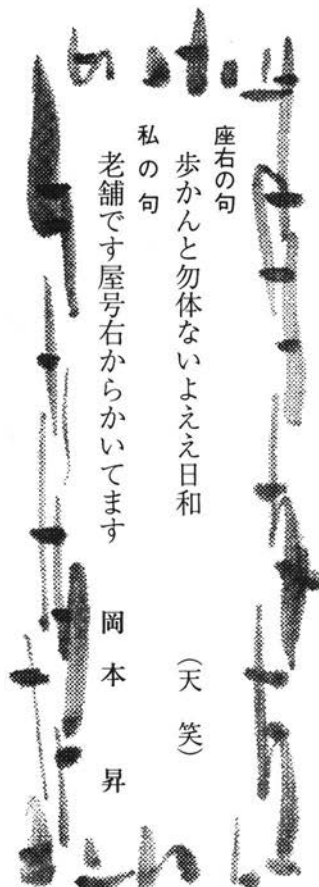
灯台の夕陽神話を抱きよせる 緑之助

昭和46年度的路郎賞受賞作品です。この栄光ある作品は、日御碕の景勝地に緑之助句碑として昭和48年に建立されました。

冒頭の85周年大会は、歴史の重さをひしひしと感じる事の出来た大会で、七つの課題も神話の国、出雲ならではのものでした。

大黒様の袋の中は義援金

完 司



座右の句

歩かんと勿体ないよええ日和

(天笑)

私の句

老舗です屋号右からかいてます

岡本昇

川柳塔 八月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「萩・河口」

■巻頭言 ふたつの句碑

汗かきの弁

小島蘭幸 (1)
都倉求芽 (2)

川柳塔(同人吟)

小島蘭幸選 (4)

川柳塔の川柳讃歌 (80)

木津川 計 (47)

自選集

(48)

温故知新

(51)

水煙抄

西出楓楽選 (52)

麻生路郎句抄

(75)

愛染帖

新家完司選 (76)

誹風柳多留 一篇研究 72

(80)

檸檬抄「刹那」

三宅保州・山本希久子共選 (82)

■句集紹介「ポコ・ア・ポコ」

藤井則彦著 (85)

汗かきの弁

都倉求芽

今年も夏が来た。体が身構えている。長期予報によると例年並の暑さできびしいとのこと。この残暑が問題である。去年はこの残暑がいつまでも頑張って、9月いっぱい熱帯夜が続いたように記憶する。

わたしは決して夏が嫌いではない。夏瘦せもしないし特に不調になるわけでもない。山も海も好きである。ただ閉口するのは「汗」である。どういうわけか小さい頃からすごい汗かきで、体にはいつも汗もが出来ていた。行水の後でおばあちゃんが天花粉で体中まぶしてくれた。通学帽はいつも汗で塩が噴いていた。帽子は暑い。だから今でも帽子は一つも持っていない。外出する時には、母が「ハンカチ、タオルは持ったか?」と、必ず言ってくれた。

まだクーラーがない時代。夜眠る時、横になっても頭から流れる汗が目や耳のくぼみにたまり、無意識にタオルで拭く。当然睡眠不足になる。元来が自然主義の方だから家電などにはあまり積極的でなかった。

一路集 (季) 節 (86)

「きまぐれ」 (86)

「ぞろぞろ」 (87)

初歩教室「ポーズ」 (88)

秀句鑑賞 同人吟 (90)

水煙抄 (92)

■句集紹介『道程』林さだき著 (93)

『麻生路郎読本』余滴 (4) (94)

せんりゅう飛行船 (8) (96)

■各地句会だより 六甲川柳会 (99)

七月本社句会 (100)

路郎賞・川柳塔賞 選考規定 (104)

各地柳壇 (佳句地十選 / 清川玲子) (106)

八月各地句会案内 (120)

柳界展望 (122)

■編集後記 (ひとこと / 澤井敏治) (128)

朱夏・能子 (128)

座右の句

本降りに成って出て行く雨宿り

(古川柳)

私の句

好きだから無理難題を言ってみる 福田好文

けれどクーラーだけは飛びついた。世にこんなありがたいものが出来たのだ。おかげで毎晩熟睡が出来る。これを発明した人には足を向けて寝られない、と冗談まじりに人にも言うてきた。

どほどのシャツを洗濯機も嫌う顔の汗引くまで挨拶待つてんか飛び乗った車両 しまった弱冷車帰宅して先汗拭こか服脱ごか汗の価値が変わった八月十五日

東北の大災害ではじまった節電の大喝。やれゴーヤだ、へちまだ、朝顔だ、室内の温度を下げるため、窓を覆う日除けの種が売り切れだそう。わたしの家では西側のベランダに棕櫚竹の大きな鉢を四つ並べている。もとはと言えば向かいのマンションからの目隠しのため、妻が植木屋さんに頼んで置いたのが四年目にして立派に育ち、申し分なく目隠し兼、日除けになっている。しかしこの程度ではわたしにとってまだ十分な温度までには下がらない。この時世にまことに申しわけないが、やはりクーラーのお世話になりたい。非国民呼ばわりされても覚悟は出来ている。

夏が来る覚悟確かめている五体 求芽



小島蘭幸選

鳥取市 岸 本 宏 章

海の日の海は山の子待っている
慣れてみれば枯葉マークも味深い
停電も無駄でなかったエコに活き
さまぐれで選んだ総理だったのか
放射能東電だけが憎まれる
後出しのじゃんけんばかりする野党

吹田市 須 磨 活 恵

年金で膨らみ切れぬ浮き袋
四角四面時には持て余すことも
フクチャンの漫画も一度読みたいナ
神棚のお水とり替え朝の幸
女の火ふわつと擦る若葉風
紫陽花も菖蒲も小糠雨がすき

西宮市 片 山 忠

ハッピーな頃に撮りたい顔写真
生活の知恵で頭を下げている
無欲ほど当てにならないものはない

償いのチャンスくれたフルムーン
雄と雌どちらも凭れ合う不思議
生き甲斐を聞かれ妻だと言うておく

河内長野市 山 岡 富美子

責任という字がかかるくなって来た
一国の総理の椅子もショートステイ
悔恨が寄せては返す波にある
節電へLEDが旗手の顔

駅弁に付加価値があり国訛り
梅雨どきのバググ扇子にミニ懐炉

堺市 柿 花 和 夫

名利にわがもの顔の千社札
見たいものに被災の海の大漁旗
俺の席にいちげんさんが座つとる
天災の歴史と生きてきた山河
少子化で犬が公園席卷す
節電に協力をして冷酒とす

和歌山市 木本朱夏

仮面はらりと落す五月の風の中

声あげて泣きたい夜がわたしにも

フライパンが歌う或る日の良い知らせ

蟻よりも右往左往をして無力

今日のわたしを捨てるにちょうど良い袋

口中に風が生まれるミントティー

鳥取市 森山盛桜

風船が割れたら意味の無い空気

伸びるのはいいがつつかい棒が要る

当て馬にされたとやつと気が付いた

沈む闇怖くてお喋りを止めぬ

貫禄がハローワークで邪魔になる

リセットボタン何度も押しながら暮らす

泉佐野市 山本蛙城

エコの夏飛燕にもらうさわやかさ

地価表示活断層と無関係

この町のガイドブックに滝修業

そのうちに作ろう歩行発電機

断捨離の世に押入れは開かずの間

停電の夏へおびえる冷蔵庫

弘前市 高瀬霜石

「頑張れ」は苦手「ドンマイ」ならOK

百均の時計にもある自尊心

真っ直ぐな道にたまさか出る魔物

これつきり 何度言つたかわからない

二次会はカラオケだろうから消える

一合半炊いて足りてるほくひとり

出雲市 竹治ちかし

日進月歩 神の域にはまだ遠い

お風呂場のタイルと出会うピタゴラス

自画像が嫌いな奴の顔に似る

今一度耳立て神の声を聞く

幸不幸君と同じ世代生き

中流と妥協は出来ぬから迷う

堺市 桑原道夫

抽斗が抽斗のまま捨ててある

一家総出でたどり着いたるラーメン屋

オヤジギャグが止まらなくなつたオウム

知恵があり過ぎて困っているカバン

滝壺を見てきた二人無口なり

路面電車もうすぐ坂にさしかかる

和歌山市 牛尾緑良

持ち駒へ古希には古希のバスワード

母在すごとくに燃える火炉の炭

合掌へピアニッシモで母の声

金平糖やはり八方美人だな

肩車父の背中はまだ温い

生命線まだ断層がありそうだ

堺市 加島 由一

好きなことできる電気もついている
会いたくて人混みを縫う赤い傘
窓際の椅子女子からは慕われる
何事もなく父の日は終つた
志望校合格絵馬もがんばった
妻がいたら酒はこれほど飲んでない

三田市 堀 正和

新刊が届くときはし居留守する
ツイてきたツイてきたぞと言ひ聞かす
旨いもん食つて生命線伸ばす
百までも生きるつもりで怠け者
貧しくも笑顔があつたなあ昭和
記念日は何はともあれ吟醸酒

豊中市 江見見清

ポケットにアイディアひとつ残つてた
わたくしの脳に足したいペンとメモ
後出しの見栄にいつでも負けている
高望みに挑戦肥やしにはなつた
高級な料理にくたびれて帰り
しばらくは空を見ている梅雨晴れ間

松山市 高橋宏臣

錆び付いた武器と平和の夢を見る
日捲りを手繰り明日の空を見る
夢いくつ紙風船を遊ばせる

八月の傷どこまでも蝉しぐれ

平和主義竹光矢面には立たぬ

またも一会の紙の花咲くてのひらか

和歌山市 喜田准一

成り行きに任す無策の策がある

我慢してます我慢もさせてます

波の音聞こえる所から電話

肩書きの取れた話がよく通る

分別が前を塞いで進めない

凹んだらチャンチキおけさ口ずさむ

和歌山市 福本英子

赤い糸何度も結び替えて今日

何をしてても良いのに何もせず終い

アンパン好きの姑がパン食大嫌い

去年より暑い予報を恨みます

節電へ風鈴うちわ喜んで

自民党のお尻拭いを為損なう

福岡県 林 さだき

天井の染み戦争を知っている

その時は愛が頼りの介護の身

本物しか通用しない子の世界

寝たふりで様子窺う遺産分け

ハイポーズ細身に見えるこの角度

遺言は一言ですむありがとう

八王子市 播本 充子

なるようになった泣こうか笑おうか

淡い色ばかりで描くユートピア

半世紀振りに購読紙を替える

忙しいお方に縫りつくピンチ

どくだみを繁らせておく資産税

週末はのんびりしたいランドセル

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

生まじめを捨てるととても楽になる

惚けた振りをしてみせる午後の風鈴

花菖蒲凜と傷心癒しきる

時間切れそんな言葉の助け舟

もう夏の気配を急ぐいちごジャム

わがままに眠る手足をおりたたむ

大阪市 小谷 集一

リベンジを秘かに誓う日向ぼこ

使い道無いへそくりが抱く野心

ペランダに花咲き誇り妻元氣

小細工はせずに個性のあるがまま

美辞麗句だけでは愛は語れない

二十五時昨日と今日が聞き合う

島根県 伊藤 寿美

髪切って涙も切って歩き出す

歳月が自然解凍した痼

母の手に触れると溶けてゆく痛み

疑えば限なし月が欠けてくる

ゴーストタウン汚染の里の防護服

何故何故と問う海に哭き空に吠え

大山市 金子 美千代

幸せのものさし変えた大地震

気にかけてくれる子が居るひとりの灯

決心がついて治った胃の痛み

どんどんと詰め込みどんどんと忘れ

百までは生きると母の心意気

適当にはっとかれ気楽なお宿

堺市 大久保 のん子

修羅幾つ越えたか傘寿同窓会

輪の中で妥協の虫を飼ひ馴らす

人間の奢りは天に裁かれる

寂しいくせにまた強がりと言っている

もう会えぬ人かも知れぬ風の駅

一滴の涙で何もかも許す

堺市 矢倉 五月

とりあえずを使つてうまく生きのびる

言い訳のくどさへ猫も出て行つた

兄に人氣親に不評という教師

肩書が取れても偉いお友達

朝ドラがあり定刻に起きてます

ご褒美はガンバッタヨネだけで良い

羽曳野市 吉村久仁雄

人畜無害監視カメラに見透かされ
一善はやつぱり人の前でする
ステテコの肩身広げるクールビズ
たましいの奥に風鈴ぶら下げる
君が代は好きですこの国嫌いです
結論は酒に聞こうと敵と飲む

芦屋市 黒田能子

特別に何もしないが誉められる
お互いのマンネリへ打つ大太鼓
その内に宇宙ツアーも夢でない
今が旬最高の花咲かさねば
山盛りの記憶が少しづつ消える
大切な名を番号で呼ばないで

枚方市 丹後屋肇

ずんべら坊元の目鼻に戻すべし
正々堂々土俵叩いて悔しがる
源流のしずくを懐しむ大河
芍薬の一枚一枚脱ぐエロス
悔しさに歪む準優勝の楯
異性から齢を訊かれてウッフのフ

和歌山市 柏原夕胡

体調良好あそぶのに忙しい
特別なことは何もと言うエステ
楽しかったのに後悔をしてる蝶

溶けるほど君を愛して見せましよう
すれ違うところ寒さを増してくる
あきらめていた順風が吹いてくる

吹田市 山本希久子

見せかけの元気わたしの赤い服
信じた道を行き止まりまで歩く
うちわ片手にペンを片手に夏の夜
コンピニはないが人情あつい街
華のない夫婦にぬくい絵が描けた
泣く人がいる空はこんなに青いの

松山市 宮尾みのり

明るい声だから演歌は唄わない
旧姓に戻りましたとメール来る
前ぶれに気付かなかった妻の乱
スーパ―へ人恋しさを買いに行く
少うしの隙間で命拾いする
ダークホースがハードル楽にクリアする

高槻市 峯村勲弘

学童を送る一善明日もまた
駄駄っ子のように暴れる原子力
私利私欲地震津波に暴かれる
京の寺義捐の箱も山門に
お日様の恵みに頼るエネルギー
句作りに励む人生二毛作

尼崎市 春城年代

ことばに命ふきかけている作曲家
九十歳を勲章として生きのびる

ある日ふと紅白まんじゅう欲しくなる

雨の日は雨の幸せ考える

することを忘れ呆けて陽が落ちる

適切なことば捜しの旅続く

大阪市 榎本日の出

ブランドがどん底暮し受けつけぬ

此の地球何が起きても知らん振り

ほめ言葉これも意見と知りました

また一つ葉が増えて元氣出す

将来は無限で過去は捨ててゆく

満腹ですっかり悩み消えている

鳥取市 有沢せつ子

子や孫へ亡母の慈愛をうけわたす

らっきょうの出荷砂丘に夏を呼ぶ

耳慣れてふっと節電してしまう

いい風に運ばれ蒔かぬ花が咲く

美しい友生活が匂わない

開くまでページ守っている葉

大阪市 神夏磯典子

暑くとも耐えよう放射能ではないよ

雷ごろごろ戦が始るぞ

畳替え出発点に立ってみる

老々介護六十年の愛がある

遠花火 大震災を鎮めたい

喜寿近し花も金魚も私も

松山市 古手川光

原発がコスト安いという神話

少欲知足で暮らせと原発が囁く

縋りたい薬一本も見当らぬ

馬鹿正直な鏡だ馬が合いそうだ

ライバルの御蔭で今日も頑張れる

川柳の俳句化俳句の川柳化

枚方市 寺川弘一

真実の数がこの世に多過ぎる

大人になると平気な顔で嘘を吐く

一目惚れ理由は後で考える

誕生祝い寿命はひとつ減るけれど

手抜きをしても人生伸びてくれません

言い尽くせない弔辞涙を止められぬ

神戸市 山口光久

校庭に明日を担う声溢れ

新緑へ自分探しのハイキング

冗談が言えぬ自分かもしかしい

雲泥の差でも努力が埋めるだろう

今日もまた命縮める酒二合

青空に貰う勇氣は無限大

松江市 松本文子

完治しないが退院したとハガキ来る
一つずつ消し辿って行こう無の世界
回覧板が来て用件をまた忘れ
雨降った今日も済んだと書いておく
塩胡椒少々ちまちますぎないか

松江市 三島 凜

平凡な暮らしが好きで冷や奴
現実を逃れて本に潜り込む
慌てるな敵も真昼の夢の中
酔い覚めの水を喜ぶ喉仏
目に見えぬテロにくしゃみが出まらない

松江市 小川 注湖

両方の旗色を読む中にいる
水滴が誘い合って動き出す
入場順リボンの色で仕分けされ
赤飯を囲む笑顔が生む絆
にこにことうれしいのだらういい顔だ

松江市 松本 知恵子

風邪癒えて五臓六腑にのむ新茶
アピールをしない男のボランティア
原爆忌近い原発事故の国
黒い雨忘れてたのか原発事故
被爆国なのに原発やるせない

松江市 錦織 禮子

永年表彰四十人の一人
真昼時貸切りになる牡丹園
手持ちの指輪いつしか年を取っていた
アンケート答えられない黒電話
プライドが邪魔をしたドタバタ喜劇

松江市 石橋 芳山

真似るしなくてクルクル風車
狩りの血が熱くドクドクして山野
退屈になるとコツコツ夢を彫る
軽薄な男だ喋り過ぎている
嫌われていると分かっている結露

出雲市 岸 桂子

ルーズソックス短い足にしてしまう
句読点打って短い文にする
すいすいと今日まで来れた訳でない
ストレスがしとしと溜る日記帳
時々胸の蛍が光り出す

出雲市 小白金 房子

軸かえて洗馬一幅初夏を見る
牛舎の灯なれて捨て猫よってくる
温泉でわたしの難を解き放す
追加した酒が人生語り出す
髪切って再出発の朝を踏む

出雲市 富田 蘭水

美作市 大石 あすなろ

恨んでも始末の悪い放射能
根性のことを胸に秘めている
青梅の時期が来たので亡母思う
みかんの花タイムスリッパさせている
ネジ時計今も元気で宝です

出雲市 伊藤 玲子

そろそろに繋ぐ襷を整える
憎さなど捨てよう胸に傷がつく
燥いでたブランコ雨に眠りだす
燃えるものの胸にたんで惹きさむ
空は画布虹も茜もみんな好き

島根県 持田 多輝子

里帰りネギも大根も持ってゆけ
ひ孫をヒロインにして皆笑う
母のむね針千本の傷いやす
判断は父にまかせてつつがなし
記憶喪失月日の過ぎる走馬灯

倉敷市 撰 喜子

女よりもっと色気のある女装
裁縫をしない娘のお針箱
すつきりと目覚めた朝の顔を拭く
クラス会まだ一人身の背が淋し
密室に一人残ったエレベーター

煮こぼれの匂いが朝の厨から
犬搔きでいい何度も浮上くり返す
不器用な指だパソコン撚らぬ
胃カメラにCT疲れどつとくる
越えて来た山を自信に置きかえる

美作市 福原 悦子

浄土まで残高残して母は逝く
踏まれても雑草の花満開だ
潮時を幾つも越えて来た顔だ
喜寿すぎてやつと感じているゆとり
余白を生かされ埋める趣味に遇う

竹原市 岩本 笑子

人間が決めた解答ならあるが
視点変えろと夫の背の丸さ
ナス トマト毎日命いただきぬ
本棚の半分位読んだかな
忘れない忘れられない薬飲む

竹原市 石原 淑子

核廃絶願い届けと座り込む
負けるもんか三歳次女の顔になる
しんどいな私を伸ばす恩満ちる
いつからか並んで座る夫婦です
震災の多い国の墓洗う

府中市 藤岡ヒデコ

美祿市 安平次弘道

クロスワードそのきつかけは脳トレに

背がかがむ姉とは三つ違うだけ

一人居の姉の話は止まらない

チビ猫に姉を頼んで手を振って

こんな時国のトップに波風が

府中市 馬場利子

梅雨晴れの補植の田圃生きて来る

七色の虹には足りぬ夢を盛る

夏風と語り安堵の灯が読める

盆灯籠迎える父は千の風

鍵穴を覗くと見える父の影

府中市 岩本雅代

母の手で日の丸むすび味恋し

梅雨晴間太陽の愛手に掬う

何時の間に世の雑音が遠くなり

もう一度楽しい夢を見てみたい

竹の子が一夜に私越して伸び

宇部市 平田実男

引き算と割り算だけの古い二人

淋しさは自分の彩が薄くなる

内定の孫を見直す爺々と婆々

刃より言葉で受けた深い傷

妻よりも怖い娘になりました

世渡りが下手で過労死など出来ぬ

意気込んでいたのは夢を見たせい

瀬戸際で泣いていたのは僕だった

笑ってはおれぬ自由がなくなるぞ

額縁に入れてあるのは喉仏

東かがわ市 清川玲子

流木の哀話ゆっくりきいてやる

私はわたしの流儀で米をとぐ

一つ添えた梅にべんとう引き締まる

抱きしめるための両手はあけてある

脳細胞に英気つぎたす柳誌読む

東かがわ市 原賢

平凡で何処か抜けてる妻と居る

古い二人三DKが広過ぎる

輪の中に居ても孤独な風がある

叱られて行ったり来たりした地蔵

立ち枯れを残して故郷が病んでいる

東かがわ市 伊勢八重子

焦るまい心開いてくれるまで

昨日まで好きじゃなかった人なのに

長い道人と言う字で来た二人

馴れ初めを問えばうふふと目が笑う

雨の日は孫と童話の中に居る

東かがわ市 川崎 ひかり

ばつさりと切れば楽だろ血の絆

一滴も油は水を受け入れぬ

ダリの絵が今の地球を物語る

気短で特急券で買う時間

どんな理由あるのか言葉濁らせる

大洲市 中居 善信

けらけらと笑う言い訳かも知れん

孫一人来ると和んでくる心

一家言持つて列から外される

植えとけば何時か実のなる柿の苗

電気浮き見つめています今日余白

西予市 黒田 茂代

美しいものが優しくはないばらの棘

即興曲奏でる吊り橋のハーブ

今もシンボル ビルの谷間の時計台

句に夢中ついついお米研ぎ忘れ

思い切りジャンプ心を軽くする

高知市 小川 てるみ

母の日に届ける幸と届く幸

竹の節一つひとつの力瘤

はかなげな螢はきつと老母だろう

まっ先に逃げる手順を考える

震災の悲しみ消えず早や三月

高知県 小澤 幸泉

父いまだ孤独になれず子に甘え

キムチ鍋平和の味をかみしめる

結局は長居しただけ何もなし

おしゃべりの熟年悲しい過去をもち

不運など忘れたような友の顔

唐津市 坂本 蜂朗

沢庵と煮干で過ごす妻の留守

浮き沈みしつつ遠くへ来たものだ

三途の川見る暇もない全麻酔

富士登山みたいにゆかぬ芸の道

趣味の会ちよつと嬉しい片思い

唐津市 井上 勝視

眠れぬ夜避難暮らしの老い思う

外に出ぬ老いは不義理が増えてゆく

霜降りのステーキいらぬ齢である

菜食のモルモン教に近くなる

一日ひと日神に託した余命なり

唐津市 山口 高明

経典を二百六十二文字書く

円卓の決議は毎度握手だけ

巡礼もくるまで回る無粋な世

慣例が無いのに役所クールビズ

満天の夜空に千の物語

唐津市 樋口輝夫

くしゃみして居留守がバレた昼の酒
介護士が褒められている投書欄
病人の愚痴もしつかり聞く介護
いつからか回診を待つ薄化粧
亡妻に渡したい手遅れの感謝状

熊本県 高野宵草

お別れの握手の痛さ掌に記憶
経済に疎い私を立てる妻
沈む気を晴らす帽子を乗せて出る
穫れたての野菜に似合う新聞紙
日記帳今日の記憶が呼び出せず

熊本県 岩切康子

ふと言ひ出し旅すぐ決まる記念の日
主逝って絆に点火いとこ会
葬式席知人の横に移動する
弟に縁の墓を教えとく
高齢講習あと五年は夢ハンドル

札幌市 小沢淳

自己弁護すぎて評判また落ちる
ボタンキニューネクタイのまま寝てる僕
責任を背負う男の貝の口
エリマキトカゲ二足歩行を笑えるか
世間体仮面ついたり忘れたり

札幌市 三浦強一

子の不明言わぬ再起へ貰い泣き
政界もメルトダウンの原発禍
恍惚の母憂きことをみな忘れ
も少しのところでいつも四捨される
人生劇場あと幾幕の余生とや

砂川市 大橋政良

泥臭い生涯だった父の墓
自画自賛足音遠くなるばかり
奈落まで転がり落ちてゆく孤独
雑踏に消される街角のギター
軽口を叩き楽しく酔っている

黒石市 佐藤古拙

社説読む起承転結知りたくて
許されよ編集おえた煙草の輪
止り木の啖呵が愚痴になる予感
震災のあと政界の茶番劇
フィナーレ眼鏡ふくよに涙拭く

黒石市 相馬一花

サスペンスドラマに溶けている乳房
夫ほど便利なものは見当らぬ
水虫に縁もゆかりもない裸足
モナリザに食わせてみたいジャッパ汁
偽造した胸でマグロを釣り上げる

平川市 小寺花峯

煮凝りが味を知つて落し蓋
来世も雑草ですか僕の過去

津軽時間定刻に来てヘソを曲げ

自販機の酒は孤独の音がする

とんぶくを探しあぐねた偏頭痛

弘前市 今 愁女

大自然の謀略ひとは立ち上がる

天皇よ避難の胡坐許されよ

無味無臭無色透明シーベルト

風評という名の災害もあるのです

立ち直る新幹線で上野まで

弘前市 岡本花匠

本堂に集いて遊ぶほとけの子

仏像ガールほとけの魅力説き笑顔

ちちははの貌に似せてた筆ごころ

ポケットに小さなほとけお守りに

喪が明けて白藤と酌むにこり酒

弘前市 高橋岳水

無機質な街に育たぬ野辺の花

髪洗う少し身軽になりたくて

ゆつくりと残り時間を吟味する

五官では捕えられない放射能

生き残るための擬態を繰り返す

弘前市 富士慕情

本物のようで造花のような花
雨上り凜とあじさい見えを切る

成り行きに任せて川の浮遊物

山菜の灰汁にも微罪浮いてくる

何よりの味方諭吉が居付かない

弘前市 須郷井蛙

どうしようお茶にも見えぬ放射能

ペロペロと嘔まずに食べたイタリアン

婦人会お安い店とうまい店

特売を上手に混ぜて台所

薬より昼寝一番八十路坂

青森県 松山芳生

肯定も否定もしないくすり指

沈黙の柩に木魚乱打する

人間を脱ぐと一番安らげる

そしてまたときめき出した愛らしい

手で掬う水に野山を遊ばせる

さいたま市 星野育子

エコだけじゃ回避出来ない非常事態

一億の声は届かぬアンケート

目高には海の話はせずにおく

幸せを教えてくれた不幸せ

頑張るな挫けるなはどうするか

東京都 岸 野 あやめ

断捨離をして買いに出る夏の服
姑法事義弟ふたりの白い髪
煩惱はひとの指環がよく光る
身嗜み三日坊主はあきまへん
じゃが芋に似た顔ばかり従兄弟会

横浜市 菊 地 政 勝

ひまわりの迷路へ妻と戯れる
母親の介護日誌に揺れる文字
出不精の妻がネットでショッピン
抑止力あるかもしれぬ置き薬
長生きの家系で貯金くずせない

横浜市 小 野 句多留

生きのびた漁船は海に無事戻る
被災地のトランペットが明日を吹く
おしどりが三途の河で待ち合わす（長門裕之の死）
微妙だが忘れる幅が広くなる
フラスコに詰まる政治の湯がたぎる

川崎市 三 浦 き ぬ

杖二本まだ足りぬ足湿布貼る
大津波亡夫の遺骨届けてよ
亡夫とのデート思い出一度きり
靖国にあと何度ほど詣れるか
故郷の砂丘に咲いたハマナスの紅

富山市 島 ひかる

水が欲しい水が欲しいと彬の碑
父母兄の年忌かぞえる午前二時
夢判断ゆめ忘れないうちに読み
私も惚けたと先手笑い合う
風を読み減り張りつけている暮らし

可児市 板 山 まみ子

政治家よ腕振る時は今と知れ
空腹に大満足の旬の味
麦秋に風切るペダル迷い無く
二時間も辛抱してた釣れぬ竿
節電の正念場なり夏休み

静岡県 藺 田 獏 沓

無礼講から常識が薄く消え
当り券うっかり洗濯してしまい
葉桜に稽古着袴豆剣士
さよならをしてから季節動かない
上棟の槌音初夏の風にのり

大山市 吉 田 幸 子

こんな地味着れぬと亡母の歳になり
ステキだね言えば昔のよと交わす
楽になるならば飲みたくなるサブリ
山ほどの野良の仕事へ梅雨かぶれ
手厳しい助言ピリッと引き締まる

大山市 関 本 かつ子

京都市 西 村 益 子

クラシック流し昼寝の太工さん

夫からいつも二を引く歳の数

あじさいの真つ新が好き青が好き

誉め過ぎも信用されぬことを知り

国会をリコールしたい憤り

愛知県 早 川 遡 行

この歳になつて自転車漕げる幸

足腰の萎えを自転車漕ぎながら

海を見にサイクリングの風を切り

暴走は自転車だけにしてほしい

喋つてゐる食べてゐる寝てゐるバスの旅

京都市 榊 本 宏 子

底冷えの路地にまだあるおすそ分け

絶望も夢もありそう海の底

生年月日同じで道は右左

同窓会好きだった言う六十路なり

和と洋が交わらぬままひとつ屋根

京都市 三 宅 満 子

幾千のドラマを残し散る命

あんな人に命をかけたあほらしさ

命がけで生んだ子供に羽根が生え

メールより話がしたいてんこもり

眠れぬ夜猫の軒に癒される

エコバッグにニユースを詰めて友が来る

雑草に疲れ眺める高い空

早寝早起き節電中のお父さん

爺ちゃんの一喝孫には天命だ

生命保険切れると同時に逝きたいね

失敗を梃子にしている人もある

真実は心にしまふ余裕ない

パソコンを一本指で打つわたし

近頃は妻のカーブがよく決まる

ハモニカで吹ける唱歌が遠くなる

京都市 藤 井 文 代

振られました今はイケメンアレルギ

家族ごっこ止めたと帰る離婚沙汰

お世辞なのに真に受けちよつと鏡見る

咎の気なく嘘もつきます褒めもする

夫婦喧嘩黒白つける意味もない

京都市 高 島 啓 子

まっ白いシャツでかもめになる浜辺

定年を過ぎてても働きたいかもめ

御当地ソング唄って漂泊のかもめ

姉さんは鷹 妹は鷺である

川岸のむこうは鳥になる世界

亀岡市 井上森生

大阪市 寺井弘子

先々は孫の世代に任せよう
七十路を生きる証に今無病
生き甲斐はいつも元気な句を作る
便利さに漬かつて弱くなる体
描いてみる自給自足の原始村

長岡京市 山田葉子

パソコンから珍客たんとやってくる

宿願の知覧でやっぱり泣きました

大阪市 佐藤忠昭

黒光りの梁が歴史をもの語る
モナリザに謎かけられている男
背中押されフットワークが軽くなる
避けられぬしがらみ抜けて蝶になる

父よりも母宛多い遺書の数
知覧にて泣いてる僕を笑う妻
英霊を商売にしている気滅いる
知覧には桜の花が酷すぎる

大阪市 岩崎公誠

大阪市 大川桃花

空回りしてる頭の螺子を締め
節電に行方を迷うネオン管
私利私欲例外ばかりふえつづけ
幸福の木を庭に植え昼寝する
検索に頼り頭脳は隙だらけ

あかんなあと思いつあかん事をする
しおらしい女将東大卒らしい
マジックテープみたいな人と暮らしてる
鉋ひく大工折りの形して
輪に入る通行証のような飴

大阪市 津村志華子

大阪市 升成好

余生とや力を抜けば気が軽い
あじさいの寺で安らぐ小半日
一長一短わたしの不足たんとある
氏素姓どこの何方か新開地
無念さのみ魂に祈る花の寺

慶びの席でも母は泣いている
草でさえ屋根でも咲ける生きてやる
見栄張って今日の元気のもとにする
振るよりは巻くことばかりわが尻尾
たんまりと悪事を吞んだシユレッダー

大阪市 平 嶋 美智子

腕組めば信じられてる良い心地
竹箒持つて螢を待ちわびる
古里は螢も住めぬほどに荒れ
他人様の思いに染まるのはよそう
肝っ玉かあさんしてる鬱の日も

大阪市 池 上 清 治

受付も名前浮かばぬクラス会
受付の愛想で選ぶレストラン
援助待つ宮城へ孫がボランティア
ノミネートされて静かな顔で待つ
待っていたツアーへ風の狙い撃ち

大阪市 坂 裕 之

晴れた日に使いたいから貯めてます
身を守るための嘘でも気は重い
身の丈に合った話に止めておく
晩酌のない夕食もありと知る
白黒をつけずぼんやりやり過ごす

大阪市 榎 本 舞 夢

すれ違いはなんなり匂うシャネルの香
美しく老い美しく終りたい
桜貝一つ忍ばす宝箱
淋しさを救ってくれた迷い猫
原発の被害情報日日違う

大阪市 津 守 なぎさ

入浴のたび被災地へ涙する
ほがらかな傘寿グループ南紀の湯
毎日のリハビリ世間広くなる
一陣の風は早苗をもて遊ぶ
露天風呂森林浴の贅に酔う

大阪市 田 浦 實

早寝早起きお国のためとなってきた
ちよつと高い望みに挑み老い磨く
国旗国歌裁判沙汰の希な国
我が町自慢さつき百鉢咲かす爺
昼のスナックカラオケ歌いリフレッシュ

大阪市 江島谷 勝 弘

赤暖簾赤提灯がボクは好き
一席を設けるからと二年前
何事も真ん中辺の位置にいる
金力がないのでいつも控え目に
情けないローンも組めぬ歳になる

大阪市 原 田 すみ子

娘が親になってゆくのを側で見る
曾孫抱く温みと時の重たさよ
三世代同居の幸は甘辛い
ドッコイシヨ言つてたははと瓜ふたつ
ビギナーズラックで運を使いきる

大阪市 近藤 正

大阪城異彩を放つ彬の碑

手を組んだ腹に一物持ちながら

夏場所八百長なしの組み合わせ

原発は核のゴミ処理できますか

菅内閣メルトダウンに陥った

大阪市 吉村 一風

悪友に鍛えられたる酒旨し

妻は忍者みたいな何か持っている

減らず口叩き合う友酒すすむ

正座した子の話には正座する

よう生きた己れの長寿ひとり酌む

大阪市 川端 一步

自己紹介雅号のいわれ一分で

持ち駒が切れているのに声かかる

原発の戦争ごっこ考えよう

春樹発言わたしも刀磨かねば

飲み放題トイレが何故か混んでいる

大阪市 谷口 義

散髪屋を変えたのかお坊さん

命日や夏には夏の花が咲く

必修科目膝にくる肩にくる

根掘り葉掘り聞いて低温火傷する

戻り梅雨病院にでも行きますか

大阪市 伏見 雅明

バーゲンで掴み損ねた服に会い

見上げると監視カメラもこちら向く

黒握る妻がすべてを差配する

栄養のバランスとれて不味い味

喝采も今では妻の拍手のみ

大阪市 奥村 五月

就活の友に話せぬ五月病

極楽へ一度下見に行けたなら

嘘一つ言えぬ男に騙された

復興に万歳の声大漁旗

美人の湯老人会が皺伸ばす

大阪市 澤田 定子

お洒落して雑種でないと犬散歩

だんだんと階段避ける膝となり

七十五習う絵手紙展示会

昨日まで自惚鏡見てたのだ

草笛を吹いて幼き友想う

大阪市 鶴田 遠野

原発汚染神に救いの手を委ね

震災に甦つて負の記憶

熟年の恋は答を求めない

潤む眼で書いた手紙が誤字脱字

原発へ思考回路を曲げてみる

大阪市 古今堂 蕉子

最後の運使い終って行くあの世
もうゴール見えるかゴール見ていない
持ち金と寿命きつちり合わせたい
節電に関係ないが節酒させ
趣味と友今の私の杖 柱

大阪市 板東 倫子

脱原発に風力地熱太陽光
粗食でも野菜食でもまだ肥る
省エネに団扇ステコ扇風機
会いたくば龍宮城に亡き子居る
増税の予想に家計簿止めにする

大阪市 岩崎 玲子

親鸞の直筆読めずただ眺め
親鸞展人それぞれの鑑賞法
歎異抄やつぱり気になる善と悪
老いてなお心配事が消えぬ日日
囁きも戯事も聞くイヤリング

大阪市 井丸 昌紀

余裕のない男の眼鏡曇ってる
好奇心じわじわ減って老いてゆく
日曜日の夕焼けあしたから仕事
晴れよりも雨を降らせたくなる景色
裕福になっていじめが増えてゆく

大阪市 中村 叡子

日本はよい国ぬくい支援の輪
瞬きも惜しい氷上アスリート
夜のしじま家の軋みにふと亡夫^{あなた}
もういない貴方に山椒炊いてます
あどけない曾孫の仕種夢に見る

大阪市 松尾 柳右子

マイペース私の衣装私流
考えがまるで違うが五十年
ベアルックタワー見上げる橋たもと
袖無しが着づらくなつた八十路坂
ネックレス付ければ姑の目が光る

大阪市 小泉 ひさ乃

真心を素直に受けた恩返し
ある悟り後はかわいいおばあさん
幸せな音甘い空気の中で聞く
紫陽花が雨に揺れてる一周忌
剪定へ寄って外野のお節介

大阪市 小糸 昭子

仕掛けたは良いが引き際分らない
困ったな駆け込み寺は母の膝
物忘れメガネリモコン領収書
プライドを失くしてしまった国になる
お身体に病抱えて被災地へ

大阪市 熊代菜月

茨木市 島田誠一

後戻りせずに歩くと影が言う

恋心持つて傘寿をかけ足で

呼ぼうとも答えてくれぬ人が増え

腹の虫泣くな泣くなとお茶を飲む

病む友の心細気な電話口

大阪狭山市 矢野 梓

梅雨空を見て行動を開始する

誕生日また駄足でやって来た

かつとなる前に腹式深呼吸

母唄びやさしい顔になつて来る

情報に惑わされつつする料理

和泉市 横山 捷也

小さな膳老いた二人の好き嫌い

ときめいた頃には触れぬ同期会

亡き父の賞罰無しの軽い過去

妻多弁離婚の友の噂など

大声を出すけど寂しがり屋だな

茨木市 藤井 正雄

根回しも済ませゆとりの受け答え

貸したのが間違えばつたり来なくなる

栄転を送るホームにいる嫉妬

そおどすえ はんなり京の自己主張

定年へ今日が最後の定期券

暴れてる核にひれ伏している無様

こんなにもデコメールする娘の無口

暗黒の世界も見たか札の罅

そんな日もあったと笑い合うグラス

金持ちにすぐなれそうで買うジャンボ

池田市 栗田 久子

造反の野党も策は出してこぬ

口出しをすれば纏れる糸がある

泥沼に立てば顔つきまで変わる

何を語るか夕陽の中の紅カンナ

咲いたとて夾竹桃は寡黙です

河内長野市 植村 喜代

しんどいけど歩きなはれやと先輩たち

あの世には核なぞないと神仏

同じ月見方いろいろ違ってても

一回しかない人生に私何してる

捻子一つぐらいで効かぬ八十二

河内長野市 坂上 淳司

国境を越えて集まるレスキュー隊

役目とは言え勇敢なレスキュー隊

髭面が優しく笑うボランティア

西方の浄土はかくや万華鏡

少子化の時代眩いマタニティー

河内長野市 村上直樹

蚩呼ぶ子等遠い日の風物詩

黄砂にはどうぞ乗るなよ放射能

思いやり妻のアップは撮らぬ主義

攻めて攻めて攻めた自分史悔いはなし

三途の河渡る日時はまだ極秘

河内長野市 井上喜醉

ああ地球ストレス抱いた走馬灯

散歩には義理で携帯持たされる

衣替え中国製の夏姿

みかん咲く潮風も良し初夏の丘

覇氣がないトラでは済まぬ甲子園

河内長野市 黒岩靖博

初めての異国の旅に孫躁ぐ

孫つれて珊瑚の海でシユノーケル

学び舎を巣立つ生徒に師の涙

一生が学びと悟る習い事

胃検査のカメラ呑むのに涙出て

河内長野市 水谷正子

もう八十路頭と手足磨かねば

歌舞伎観る時だけ元氣嫁笑う

歌舞伎券手に入れてから充実感

自分でも判らぬメモに音を上げる

白い手に指環の似合う友が逝き

岸和田市 堤 檣代

究極の笑いは誰かに伝えたい

娘だねやっぱり心配してくれる

につこりと笑えば少し若くなり

難文を解いてすっきりした気分

すみません勝手気儘に生きてます

岸和田市 雪本珠子

八卦見も自分の余命手に見えず

恋破れ涙を連れて旅に出る

輪の中で個性が右往左往する

肝臓が沈黙破り愚痴りだす

シーサイド遠くの景色ウオッチング

岸和田市 井伊東吉

手入れなどせぬサボテンに赤い花

プランター葱活躍の冷奴

扇風機ストーブチェンジ大仕事

国難に今政争をする時か

這い上れ最下位喘ぐタイガース

岸和田市 原 さよ子

左きき直さず右の手を教え

雑学の祖母は話題にことかかず

野仏のお側がいいと咲く野菊

老いひとり余生のネジをゆるく巻く

趣味なればこそ土砂降りへ出る支度

岸和田市 森 元 ふみよ

堺市 志田 千代

これからが大事被災地手を延べよう
娘より母さんずつとファイターで

脳刺激老化がなんだ追い帰す

カーナビも知らない道を走り抜き

世界中日本にくれた熱い汗

岸和田市 土橋 房枝

それなりの鋭さがある妻でよい

始めから豊かさしか知らぬ子ら

川柳で心をノック一人ごと

さわやかに過ごして六十路ふり返る

一票に報いてくれぬ政

堺市 西村 りつえ

揉め事も自然にとけた祭り酒

手土産に欲な心が打ちとける

ありがとうに凍てた心が癒される

うつつらと色香まだあり抱く曾孫

残り火はもう届かなく遠い人

堺市 宮本 かりん

近道を選んで迷うことばかり

世の進歩ふと懐かしくなる昔

リハビリの散歩へ向かい風が吹く

生真面目な足跡残し兄が逝く

しつかりせよと背中叩いて風が過ぎ

避難所を出るあてもなく日が暮れる
化粧するのが億劫になつてきた

ゴシゴシと汗拭きとれるノーメイク

クールビズでも二の腕は出せません

うちとけるまでは時間がいるのです

堺市 山本 半銭

痩せるほど焦がれた人を抜き使う

痩せたいは御馳走が出る前のこと

今の世に空也上人居ると言う

腹黒い自分が透けて見えてくる

平成の恐怖に黒い雨降るや

堺市 源田 八千代

汗ばんだ肌にうれしい青葉風

日本のごたごた政治嗤われる

世の中が我中心に回り出し

品切れもおかまいなしにマイペース

お互いにおすそ分けする隣組

堺市 奥 時雄

僕だけが本音喋って損をする

飛び級で昇格させる社長の子

たんまりと貯めて辞める気ないパート

体温の一度の違い思い知る

ご予約がお得と葬儀屋に言われ

堺市村上玄也

四條畷市吉岡修

年寄りと言うのに早起きが苦手
氣付かず撮られた僕はじいさんだ
リハビリをしても老化に追いつけず
よろけたら堪えきれずに転けてまう
この歳になれば良い夢など見ない

堺市荻野像山

禁煙を言い出してから五年たつ
贅沢を言えば苦も無く終わりたい
身に余るお世辞も悪い氣がしない
しっかりせなしょうない夫のんびり屋
悪くなりや他人の所為にする時勢

堺市遠山唯教

充分にあつた時間を無駄にする
高齢化がすすみ受け皿割れてゆく
ど忘れを愛嬌とする歳になり
ふるさとの新町名がなじまない
哲学が刻み込まれた深い皺

堺市大隅克博

「ねばならぬ」やめて気ままにやってみる
イエスノー枕はどこへ行つたやら
奥さんに従つとけと天の声
支払を終えて夕餉の妻の酌
抱き癖がつくのが嫌で鬼になる

白黒も足して二で割りやすむ話
目くじらを立てて境目引ききたがる
入門書近道はないことを知る
傾くと見せてどっこい弥次郎兵衛
傷口へ魔女が七味をかけにくる

吹田市野下之男

非常時を忘れちゃ困る永田町
龍馬なら今の日本をどげんする
神様も原子力には弱いです
飼い主と別れる牛も目に涙
初恋をそのままにして原爆忌

吹田市太田昭

補聴器を外し諍いから逃れ
梅雨しとど罪の重さが肩に来る
性善説伏せのかたちで息をする
スポニチを買い吉野家で飯を食い
寂しさを売って小鳥を買いにゆく

吹田市大谷篤子

主治医から風をもらつて生きている
バラの木は我家の庭で一等地
重い決断大きな手術で生かされる
手術後は一喜一憂生きている
大手術何度万歳したことか

吹田市 瀬戸 まさよ

長電話健康に善し一時間

首のしわ隠す太めのネックレス

下駄箱を改名しよう靴箱に

漬物の高価卵よありがとう

買い出しは私娘が家のシェフ

吹田市 木下 敏子

ひとりでも確と立つてる影法師

髪切ってさらっと嫌なこと忘れ

あきらめず生きてるうちは歩きます

傷だらけになっても地球まだまるとい

お互いに食べ頃ですと言う見合い

高石市 浅野 房子

原発の映像つらくテレビ消す

紫陽花に亡き人偲ぶ夕間暮れ

斜線引き消したい男二三三人

古家も私もひびがあちこちに

先見の明などは無い後手を踏む

高槻市 左右田 泰雄

パンジーもうつつむいている庭の午後

ケイタイで風の噂を確かめる

深呼吸してから計る血圧計

置き傘の善意がしみる俄雨

待ちぼうけうつむいているお下げ髪

高槻市 富田 美義

淀みなく老い凜とした受け応え

煮え湯飲まされた人から招待状

人前で言えぬ苦勞を持つ笑顔

過ぎたこと忘れ我が歳わかまえる

まだ生きる命が金を出し渋る

高槻市 安田 忠子

大震災今の命をふと思う

草千里命華やぐ風の彩

バイキング水上バスの見える席

天変地異日本の四季が狂い出す

年寄になりたいと言う中二の子

高槻市 乙倉 武史

四海波静かを祈念する庶民

混沌の世に骨のある政治欲し

懸命に黙々感謝自衛隊

原点に還れと神のお告げかも

想定外明日は我が身だ頑張ろう

高槻市 片山 かずお

欠片一つにロマン語らず考古学

断捨離の思い五欲が打ち砕く

落ち着いてきたのかルージュ淡くなる

汗かかぬ人が正論振りかざす

気づかいをお節介だと疎まれる

高槻市 井上 照子

妙齡の婦人に似たり鉢の花

大災害重ね恐怖の放射能

友人の遺影明るい声聞こゆ

仲良し会老いて迎えたお別れ会

同窓会年毎寒い風が吹く

高槻市 杉本 義昭

元気ある声いつ戻る町工場

ありのままを塗るとつるんとなった僕

喧嘩ばかりの兄弟だった柱傷

桃缶の桃がつるんと出るエロス

ジャンジャンジャンまだ半鐘がなっている

高槻市 佐甲 昭二

わくわくと宝を探すのみの市

ベテランの失敗談に勇氣湧き

ポケットが狭くて夢が膨らまぬ

クイズ解く妻に聞く耳なさそうだ

念入りに教わり路地を抜け出せず

豊中市 藤井 則彦

迷惑もかけずに生きて残る悔い

修飾語ばかりでかわすご答弁

喜寿ですが元気の在庫ありますよ

バランスが良過ぎて疎まれる夫婦

言い訳が湧き出る遅刻常習者

豊中市 水野 黒兎

深呼吸肺が若葉に染まるまで

カタカナ語溢れる初夏のカフェテラス

梅雨空に負けてはならぬ竹とんぼ

夏まつり紅緒の下駄の遠い音

雑踏に何かルールのある速度

豊中市 松尾 美智代

おはようの挨拶楽し朝の町

チュンチュン雀鳩も鴉も元気です

二十年ぶり元気な友に活もらう

辛い事越えた友です美しい

人間の知恵が人間追いつめる

豊中市 松村 里江

コンパクトバックミラーにして覗き

再会はどちらも連れがありました

泣いてはるそつとしいてあげましょう

むなしさに独りヒザ抱く広い部屋

ラブサイン花の切手を逆に貼る

富田林市 片岡 智恵子

議事堂と建屋がだぶる昨日今日

車事故で逝った友の名見るニュース

疑心暗鬼胸のあたりが揺れている

涙腺のゆるむドラマを見てあかず

決断はひとつ線香の消えるまで

富田林市 中井アキ

裏切った日から私も風の中
残り火を集めてみても水中花
遺された庭木に赤い花が咲く
挽回のチャンス私を賭けている
白線の中で安易な多数決

寝屋川市 籠島恵子

本棚に飾っています理想論
沈黙は金だと今更に思う
大丈夫自分に言っつきかせている
鯉のほり泳がせダムを喜ばす
ちまちまと食べさせられているコース

寝屋川市 森田麗

節電の夏図書館に顔馴染
紫陽花を絵皿に溶かす私色
ブロック塀に夏化粧する蔦若葉
母さんは犬も金魚も肥らせる
大津波涙は化粧まで溶かす

寝屋川市 富山ルイ子

東日本へ祈り続ける三ヶ月
新聞社へあしなが募金どこか聞く
父を母を亡くした子供あまた居て
良くも悪くも鴨にされてる同居
新しい事にも挑戦する気骨

寝屋川市 森茜

しみじみとおたがいさまで言える齡
向き合った雲も私も一度きり
傘ばたばた途方に暮れる置きどころ
西日除けゴーヤ植え足す夏の陣
すぐ熱をだして童女にかえっていく

寝屋川市 平松かすみ

こんな時豆秋さんはどう詠むか
新築の我家に住めぬ液状化
ばあちゃんはお茶殻撒いてエコ掃除
叔母偲ぶ初めて食べた茶碗むし
私の限が解れば忙しい

寝屋川市 太田とし子

開店と閉店が呼ぶ露地に立つ
あの方の笑いが残る写真帖
柏餅柱のきずがない社会
被害地にアジサイ喜ぶ雨が降る
あすは晴今日の続きの命なり

羽曳野市 福田悦子

閑取の素足男を見せつける
困ったら尋ねて行ける友がいる
夏祭り下駄とゆかたがまだ残る
地藏盆今年も願う子の育ち
引導鐘天王寺さんの夏の音

羽曳野市 徳山 みつこ

メルトダウン想定外が跋扈する

54 基いつか反逆する器

見るテレビなくて会話が弾む夜

ワクチン療法か列島の余震

大鉢にソーメン涼風をのせて

羽曳野市 永田 章司

注文の服にこだわる見栄っ張り

代案も持たずに叫ぶ音降ろし

才はある努力しないが玉に瑕

今日の海想像出来ぬ浪の牙

忘れてた川の字に寝る旅の宿

羽曳野市 安芸田 泰子

風鈴を見付けたらしい夜の風

いつからかパパとは呼ばぬ帰省の子

待つという幸せがある予定表

人嫌い自分を隠すサングラス

旧友と絆ぬくめている訛

羽曳野市 吉川 寿美

魔の一瞬忘れたように風いだ海

帯きりり女だてらの意地通す

争うて夜の静寂を深くする

世渡りの美学よ妻の丸い鼻

ハードルを越えては夢をふくらます

羽曳野市 酒井 一壺

男には避けてはならぬ道がある

生き下手な僕だが道は間違えぬ

ニアミスの危ないこと聞かされる

君だけは残れと辞表破られる

今日もまた平凡だったありがとう

羽曳野市 三好 専平

酒断ちて命の重さ尊しや

烏なぜ鳴くのデコちゃん逝きました

神話なら嘘にきまっているやない

豆の花きつとあの娘が泣いている

クールビズ家でステテコ寝惚けづら

阪南市 森村 美花

体力はないが頑固は持ち合す

大輪の花だ大地のいい匂い

にこやかに筋を通してゆずらない

駅前のコンサート聞く昼下り

呑みこんでまた呑み込んで朝の駅

東大阪市 佐々木 満作

積年の誤解がとけて胸撫でる

凸凹や曲がりくねった道が好き

信念を曲げずに生きた父の背

夏バテは風呂とビールで吹っ飛ばす

大らかに生きて子の世話にはならぬ

東大阪市 米田水昇

回遊式庭園めぐる車椅子

芽吹きの新木漏れ日今日の幸うたう

巨石群故郷思いそそり立つ

水景園滝の如くに水落下

あやめ科の種類教わる池の端

東大阪市 北村賢子

言葉より愛を語っている瞳

復興の明日へきらめく風の海

引き際はのらりくらりと煙に巻く

生き甲斐へ今も脈打つものがある

高望み捨てて柔和な顔になる

枚方市 安達忠央

逆風が俺の度胸を試してる

起き上がりよみがえる妻夢にみる

ノーというただ一言を吐く度胸

赤ちゃんが起きるとみんな声ひそめ

高望みせずにこつこつ喜寿を越え

枚方市 海老池洋

メルトダウン国民騙すこと勿れ

ツバメにも故郷あつて無人駅

父としてしかと鉢巻子に渡す

蛇行してみたい日もある父の川

口止めの話が風にのりたがる

枚方市 伊達郁夫

母になり語尾が半音高くなる

どちらにも転げるように座つとく

スベアーで出番来ぬまま錆びていく

結論が濁って話深くなる

娘が嫁ぎやつと夫婦が会話する

枚方市 小林わこ

地植えです今年も咲いた君子蘭

どんな土鉢がよいのか苗に聞く

お取り寄せ色も香りも愛でる土

紫陽花が土の顔色みて変わる

花の雨ひとりぼっちを思い知る

枚方市 二宮紫鳳

新緑のパワーみなぎるハイキング

花しようぶ水面揺らして夏来たる

白百合の香りほのかに母偲ぶ

病む友に文したためて雨上がり

長雨に紫陽花愛でてティータム

枚方市 二宮山久

父の日へ絵手紙添えて孫の笑み

梅雨晴れ間ふとんだたきのこだまする

マスコミが騒ぎ始めた国の舵

夢叶う時期だと背中押してくれ

不況にも慣れた夫婦の知恵袋

藤井寺市 高田 美代子

私のボディも車検してもらう
安全と安心の国に住み

裏側を覗く余生を知りたくて

肝心なことを忘れていた ぽかん

濃淡も墨の掠れも人生符

藤井寺市 俣野 登志子

お相手のご立派すぎるのも苦痛

込み入った話に脳が後ろ向く

近頃は娘に庇われるこそばゆさ

湿度80天然パーマ踊ってる

手間かけた料理がお気に召さぬ顔

藤井寺市 津田 シルク

古稀になりこんなに深い笑い皺

激辛カレー食べて梅雨など吹つとばす

満月を跳びこえようか水たまり

風の音点滴と聞く午前二時

生めよ増やせよゴキブリの大家族

藤井寺市 若松 雅枝

一日一善笑って暮らす事にする

シンプルな里の厨に母の詩

携帯もシンプルが良い老いの指

就活が実って仰ぐ青い空

孫の守りテレビに役目押し付ける

藤井寺市 伊藤 アヤ子

流されてもあなたの里はここにある

エコ上手グリンすだが我が家にも

涼しげな暖簾くぐればわらび餅

写真に残るあの顔あの笑顔

振り返りいい事ばかり思い出す

藤井寺市 鈴木 いさお

語り部に訊く戦争の裏話

朱鷺よ朱鷺明日の糧は足りてるか

知りたがり喋りたがりで淋しがり

エンドウを貰ったお返しに釘煮

貧乏したんだね手を見れば判る

藤井寺市 吉田 喜代子

故障してレンジ無しでは暮らせない

命日に睡蓮見事咲きました

団扇作り自作川柳書いて見る

サラダ菜もさぞ旨かろう虫が先

気は善いが頼りにならぬ軽い人

藤井寺市 太田 扶美代

何が起きてもここはわたしの好きな街

女には悲しみ溜める壺がある

天も地もこの頃少し不機嫌で

迷ってるあいだに次ページになった

総桐のタンス時々撫でてます

藤井寺市 増井 ヨシ枝

八尾市 宮崎 シマ子

アマリス紅白咲いて初夏の風
不揃いですが愛いっぱいの仏殿花
デイスービス八十歳が恋せよと
キラキラとしてます恋をしています
歩くという望みは捨てぬ車椅子

箕面市 広島 巴子

蝸牛しつかり防護雨の中
紫陽花で試験紙がわり無理かしら
雨後の滝大迫力にパワー受け
阿波の地で踊る阿呆になりました
夏時間しつかり昼寝とってます

箕面市 出口 セツ子

おめでとう子からメールの誕生日
誕生日いまだに夫覚えない
年金の相談に行く誕生日
年金で生きてはいけぬどないしょう
子と国に迷惑かけぬよう生きる

守口市 井上 桂作

改めて地震の備え慎重に
東電の原子炉すでに壊れてた
頑張ろう大震災を踏み越えて
リアリズム アラブに春がやってくる
放射能なにはともあれ逃げなさい

富士の山から転んだような怪我をする
まわりの人の熱い情けをひとり占め
ナースみな美人揃いで嬉しいなあ
掃除して礼言うてくれるヘルパーさん
清拭足湯肩の凝りまでとれました

八尾市 内海 幸生

忘れっぽい性を知ってる百度石
眼を閉じる開けると負けを認めそう
負け戦水琴窟と夜を明かす
歩けない足が凝視の旅テレビ
先ずまずのカレーになったで亡妻にどう

八尾市 村上 ミツ子

節電へ冷夏を期待してしまう
まだ続きそう見たくない茶番劇
すぐいけそうで届かない向こう岸
極限へ不思議に力湧きそうだ
シャガールの画布へ幻想色の詩

八尾市 高杉 千歩

自守自戒厳しい夏をどう生きる
それなりに答え見つけて夏覚悟
感謝して断捨離少し軽くなる
老人に厳しい歩道橋の高さ
露の世としみじみ万華鏡覗く

八尾市 寺川 はじむ

欲だけはたんまりあつて道半ば
ダウンサイズ人の心も小さくする
たれかれもサイズが合わぬ総理の座
我が家にも自主節電の波寄せる
企業戦士ふと懂れる青テント

大阪府 野田 栄 呼

現在は過去の時間と言う刹那
リハビリの効果おしゃべり二人連れ
お陽さまに合わせて寝起き節電へ
茶葉摘んでわが家の味をいとおしむ
貧乏がしみ込んでいる戦中派

大阪府 桑田 ゆきの

井の蛙温故知新を知らぬまま
献血の青年凜と瞳澄む
入口で出口探している律気
郭公は森の深さを知っている
介護椅子作り笑いと知りながら

大阪府 初山 隆 盛

仮設の灯やと手にするプライバシー
浮雲に今日の涙は捨てました
荒っぽい男結びが解けない
永遠の還らぬ旅に発った妻
永遠の住まいに光る墓がある

大阪府 米澤 俣子

瑞瑞しい枇杷の実初夏を連れてくる
老いたらし灯ともし頃の人恋し
佳人にも似て紫の花菖蒲
迷惑は掛けるな今も亡母の声
自分の家忘れぬうちは出かけます

神戸市 木村 貴代子

人生を海に吞まれてまた海へ
いつも通りなんとうれしい事だろう
症状を言えば薬がまた増える
見る所変えれば人は違いくる
一芸に打ち込む若さ匂い立つ

神戸市 山口 美穂

船頭を争う日本丸の危機
揉めている国会これは人災だ
もうとまだ狭間で喜寿を認めます
しんどいなんて言っておれない梅雨晴れ間
いい話持ってお帰りブーメラン

神戸市 伊勢田 毅

「福島」を「フクシマ」にした初動ミス
義援金金庫で眠る無為無策
車窓の雫拭いてあてない一人旅
老夫婦ネジを巻いてる梅雨晴れ間
ひと雫ふくませ亡母の紅を引く

神戸市 山田 婦美子

明石市 梶谷 和郎

不整脈友の計報に立ち止まる

茶毘に伏す生きた証の薄煙

同じこと同じ返事で日が暮れる

飛入りがあるから油断など出来ぬ

さやかなマイ・ガーデンの茄子胡瓜

神戸市 山崎 武彦

飛んでゆく母似のひとと会った日は

微笑めばほほえみ返す車椅子

来てもすぐ帰る息子を見送りぬ

同じこと言うて最後は子の自慢

満天の星のひとつを見詰めてる

神戸市 早川 孝子

あきらめぬオールジャパンの現場力

政治だけオールジャパンになりきれず

幸せを編んだはこべの首飾り

ぞろぞろといえるだけなのか永田町

子育てに刻み込まれた母の色

相生市 中塚 礎石

肩書きを消した名刺で握手する

それぞれの露地に違った風が吹く

死ぬまでの履歴書を妻持っている

一病を抱えて登る八十路坂

悪役を背負うて母は杖をつき

この両手幸せ掴むためにある
まあまあとと思うと今日もよく寝れる
幸せを測るモノサシ変えてみる
円満な夫婦互いを自慢する
割り勘の余り義捐のもとにする

芦屋市 竹山 千賀子

幼子の手から未来がこぼれ出る

方向を変えると見える広い道

読書中脳の引出し開けておく

遺伝子に物申したい目鼻立ち

命日はどこかで亡夫の声がする

尼崎市 林 昭三

シルバーの二人のダンス優雅なり

ダンスとや名のみに踊る島の盆

友が摘み今年も新茶竹馬の香

幾許か二人の余生仕上げてる

永田町瓦礫の山が出来かから

尼崎市 山田 耕治

長寿国やつとわたしは七十五

さあやろう先ずは机を拭いてから

ふたたびのご用童話を読まされる

贅沢な時間いただく独り住み

集って無難なところ話し合い

尼崎市 軸丸勝己

地盤沈下そこまでやるか大地震
クールビズ残すネクタイ黒二本
薔薇公園頬寄せ仰ぐ車椅子
車椅子お出でお出でと薔薇匂う
父の日に着る時間なきシャツ届く

尼崎市 長浜美籠

敏寄せも覚悟しているクールビズ
斜に構えた猫と笑止な睨み合い
性懲りも無くひと月が泡と消え
捨てきれぬ郷愁がある日和下駄
キッチンで時を忘れる摩訶不思議

尼崎市 加川靖鬼

重箱をほじくる癖が直らない
自己主張やめよう喜寿の下り坂
サプリメント余った薬飲んで置く
何よりも雨が嫌いなツケマツゲ
大器晩成まだまだ先の白寿まで

尼崎市 藤岡りこ

道訪ねウロウロ同じ人に聞く
初恋は心に甘いトゲ残す
想像力孫には遠く及ばない
五線譜におたまじゃくしのわらべ歌
妻たちの井戸端会議ランチ付き

伊丹市 山崎君子

胡蝶蘭逝った子供あの笑顔
セーラー服少女の頃をなつかしく
鯉のぼりあの子天国遠い国
晴れた空鯉のぼり見て亡子を思う
今日田植え赤いタスキで若返る

加西市 金川宣子

時々はスイッチバックして登る
言い訳の嘘から誤解走り出す
下手な絵が加筆一つで生き返る
春盛り意気込み見せるこぼれ種
人込みのよそいき声は聞こえない

川西市 米原雪子

折りタタミどのバッグにも入れておこ
孫は知らない爺ちゃんの苦い顔
甘く見た苦い経験あればこそ
楽しみを見付けに今日も歩いてる
欠席の律儀な電話友卒寿

川西市 西内朋月

さわやかな目覚め良いこと有りそう
辛酸を舐めて仏の顔になり
手拍子に調子合わせて一気飲み
新緑の明かりがうまい散歩道
孫たちを引き連れていく回る寿司

三田市 北野 哲男

三田市 田中 章子

山彦の体験させる夏休み
掌中の珠も最近反抗期

賞金を寄付する遼の予選落ち

ガードマン制服脱げばおじいさん

じんわりと漢方薬のような祖母

三田市 久保田 千代

大阪で生まれふるさとないみたい

再会のと きめき胸に紅を選ぶ

ニューフェース新緑つれてやつてくる

悩みありいよいよ増してくる歯痛

若い頃硬派でダンスなど無縁

三田市 石原 歳子

朝寝坊速いリズムで葉を刻む

老いたとは思いたくない置き忘れ

我儘な夫だけれど憎めない

記念切手会社宛には使わない

黒子まで母とおんなじ位置にある

三田市 福田 好文

歯並びは悪いが皆自前です

据え膳に性善説が揺れ動く

真夜中の電話とつさに計の予感

幸せに気付かぬうちに来る不幸

前向きな人は下見て歩かない

元気になるあなたが側にいるだけで
水たまり孫とそろいのレインシューズ
日本人よりニホンよく知る人の帰化
新駅舎ツバメのお宿あるゆとり
二人だから笑いの種を拾い合う

三田市 上垣 キヨミ

川柳誌私を介護してくれる

パソコンに颯られてる午前二時

被災地を忘れ民主の内輪もめ

忠告に人の心の底を読む

立ち話入道雲に叱られる

西宮市 秋元 てる

お変わりもなくって：が一番老いの日々

話し好きの老母で古里ばかり恋う

てこずらす子にも一縷の期待持つ

遅咲きの茄子よ慌てる事はない

どんな時もお互い様とさりげなし

西宮市 西口 いわゑ

花ならば想定外もよろこんで

さくらんぼ泣きたい時は泣きなさい

文明が野良風景を変えてゆく

童謡に雫をもらう枯れた脳

意味のないことも時々して生きる

西宮市 山 本 義 子

引越しに昔の錆はおいてくる
昔つて巻きもどせない 蓮は白
こつこつと昔がひびく石畳
むかしむかし戀は詩歌ですの
九分九厘国を亡ぼすのは男

西宮市 亀 岡 哲 子

誤作動を修正しつつ夫婦する
後遺症三日覚悟で草を引く
老いたるか半日景色見て飽きず
想定外の寿命へ夢を組み直す
傘寿なり国民学校同窓会

西宮市 緒 方 美 津 子

コンピニとよろず屋とでは似て非なり
窓際の机にはパソコンが無い
新人にパソコン習つて課長
間の手を入れると呑みすぎる夫
邪魔になる枇杷の木なのに実をつける

西宮市 藤 本 直

人と人微妙な距離ですれ違い
生きたなあ独りの時は声に出し
息子にもあつた頑固のDNA
いろいろと禁句の増える夫婦仲
嫁姑辞書に敵とは書いてない

西宮市 吉 井 菜 々 子

週末のコーヒーマイルは賑やかに
もどかしいメールに爪が折れました
仏滅か無口なままでさようなら
追いかけてきたのは夕日だけでした
生ビールふたつ並んで仲直り

姫路市 古 川 奮 水

相席の客がよもやの同級生
シェーカーをふらせて飲んだジンフイズ
認知症因みに思う核家族
一人住みだんだん増える通話料
マンションに住んでマンション形の墓

奈良市 米 田 恭 昌

雨好きの河童も嫌う黒い雨
小さい役こうて出るのも自衛策
紅つけてはんなり女からおんな
病床の指示小うるさい司令塔
シベリアの語り部柳友逝く五月闇(久峰氏を悼む)

奈良市 山 本 柳 昌

お日さまが笑うと土もよう笑う
土踏まず地球の気嫌確と聞く
トンネルを抜けたら発芽すると決め
しがらみを逃げて腑抜けな貌で居る
終着駅グッドだったと言うつもり

奈良市 辻内 げんえい

やっときた了解だけの息子のメール
なついた孫大事な時はママを呼ぶ
酒飲んで毒づく友が泣いている
万葉に嵌って旅に友集う
留守番で孫と弁当至福時

奈良市 加門 萌子

ルンルンと今日は外食楽しもう
ありがとう今日も我が家にいる安堵
何日も経つが变りのない瓦礫
手に負えぬまるで怪獣原発
わたくしにも出来る足長おじさんに

奈良市 岩 本 浩 二

この夏は蚊帳と団扇と風鈴と
出勤はアロハ短パン・サンダルで
愚痴られるとき難聴のふりをする
外面が良すぎて妻を泣かせてる
竹森の庵に初夏の風通る

奈良市 阿 部 紀 子

幼少の記憶を辿り祖父の墓
笑わせて喜ばすため嘘をまぜ
アフロディテ豊満な像女の美
放射線見えたらとても生きれない
盂蘭盆をやつと仮設で祀ります

生駒市 飛 永 ふりこ

万緑がこだわり掬うカウンセラー
ちよつぴりの自慢話が裏返り
ポランティア仲間根っこで通じ合う
愛犬の影とじゃれ合う散歩道
善人の相がジェラシー吹っかける

香芝市 大内 朝子

ひまわりのように生きたい笑い皺
舞い上がる心押さえてまだ女
泡沫の恋だと悟る夏帽子
感動の涙で心丸洗い
抽出の元気で迎え打つ老いよ

橿原市 安 土 理 恵

終わるつもりだけどノックをもう一度
罵って何かいいことがありますか
真珠ほろほろ糸一本が手にのこる
あきらめた針を千本捨てました
人嫌いのつゆ草拗ねているんだね

橿原市 居 谷 真理子

毎日を消えぬ程度の火で煮込む
五月ならば咲きほうけるも良しとする
不意に風そうね背すじを伸ばさなきや
銀色の尻尾だチャンスだったんだ
悲しみの片付け方がわからない

大和郡山市 坊 農 柳 弘

しがらみをゆるりと解く風の盆
敗戦を終戦記念と言う愚か

明日がある無いかも知れぬ盆の月
サマータイム昭和に生きた走馬灯
優柔不断愛はいつでも日向水

奈良県 渡 辺 富 子

断捨離をせかす檜山近くなる
百%まぼろしだった理想論

ムームーで夏を乗り切るつもりです
古いジョーク笑い合ってるトコロテン
見つめるとかすかに笑う地蔵様

和歌山市 田 中 み ね

もう辞める何回いうて続く道
ムードメーカー言われ嬉しい役どころ
雨天決行旨いケーキを食べに行く
何はともあれ陽気な妻で良しとする
失言もするわこれだけ喋ったら

和歌山市 武 本 碧

日溜りへ和む視線が柔かい
不揃いのりんごに託す明日の夢
丸呑みにした甘言のつけがくる
即席のジョークで躲す風当り
虚と実が揺れて悪女になり切れぬ

和歌山市 古久保 和 子

キャンパスの白から涙止まらない
黙祷を何べんしてもまだ足りぬ
身勝手な論理に森が枯れて行く
人間がちよっと間借りをする地球
雨漏りを楽しむ余裕有り夫婦

和歌山市 玉 置 当 代

貼り替えた障子が孫の画布となる
ごますりの知恵ならたんと持っている
幸運を呼び込む窓を開けておく
食べるものすべてが汚染されていく
投句したこの安堵感何だろう

和歌山市 上 田 紀 子

掌にあつた昔が消えてゆく
ホップステップ乗ってみたいな綿の雲
発酵が過ぎたか甘さ消えた妻
平凡が贅沢でしたエコ暮らし
前頭葉なだめ大暑に立ち向かう

和歌山市 坂 部 紀 久 子

大方は自慢話のまま朽ちる
入院の噂ちらほら同じ年
一人ですアリバイなどはありません
湯加減の設定一度下げて初夏
花の水替えて思わず深呼吸

和歌山市 松尾和香

田辺市 岡本昇

簪目に心洗われ墓参り

晴舞台十年続く趣味の幸

青い鳥見つけた僕の遠回り

絵手紙のはみ出す幸に春の音

マイペースいつも笑顔で生きられる

和歌山市 岩本美智子

戦中派水団欲しくなる不思議

食欲を嘆くなかれよ体重計

ベッド替わる小さくしたのか太ったか

風呂場への雨も裸でも困る

花いっぱい写真の孫とお茶の会

和歌山市 堀富美子

逆らえぬ流れに明日の向き変える

神経痛わたしの五体シヨートする

妥協せぬ鬼が私の背を突く

捻子緩む右左脳エゴが突つ走る

虫干しへ湿るハートを陽に晒す

海安市 堂上泰女

小二つて凄いな紙バックの玩具

原子炉も収束せずに早や梅雨に

ジューンブライド親戚だけの地味婚で

およそ世辞言わぬ嫁さんいとおしい

衝動買いの予防デパート下見する

勘というさし金持った宮大工

腕一本魚捌いて飯を食う

脳と足つながっていてまだ歩く

震度七とつさに腰は上げられぬ

胸襟を開いて孫と手をつなぐ

鳥取市 鈴木公弘

三・一一永久に忘れることはない

機上から泣く赤茶けた津波あと

震災の涙を無駄にするなかれ

牛タンを食した夜の寝苦しさ

考えるふりしていたら眠くなり

鳥取市 倉益一瑤

連休の真ん中辺にある孤独

わたくしの過去を語れば赤すぎる

逆噴射させたい雨の日が続く

幸せを問われポケットふと探す

阿修羅像眉間の皺にある苦悩

鳥取市 夏目一粹

にんげんの裏を覗いて生きている

なれてきて外の喫煙おつなもの

雑草の中でもがいているスマイル

金持ちが生きのびるとは限らない

知っている話知らない顔をする

鳥取市 田 中 一 眸

今年もね亡父と語り鮎を焼く
つまりが あつて私の今がある
寄り添つて話聞いてる昼下がり
紫陽花に覚悟あるかと問われてる
ちぎれ雲あなたも鳥合できないか

鳥取市 中 村 金 祥

うるさいと思うな蟬の愛の声
銀婚へ愛の残高比べ合う
行つて来るよ妻は新聞読んだまま
やり直すことに土台はたじろがず
通夜の席歌え歌えと叔父が言う

鳥取市 中 宇 地 秀 四

十七の文字にロマンを植付ける
故郷の野辺に庵りて風を聴く
その時は選んで欲しい安楽死
夢の星五万光年先にある
文化国子供は外で遊べない

鳥取市 春 木 圭 一 郎

戦死した父の遺影は若過ぎる
今もなお強く明るい母がいる
三人の子育て母の誇りなり
人並みに暮らしみんなにありがとう
お日様はじつと見ている人の所作

鳥取市 両 川 無 限

赤信号ふたつ分だけ遅刻する
ふと我にかえる男の駅がある
味方から敵に変わってゆく鏡
虹ひとつ原風景に書き添える
駆け出して悔し涙を振り払う

鳥取市 土 橋 睦 子

一期一会見送る情け知りつくす
新盆にビール供えた伯父の墓
出番なく納戸に眠る味噌の樽
雑音の中で探した孫の声
高い服似合わぬ私初対面

鳥取市 土 橋 はるお

過去の傷誰にもひとつ二つある
過去のこいつまで穿りや気がすむの
押し込んだ知恵がなかなか出て来ない
押し売りが負けて黙って帰っちゃう
干潮時竜宮城がある渚

鳥取市 福 西 茶 子

ほとけさま道楽すこししています
不揃いの文字で恋文など書けぬ
タカになる修業百年かかりそう
たばこ税納めて肩身せまく棲む
いろいろとあり負けること選びます

鳥取市 岸 本 孝 子

腹たてぬよういつもおなかは満たしとく

聞き上手情報たんと持っている

老け顔は白髪が増えたせいだった

人生の節目を飾る写真帳

急かされて地デジのテレビやつと買い

鳥取市 高 浜 勇

ゴロ寝する言い訳の雨やんでいる

雨もりの家と夫婦のすき間風

ふえすぎた庭の緑がわるさする

しなやかに伸びた時代もあったゴム

まな板の上研修医拒否できぬ

鳥取市 加 藤 茶 人

謙遜と自慢が混じる言葉尻

頑張ろうとだけ頑張ればすむの

貧すれば肩書き時に重荷かも

外づらが良い分我家では太鼓

パイパイを両手広げて嫌な人

鳥取市 深 澤 千 恵 子

前向きな心が幸を連れて来る

ひとことで心を揺らすほめ上手

控え目の中間色でまろく生き

言い訳は短い方がぼろが出ず

ゲームなら戦子供に許す親

鳥取市 吉 田 弘 子

老いてこそプラス思考で立ち向かう

仏前に座れば背筋しゃんとする

お喋りの人と承知で言う内緒

ビン詰めジャムはとつても社交好き

あっちこち緑カーテン田舎でも

鳥取市 田 村 邦 昭

憎しみを捨てるときつといい笑顔

若いうち楽に過ごせば老いに泣く

不揃いでいい個性だけみえてくる

あれそれで理解ができて老いふたり

背なに手が届いてやつと安心し

鳥取市 西 川 和 子

集会の麦茶井戸水で冷やす

ほとほりを冷ます畑を打ちながら

ほどほどが出来ず畑にしがみ付く

ほどほどにすれば中途半端になる

ほどほど個性上手に世を渡る

鳥取市 池 原 天 馬

大震災消えた故郷夢のなか

原発で野山のめぐみ食べられず

原発事故うつろう季節封印す

避難指示鳥けものまで届いたか

守宮出る今までどこに暮してた

鳥取市 池澤大鯨

熟れ頃は売り頃なのを自覚せず
コンビニがあるから気軽夜食する
夜行性コンビニの灯に誘われる
休耕地荒れたままだが他人の土地
鱗を剥がすように瓦を風が剥ぎ

鳥取市 宮脇道子

老いの身は彼方此方捻子が緩んでる
襤褸布巾でも捨てきれない戦中派
老いた捻子わかつていても締らない
踏まれても幸福ですと野のすみれ
ゴーヤの葉節電の役自慢顔

鳥取市 平尾菜美

気まぐれの愛ベツトから拒まれる
絞られる豆腐命をしたたらす
さまよった挙句の果ての句読点
分身の娘菩薩と現われる
生き延びる予感明日を模索する

鳥取市 吉田孔美子

お喋りに酔ってビールが欲しくなる
お喋りに負けた運転手とナビと
吉か凶かパドックの勇み足
声掛けた同級生のお母さん
着ても着なくても宝物のドレス

鳥取市 横田春名

枯木でもしつかり動くありがたい
八十路すぎ末っ子気質でる夫
置き忘れ家族疑い自省する
政局の話ばあちゃん口出すな
初節句贈った孫は母となり

鳥取市 奥谷彩子

砂の塔も熱い想いも消す渚
花も実もつけ自己主張せぬ木の根っこ
子育てに寡黙な母のしつけ糸
民謡も童話も好きな土の橋
幸せのぬるま湯五感にぶくする

鳥取市 近藤佳子

母の歳超えても母に叱られる
遠まわりして廃校のさくら見に
久方に朋友訪うて美味い酒
学徒動員の町を歩いてみたくなる
指折って未完の夢を数えてる

鳥取市 永原昌鼓

困難を越えて人間徳つける
汗かいた量で決めたい人の価値
問診へ医者はパソコン打つばかり
人類のエゴへ地球が怒りだ
情報の渦に溺れている河童

鳥取市 鈴木 一弘

お説教冷まして食った昼のめし
気まぐれに一口のった宝くじ
不揃いな歯なみおしやべり板に水
風評は冷ましてから飲む置き薬
ござ敷いて客を迎えるおひなさま

鳥取市 竹口 清信

七癖も有るか数えたことが無い
無くなった物の数などかぞえない
腹立てぬ薬は知恵の他に無い
無い物が欲しい持病は治らない
忘れるな地獄の沙汰の袖の下

鳥取市 前田 孝子

ネタがない夫相手にひとひねり
穏やかな二人暮らしに犬笑う
この国の船は沈没乗りかえろ
日本を外から見ると良い国だ
先入観持ったら罪が裁けない

倉吉市 山中 康子

理想から外れ気ままなかごの鳥
教室の太陽だった和枝さん(最上和枝さん五月十八日逝去)
夫を立て倫理の教えきざみこむ
傾聴であなたの憂さがとけるなら
朗ろうとお経を上げているのんき

倉吉市 野口 節子

私の花壇笑顔に変えてくれ
朝な夕な花に言葉をかけて春
生活の幅が広がる退職後
仲間割れ君もしたかよちぎれ雲
太陽にとどけと叫ぶ有難う

倉吉市 猪川 由美子

豊潤に電気依存のツケが来る
母の日や父の日辛い被災地よ
野菜や魚食べれなくなる日が恐い
被災地訪問雅子妃自身癒やされる
雨降ると土のみのりの声聞こえ

倉吉市 山本 玲子

わたしの地所をすまして通る黒い猫
避難所へたどり着く足きたえとく
今日の薬飲み終え幸を噛み締める
風紋も百態となる風のわざ
オーケイのサイン目尻を下げている

倉吉市 田中 紀美恵

背伸びして孫に負けじと息止める
北の大地青葉伸びる芽初夏の風
今日の疲れ足腰伸ばし欠伸びて
伸びた蕎麦入れ歯の人にやさしいね
火吹き竹弾んだ音色出せないな

米子市 白根 ふみ

少し距離やさしい風にしたかった

神の手をずっと探して転げつつ

背が痛む赤信号を抱えてる

ミルクティー愚痴と一しよにかきまぜる

箸の目沈み込むなと立ち上る

米子市 吉田 陽子

別人の夫に出合う散歩道

コンビニの監視カメラの前で買う

有頂天お腹が減ってたまらない

疑問符を付けて話せば柔かい

歩く道変えても過去につき当たる

米子市 高田 振作

ふる里に置いてきましたブーメラン

連番で買う宝くじ夢は倍

妻が留守チンして食べる楽メニユー

仲のよい夫婦で通る団地内

非常袋あれもこれもで五つ出来

鳥取県 斉尾 くにこ

わたくしのために還って来る筈

猜疑心ゆれて二の舞三の舞

月はまた満月となりもとどおり

計算のされた天然チャーミング

二幕目で再起動するカタツムリ

鳥取県 佐伯 やえ

逆さ大山映して田植え無事終わる

泣きごとは言わずに厚い壁を押す

生きがいの輪を大切に守り抜く

友よさよなら静かに花の天国へ（最上和枝さんとの別れ 2句）

花むらに別れの雫埋めておく

鳥取県 石谷 美恵子

心地よく弾む仲間の応援歌

丁寧に埋めても過去は胸に棲む

過去形で話せば腹もたつて来ぬ

伸び過ぎてお下がりの服間に合わぬ

生きているからゴミもでる愚痴もでる

鳥取県 竹信 照彦

勝負事いつも負けるのならしない

運動はラジオ体操農作業

爽やかに動けど汗が出る気候

危機感も無いが季節に追われてる

晩酌もご飯も僕の背は伸びぬ

鳥取県 西谷 悦子

人生の気まぐれ旅の出来る幸

常識の森はみ出ないようにする

トリックをたまには混ぜる生きる知恵

青トマト背伸びさせられ赤くなる

芸術でないと夫の畑の畝

鳥取県 深田 俱久

クラス会下見の場所が多すぎた
親鸞の続きが読みたい梅雨の午後
被災地へ残した政治の不信感
珍客のあったあの日の障子穴
迎え火に想い出ぐつと燃え上がる

鳥取県 福永 ひかり

被災地のもう三か月まだ三月
深呼吸さえも出来ない放射線
国政のレベルにほしい使命感
アルバムも非常袋に入れておく
哲学が原発廃止へと向かう

鳥取県 北村 稔

年金でやっと農業続けてる
独身でなんで子供が出来るのよ
放射能ないよ安心して食べて
田植済み温泉旅行話だけ
あんただれボケの母です腹立たぬ

鳥取県 細田 裕花

新聞小説朝ドラのように読む
気心がかみあってきてジョーク飛ぶ
にらまれて節電グッズ買って来る
ストレッチ今日一日の熱冷ます
ブランコとのんびり揺れてみる夕日

鳥取県 松川 行男

にんにくはしゃんとしてたつ葱倒れ
酔っぱらい逃げの一手を心得る
梅雨空に行こか戻るか傘がない
僕等の句会傍聴席はありません
官邸に招待されて靴を買う

鳥取県 山本 正光

逃げ場ない日本に核のある限り
大正の生れ年齢覗かせぬ
老残の余命知ってる酒たばこ
大山で地ビール飲める日が近い
晩酌に飽きて火の酒のんでみる

鳥取県 山下 節子

農夫老い裏作出来ぬこと嘆く
波風をしずめる姑の知恵袋
時間切れ結論出せぬまま終る
嘘一つ心の刺になっている
デジタルのブーム昭和の人悩む

鳥取県 岩崎 和子

十代はりんごの歌で明け暮れた
三十代黒い花びらのめり込む
四十代アダモひとすじ雪が降る
七十年代久保田利伸雨に聞く
八十年代シャyson歌い弾いている

川柳塔の

川柳讃歌

(80)

木津川 計

血圧と勝負古希の恋病い

古今堂 蕉子

「同輩、えらいことです。蕉子さん（とい
たします）」が恋しいされたのです。「血圧と
勝負」ときましたから命がけの恋です。いつ
たいどんな爺さんが蕉子さんを取りこにしま
がったのか。彼女が案じるのは自身ではなく、
爺さんの血圧なのでしょう。老いらくの恋は
安土理恵さんがもっぱらと思えてましたら蕉
子さんです。それから蘭幸主幹もハラハラでし
う。蕉子さん、「老いらくに稜の恋もありぬ
べし」（蕉風）でありますように。

角帽のフクちゃん下駄を履いていた

坂上 淳司

戦前戦後の国民的人気キャラクターでし
た。角帽に下駄履きのフクちゃんはヒゲだら
けの大学生・アラクマさんに可愛がられ、お
じいさんを振り回して（家の外）で遊ぶ元氣
な五歳の子供でした。懐かしい思い出です。

「フクちゃん」後は「サザエさん」にとつ
て代られました。カツオやワカメの登場する
舞台がすべて（家の内）になったのはモータ
リゼーション以後の反映です。都市が農村を
収奪するに似て、クルマ社会が子供の遊び場
を収奪したのです。

いい人をやめると日々がバラダイス

杉本 義昭

虚飾の上げ底の偽れる人格の「いい人」を
演じると読む人を唸らせ、感嘆胸に沁む川柳
の出来よう筈がありません。「意見する僕が
まだまだ遊びたし」（西尾葉）と正味の人間
を告白し、「ぶっちゃけた話おれが一番悪人
だ」（作者不詳）を自認する人物でこそ精彩
を放つ川柳は可能なのです。僕が川柳を詠め
ず、詠まないのは「いい人」ぶった虚飾の人
間だからです。それをやめた義昭さんです。
唸る思いの川柳が量産される筈です。

本人より印鑑くれという役所

福田 好文

手ぶらで役所へ行つてはなりません。僕が
僕であることを証明する難しさです。あると
き、役所が聞きます。「奥さんの誕生日は」
「？」「子供の誕生日は」「？」「本籍は」
「〇〇です」「違います」「ええーっ！違っ？」
「移してませんか」「あ、思い出した。移しま

した」「どこへです」「〇〇です」「その通り
です。それでまあ認めるとうしまししょう。判
こがないばかりの難儀でした。

津波から高き気にしてビル見上げ

加藤 茶人

こんなことは僕だけかと思っていたので
す。「途中から貨物列車の数を読み」「何気な
く周囲の墓と見くらべる」「一電車おくれ
て運に変わりなし」。いずれも六大家の一人・楳
元紋太の句です。優れた川柳家は人間を穿ち、
「そうや、そうや」の共感を組織するのです。
茶人さんの句を読んで、同憂の人はいると知
りました。このビルなら大丈夫やが上まで上
がらせてくれるかなあとふと思ったり。

人間の席はもうないノアの舟

吉村 久仁雄

人類の祖・アダムとイブは幸せに暮してい
たのに、イブが禁断の木の実を食べたため楽
園を追放されたのです。以来、神の命に背い
た人類は一層墮落し、深い嘆きの神は「正し
い人」のノアの家族とすべての生き物一つが
いずつだけ箱舟に乗せたあと、大雨の大洪水
で人畜すべてを死滅させたのです。もう一
度箱舟を神が造らせ給うても、もう人間は乗
せないといふ3・11後、神は決めたのです。

《上方芸能》誌発行人

自選集

小島 蘭 幸

島めぐりここの牡蠣筏も消えた
飲んで喋って笑って透明になった
飲んでいるのを見ているだけでいい私
犬と僕同じ形をして眠る
天皇のお言葉簡潔でぬくい

両 川 洋 々

号泣の果てに人間取り戻す
春一番恋の試食をして回り
修羅いくつ抜けると女神待っていた
老いらくの恋だブランク気にするな
年金日までにお米も酒も切れ

板 尾 岳 人

父が居て母がいたので乾杯だ
生真面目な父の形見は母の墓
父は母を愛したことを言わず死す
父は僕を褒めていたのは喜劇かも
雨の音聞こえる源氏物語

奥 田 みつ子

河 井 庸 佑

川 上 大 輪

木 村 あきら

石蹴って帰る子供の目に涙
鷺一羽お前もやはりシングルか
煩惱を捨てに來た森恋拾う
新緑が恋を囁き光る森
心地よい涼風今日も生かされて

如才なく動く男の処世術
拔擢の辞令へ心引き締まる
言訳に矛盾な点が出て慌て
雑用もそつなくこなす腕見込む
卓上の一輪心和ませる

ダイエツトせよと年金減らされる
半分は私もゴミになっている
スランプじゃないよこれが実力や
聞く方の耳には蓋がついている
小物入れから時どき言葉出してくる

原爆に竹槍持つて戦する
退却を転進と言う負け嫌い
聖戦に妻子残して征った過去
ラバウルで三年過した日を想う
戦況報告ウソ八百の大本營

小西雄々

大山が動けばドラマ変わりそう
修羅抜けた喜び食がよくすすむ
赤とんぼ指に止まらず大落暉
未来図へ生涯現役彩を足す
何事も許しコスモス揺れやまず

斉藤 嘉

今年またすみれすみれのままで咲き
ジョギングはみどりの風を吸いながら
放射能の話はよそう蕎麦畑
しあわせを招く種なら蒔いておく
風評に負けてはならぬ蒨稜草

塩満 敏

八月は行事重なるあつい月
花の棚吊れば蝶々訪れる
週一回老人ホームで遊びます
九月には鶴彬忌待っている
パソコンに将棋教えてもらいます

新家 完司

出陣の朝の茶碗を取り落とす
ご近所の奥さまみんな元氣過ぎ
梅雨もよし良しと笑っている若葉
怒りっぱいは緑欠乏症
針の山越えると酒の川がある

恒松 町紅

晴れた空何かをやってみたくなる
世代交代老いて昔が思われる
長老といわれ口出すこともない
話しても時代が違ふ戦争談
若い手が欲しい日もある老い二人

津守 柳伸

季節感崩れ喜寿のマイペース
食欲に我慢を強いる血糖値
刺激物好む難儀な舌の先
可も不可もなく一日の一里塚
机上論吐いて必死の自己弁護

遠山 可住

午前五時さあ起きる人眠る人
敗残兵です大正生れです
ジタバタしなさんな大正生れです
八十五餃子という字がふと読めず
秋が立つひとりぼっちの月が照る

都倉 求芽

元氣いっぱい傘をはみ出すランドセル
もう少しゆっくり回れ走馬灯
ワインなど飾らなくても人は来る
僕と妻余白の色が違う午後
香焚いてしばらく梅雨を座らせる

土橋 螢

悪人も善を積みたい夏を着る
道あけてくさい理想追っている
合掌をするとか何にも怖くない
雨の午後茄子が紫色になる
わが齢をつぶやきながら生き続け

中原 諷 人

訃報きて香奠と書く筆の墨
甘やかす貌はなかつた師を送る
がんばって生きる柩のテレパシー
孟蘭盆へ暑さジンジン墓地の守
連れ添うている仏壇に孟蘭盆会

西 出 楓 楽

べんちゃらの方へ傾く軽い首
安い物買うと自慢がしたくなる
想像はすまいわたしの十年後
孫の成績聞かない方がいいだろう
あきらめて反断捨離を貫こう

仁 部 四 郎

昼の酒自前の酒を覗く月
三次会酒も凶器になると知り
定年日二人酒から独り酒
初めての仲人妻に二度も注ぎ
通販の肴でヒヤの妻の留守

林 瑞 枝

クライマックス線路も走ったわが青春
とてつも無い優しさ沁みる海女の腕
昭和史を生きた戦時の眼が消えぬ
アメリカ人の顔で優しい米子弁
心和ぐ荷物が届く文を添え

前 たもつ

祝傘寿 台風晴れて七年会
雲とても一時止まる那智の滝
中の島迎えの船も貸切られ
ジェット船川鵜あわてる水しぶき
聖書読む恐れることは何もなし

政 岡 未 延 子

神社掃く老婆女神でなかつたか
女神はひとりあとは女のお友達
晩学の辞書に欠伸のあとばかり
独学で私のルーツ探ってる
私の何故をつかんでいるカルテ

三 宅 保 州

この想いとどけと西瓜真つ二つ
蟪蛄の雌に食べられないように
但し書き生きていければの話です
命には別条ないと言う他人
人生は一日に似て黄昏る

第25回 堺市民芸術祭川柳大会

と き 9月11日(日) 12時30分開場
 ところ 堺市立梅文化会館 3階1講座室
 堺市南区桃山台2丁2番1号
 (TEL.072-296-0015)
 (泉北高速鉄道とが美木多駅3分)

おはなし 「最近の川柳について」

宿 題	「男」	墨 作二郎	選
	「鳥」	岩田 明子	選
	「オ フ」	居谷真理子	選
	「軽い」	奥 時雄	選
	「洗 う」	笠嶋恵美子	選
	「変 動」	久保田元紀	選
	「やがて」	原 清晋	選
		宮田 宜子	選

席 題 なし 各題2句
 出句締め切り 13時30分

参加料 1,000円 (作品集・記念品 呈)

連絡先 堺川柳協会

〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 TEL・FAX 072-278-4706

肩の荷を抜いて墓石と小半日
 点滴か動くわたしの死生観
 カーテンの隙間を覗くのは夏日
 一条の光り集める募金箱
 東北のプリプリ届く日の夜明け
 縁を切る男へ胸の透く啖呵
 口封じだったゆうべのほめ言葉
 がたがた言うな風が運んだ噂だよ
 あぶく銭握ると夫婦崩れだす
 死んでまでくらべられてる墓のかさ

八十田 洞 庵

宮西 弥生

温故知新

『菊澤小松園遺句集』より

善人の節くれ立った手で殴り
 苦しさを紛らす酒も借りた金
 板前を褒めて料理は食べのこし
 冗談をまともに受けて酌ぎこほし
 息抜きに出した酒から揉めてくる
 真先に酔うて本音に触れさせず
 女世帯螺子のゆるんだままつかい
 素うどんへ身の振り方を考える
 雨もりのだんだん派手に落ちてくる
 隣からいいことだけを聞かされる
 階段へ派手に落としした金だらけ
 無理をした金に水引掛けて出し
 仏さま嫌いなものを供えられ
 味の変わるうちに仏壇から下げる
 馴れ初めのはなしになった咳払い
 住み慣れて山の起伏も目に入らず
 ごきげんの日の毒舌は湧えてくる
 慰安会下戸には惜しい芸を持ち
 寿と書けばきれいな金に見え
 灰皿へ呉越の煙鏈れ合い

水煙砂

西出楓楽選

大阪市 栃尾奏子

向日葵になりたい朝顔の野心
朝顔にならずに向日葵の妬心

着てみようビキニスカート ハイヒール

大胆に夏が私をエスコート

ポンポンと野暮な噂はよく弾む

ありがたい優しい嘘と知っている

西宮市 泉水牙子

絶頂期過ぎた頃から気が緩む

めどたてばまた決心が揺らぎ出す

同じ穴の貉がベテン師と叫ぶ

真っ先に明るい記事を読む茶碗

断捨離の前に身辺整理する

カラスにも言い分があるゴミ袋

紀の川市 辻内次根

眼を閉じて開けると今日が暮れている

逃げ込んでいくには丁度よい青葉

八方がふさがっている曇り空

下書きを何度も消した跡がある

まだ運が転んでこない夏の空

もう少し待ってみようという答え

豊中市 池田純子

思い出が駆けて来そうなレンゲ道

心配がひとり歩きして困る

膝貸して猫にぬくもりもらう夜

忘れものしているのかな歯が痛い

うたた寝が過ぎて大海ど真ん中

逆上がり景色もぐるりついてくる

美作市 小林妻子

大台に乗って戒名まで用意

卒業をさせてもらった米づくり

夏山の草と根比べが続く

山道を帰る草刈機とふたり

山百合を手折りたくなる匂い立つ

ご無念の話を聞いた赤穂城

河内長野市 辻村 ヒロ

庭の草ひと雨ごとに勝ち誇る

こわごとと検査結果を聞きに行く

温泉街活力もらう下駄の音

ダイエツト恋が一番よいと聞く

諭吉さん色目をつかい引き止める

初恋の人にチョッピリ似た夫

神戸市 白川 淑子

爽やかに別れしましょ好きだから

哀しみは遠くとおくにレモン食む

泣かないと決めた日からのコーヒ好き

足元に有った幸せ青い鳥

神様に数え切れない借りが有る

森光子に負けてられないストレッチ

四国中央市 篠原 久

素うどんと一緒に流すわだかまり

褒め言葉釘さすことも忘れない

ポジティブで行こう気持はまだ若い

強気にはなれず私も非は少し

これ以上喋ると舌を切られそう

人見舞うときは笑顔があればよい

米子市 山本 ふみ子

味方だと油断していて噛みつかれ

最愛の息子が嫁の味方する

孫の為なら身を削っても厭わない

ワンランク下げた暮らしがエコとなる

騒がしい場所視くのも趣味のうち

大切な物はしまつて孫迎え

吹田市 二宮 栄子

地震国原発までも大暴れ

独り身へとなり近所の温い風

発表会家とはちがう孫をみる

口実に届ける孫の忘れ物

梅地下で亡母似の人の後を追う

子の成長柱の傷がよくしゃべる

柏原市 森吉 留里恵

野良で詠むうたは陽の詩汗の歌

草笛が遠い記憶を吹き鳴らす

私の底辺にある田植歌

土踏まず泥のユーモア忘れない

ほととぎす棚田の苗は育ったか

泥つきの儘で都会に馴染まない

高槻市 田中 由美子

先輩が叱られている目のやり場

指揮棒を上げ一瞬の静を生む

盗まれた唇もはや真珠婚

陽は昇り昨日の涙など捨てる

カラフルなだけに悲しいピエロの眼

正直な汗を知ってるコップ酒

松江市 松浦 登志子

竹原市 國實 力

ゴーヤ植え涼しく過ごす知恵があり

風鈴の音に魔物も寄りつかず

水太り胸から下に集中し

富士山を見ると拍手をしてしまう

ピピピピ何の知らせかキョロキョロし

雲南市 菅田 かつ子

けんけんぱっ だんだんずれて来たりズム

携帯に食事の支度頼まれる

いやべつに向うの気持汲んでやり

夫唱婦随そんな昔をふと思ひ

紫陽花の雨にうたれた淡き恋

雲南市 武島 ちよえ

こんな時笑いの種を蒔いてあげ

梅雨に入り明るい色の衣替え

満腹になると冷静にもなれる

一句二句浮かびメモする間に忘れ

この歳で未だ戸惑う事ばかり

広島市 岸本 清

迷うなら小細工せずにストレート

ズボン下げ裾を引きずるのもお洒落

行列の蟻の行方を追ってみる

年金が衝動買いに袖を引く

きまぐれのトイレ掃除に身が入る

諄いほど子が言う歩け書け笑え

日に一度褒め合うことの難しさ

ポックリ死願う心はわがままか

老いるほど夜が明けるのありがたい

孫すでに指切りなんか信じない

竹原市 若年 幸子

緑風へ植生の宿も深呼吸

水琴窟心の髪をゆさぶられ

いい匂い森の命のおすそ分け

波音を枕に旅の酔いごろ

恋探しピョンピョン春のむつごろう

竹原市 土井 輝恵

小説の場面だったかなあ過去よ

私の足跡がない昨日今日

地球今深い呼吸をしています

代理出席場違い感をひしひしと

思ひ出の松島元氣聞く安堵

阿波市 三浦 千津子

片意地なわたしを量す淡い彩

卓袱台の温もり薄れ核家族

花を愛で花と語らう今日の幸

春というかるき響きに羽根が生え

囀りも入れて至福のティータイム

大洲市 花岡 順子

札幌市 佐藤 登美子

和を保つ茶の間に車間距離がある
ほっそりの時はくるくる動いてた
サイレンが鳴ると吠え出す犬がいる
延命措置医者に覚悟を迫られる
気が付いて下さい私ピアニシモ

香南市 桑名 孝雄

弘前市 稲見 則彦

頑張ればTPOも考えて
断捨離で男のキレをテストする
心頭滅却大書しておくクールビズ
災害に備え僕には酒も要る
老いばれがおしゃれを競うクラス会

北九州市 小松 紀子

弘前市 高橋 洋子

平凡は幸せなんだと思う日々
医者イワク腰痛膝痛お年頃
忘備メモ何処へ置いたか見当たらぬ
在りし日の母の笑顔にいやされる
うち猫抱っこしてよとせがみます

唐津市 北村 松風

弘前市 高森 一吞

風下へ回り情勢見極める
ハードルの高さへ努力だけはする
津波無情三陸沖に友を拉致
悪友という一生の宝物
働いて疲れています英世さん

リラの街ヨサコイソーラン夏を告げ
病棟のヒソヒソ話耳を立て
貧乏を耐え抜いたから今がある
形勢不利脱兎のごとく逃げを打つ
言い訳をして己のなまけ癖
ピュアブルー万年筆が走り出す
妻娶る不思議な縁の物語
麓まですっかり夏の岩木山
D51が夏の津軽路駆けぬける
瓦礫から生命が生まれ夏が来る
二階建てバスから家を覗かれる
速回りしたから旨い水と会う
何をして上げても足りぬ恩返し
取る間際切れた電話に胸騒ぎ
白黒はさて置き先ずは猫被り
ビリだつて爺はおまいの応援団
東北が祭りで復興盛りあげる
被災地に神仏ない雨風
ヒョイヒョイと世渡り上手鳥跳ね
薫風に虹のシャボンが舞って散る

塩竈市 木田 比呂朗

ずぶ濡れに予報士恨むにわか雨
復興か妻のいびきも久し振り
中庸で安堵している妥協ぐせ
老醜を鏡に確と告げられる
エピソードもう晩成も時間切れ

福島県 七ツ森 客山

震度三蛙びたりと声を吞む
ラッキョウが箸から逃げる二度三度
退避指示さあ何処へ行くどこへ行く
死のキリが死の街包み夏の草
後ろから声掛けられて温かい

東京都 井上 つよし

短パン・アロハも正装にするクールビズ
節電に戦後の暮し知る強味
長話子供がボチと呼びに来る
窓際で時々光る生き辞引
ハミングはナツメロ軍歌浪花節

東京都 高岡 弥生

夕刻に干し物揺れる妻不在
初夏の風エアコンなしの夏願う
足裏のツボを押さえてリフレッシェ
今までをよく頑張った自分褒め
車より自転車よりも歩きです

昭島市 野口 忠

アジサイが梅雨バージョンを演じ切る
雨上り草引く庭へあなたお茶
節電の窓に蛍がおぼんです
家計簿を逃げ出す妻のお小遣
婚約の会見指輪上げて見せ

横浜市 巖田 かず枝

栄養もいいけどやはり好きな物
見守ろう嫁には嫁の流儀あり
九十歳コース料理もなんのその
健康な証拠と薬飲み忘れ
園バスで孫は毎日小旅行

富山市 有澤 嘉晃

人間は眼中に無し大津波
神様のこれもお情け物忘れ
詳しいがどこか要が判らない
孫の手の届かぬことにいる痒み
ワイフには俺の常識非常識

岐阜市 平野 あずま

人間が映える正しい日本語
雑音に惑わず真理見極める
伸し歩く国籍不明のカタカナ語
風評がジェット気流に乗って駆け
送受信ないケータイの孤独感

静岡市 渡 辺 芳 子

八幡市 今 井 万 紗 子

義援金あげられる幸かみしめて
大自然生きてゐるってすごい事
亡母と在り四時間かけたフキの味
母の日のカーネーションは曾孫から
心の中見すかすメガネ無いが良し

江南市 脇 田 雅 美

上げ底に見かけだおしのみやげ物
年寄りが年寄りに席ゆずられる
ホームランファンの歓喜を乗せて飛ぶ
一票の重さに託す良い政治
賜杯もない気合入らぬ大相撲

豊橋市 藤 田 千 休

ローギアで越えて行きます老いの坂
織姫も恋に溺れた天の川
歳きかれ急に寡黙になる熟女
阪神に三空港という愚か
辛党が夫婦善哉もてあます

京都市 清 水 英 旺

この年齢で十指の欲に忸怩たり
雨だれのリズムを乱すわだかまり
つゆ晴れ間マイブルーヘヴン口ずさむ
朝昼晩からだの声を聞いている
栗はさむ楽しみのない電子本

どこからかすかに響く亡母の鈴
叶うならもいちど亡母の娘でいたい
ひとつ屋根笑顔も飾り老いぬくし
理想では感謝しながら逝く予定
春爛漫小さな嘘も許せそう

大阪市 笠 嶋 恵 美

友と逢うただそれだけでうれしい日
空き地にはバズルのように家が建つ
記念日をひとりで祝う夢連れて
中之島ああ青春のバラが咲く
老い自覚今が至福のうす化粧

大阪市 高 杉 力

元総理だけがどんどん増えて行く
節電は打ち水縁台へは将棋
単身が決まり妻子の機嫌良し
第三のビールバカラに注いで飲み
シニア割活かし映画のはしごする

大阪市 田 中 都

眼科歯科耳鼻科それぞれ友が出来
待ち合わせ忘れる程の花時計
どの部屋も時計があつて落着かず
うっかりと日を間違えて待ちぼうけ
携帯を頼りにしてる待ち合わせ

大阪市 松田 聰

被災の子のはしゃぐ姿に救われる

ナビ任せ方向音痴治らない

クールビズ着こなすのには難しい

その昔半袖スーツありました

避難所の暑さ対策気にかかる

池田市 上山 堅坊

粗削りの岩がびったり日本海

ペン先がいきり立つてる抗議文

横でするひそひそ話氣に掛かる

飲もうかと誘う氣配はピンと来る

腕時計やめてすっきりした手首

泉佐野市 稲葉 洋

季が移る陸奥思いつつ今日明日

夏草やあの日の惨を乗り越えて

この夏は別の思いを足して数珠

花は好し若葉の緑更に良し

洪団扇に子供の頃の風がある

交野市 田岡 久幸

(九好改め)

市役所に胸ふさがれる半旗かな

新聞を読んで朝から泣いている

皆どこかやさしくなった震災後

腹が立つあの東電のふやけ面

災害をよそに国会猿芝居

河内長野市 梶原 弘光

青春を回想させる赤いバラ

心当たらないかとじろり内視鏡

正論を吐いた背中を襲ううつ

赤信号ためらう足を子が見てる

牧師さん心の傷に聴診器

河内長野市 木太久 正一

職場にて学んだ詩吟いま特技

愛犬の散歩だんだんきつくなる

震災で離れ離れの犬あわれ

毎朝の散歩挨拶交わす顔

鈴蘭と毒だみ庭に白い花

河内長野市 木見谷 孝代

ふる里の天然ワカメ艶がある

チャレンジへ学びに遅い刻はない

ねんねこの背中の温み忘れたか

子の帰る胸はいつでも空けてある

さくさくと混ぜ方にコツちらし寿司

河内長野市 谷 久美子

芍薬に母の破れた蛇の目差す

落ち込むと雨の音まで突き刺さる

ほんのりと慈愛に満ちた弥陀の顔

季節毎ポーズを変える山の肌

ややこしいポーズするから誤解され

河内長野市 針生和代

世界の知恵善意集まる原発禍
放射線見えない敵に怯えてる
地方紙に包んだ母の荷が届く
捻子ゆるめ五感研いでる花の下
夕焼けに今日もいのちを遊ばせる

河内長野市 松岡篤

モニターと言う呼び方で売っている
消毒の応援欲しい夏野菜
石橋をたたき過ぎて進めない
水虫が俺の季節と張り切って
お互いにはてなハテナで会釈して

河内長野市 宮守正博

里帰り父に内緒とくれた母
紙おむつプライド一つ捨てました
サングラス掛けて不良の真似をする
父帰る急に静かになる我が家
一戸建庭付きだけど親もつき

河内長野市 山室光弘

留守にする妻のしつこい注意書
美術館裸婦の瞳にのぞかれる
スーパールのチラシ楽しむ年金者
人妻と混浴してる足湯旅
是非見たい礼儀知る兄の親の顔

岸和田市 中岡香代

震災の子供が探すママの星
ネクタイを外せば別の顔になる
頑張りに応じてビールランク付け
勝つ極意一つになった心技体
だんご虫子供が出したプレゼント

岸和田市 増田隆昭

雨降りはチャンス司馬遼読み耽る
鯉泳ぐ川のある町好きになる
入院をしたことがないのが自慢
茶柱が立って食事に花が咲く
拍手受けながらあの世へ行けたなら

堺市 近藤治子

とびきりの笑顔がとかすわだかまり
かたくなな心がとけたおもてなし
例外がそろらぬ顔で座ってる
住みなれた家が一番快適だ
よっぽどに別れようかと思った日

堺市 澤井敏治

雑草をむしり雑念消している
つがい蝶疲れを知らぬ子のように
人間は馬鹿まだ金に仕えてる
新緑の元気な声に芽ぶく脳
お受験にテストされるはママとパパ

堺市 内藤 憲彦

高槻市 島田 千鶴子

義援金みんなひとりじゃないと知る

結び目は十人十色の宿浴衣

プロポーズに年齢制限はない

辛口の批評に負けぬ天狗鼻

黒よりもピンクが似合う爺になり

堺市 羽田野 洋介

引き算は嫌い答えが減るばかり

丸いポスト使えるかなと覗き込む

雨も雪も程好く降れば喜ばれ

そうなんだ天は何でも知っている

人災は忘れる間なくやってくる

堺市 増田 和幸

国会に税金かえせ怒鳴りたい

原発が帰る家まで奪い取り

アトムとは地球滅ぼす悪魔かな

アメリカの友達作戦底が見え

原発の廃止で困る政官財

吹田市 藏田 光子

黒い服着こなす人のいいセンス

黒白をつけても何故か気が重い

腹八分肥りもせずに痩せもせず

痩せたいと思いつつもつい美食

贅沢に慣れ警告とする地震

脱原発オール電化が早すぎた

被災地にやさしく吹いて夏の風

日傘さし小さな日陰持ち歩く

夏近し新茶の香り飲む至福

カーナビは高速道を行きたがり

高槻市 初代 正彦

疑った口をそのまま開けておく

不敵にも頬にとまるか蚊の野郎

追いついてチラッと見たい背な美人

苦手だと避けてる中に機を逃がし

ライバルにちよつとくせ球投げてみる

富田林市 関 よしみ

私を育ててくれた最後尾

愛される歩幅で父についてゆく

夕焼けの大河に打ち明ける内緒

りんご剥く指に止まった亡母の詩

波乗りは上手いがチャンス逃がしてる

富田林市 山野 寿之

煩惱を削れぬままに行く奈落

言い過ぎた心にひとつ穴があく

姫りんごいつでも父の手を探す

行間に愛を隠した父の文

何も彼も捨てて歩こう彼岸まで

寝屋川市 岡本 勲

お茶会にくずせぬヒザが悲鳴あげ
ゴミの日に夫の立場捨てました
いつまでもタダで空気が吸えるのか
父さんの歌にアクビで返す猫
都会の棘抜きに田舎へ一人旅

羽曳野市 宇都宮 ちづる

政治家が一番無駄に見えてきた
どこにいる歴史に残る救世主
百歳の母が居るから老けられぬ
孫の風邪もらって五日安息日
リニアには乗れそうもない開通日

箕面市 寺井 柳 童

春の風袂に巣立つツカジエヌ
もう少し休みが欲しい休み明け
グルメにも飽いて究極冷やつこ
心無い人も見かける愛大家
天災地変描けぬ未来の青写真

八尾市 前田 紀 雄

白か黒か監視カメラが覗いてる
お世辞やら浮いた話は苦手です
節電で早寝早起き考える
軒先に風鈴吊って涼を取る
パソコンに嵌り筆まめが遠退く

八尾市 山根 妙子

時の日に心の螺子もしめ直す
鳩時計たまに不協和音で啼く
レジを打つ新人さんに列がのび
水無月のセーラー服に白光る
新装の地下で迷子の人が増え

大阪府 小栢 こずえ

賑やかに蛙闇夜もコンサート
雨は雨晴れたら晴の絵を描く
農休みひたすら読書知恵補給
陽が昇り私の舞台待っている
有難いことが普通になる怖さ

大阪府 神野 千恵子

のんびりと過ごした今日を貯金する
ルビをうつ固有名詞の身勝手さ
痩せぬようおしゃべりせよと脳の声
お日様へ右向け右をする新芽
不揃いと言わず個性と言ってほし

大阪府 畑中 節子

ジャガ芋と会話しながら掘る至福
競い合い新玉葱の茎青む
異常気象気にし乍らも田植終え
読書する別の世界にのめり込む
穂の芽を採って夕餉に華をそえ

神戸市 木村 忠 義

もうけものとして余生を生活している

歳が歳保証は無理と医者が言う

今日もまた小さな幸を楽しみに

満足度徐々に下げつつ生きている

老いたなあよいしょよいしょと声を出し

神戸市 輿 水 弘

精一杯頑張りました妻の指示

神不在白砂青松海藻屑

避難民陛下に生きる糧貰う

ケータイを首につるして監視され

安請合いいつまで続くお人好し

神戸市 山 根 弘 子

勝負師が首をかけての大仕事

初恋のロマンを秘めたネックレス

気安さに心許した友の愚痴

五割引き無駄な物まで買いまする

深い皺刻んだ顔にあるドラマ

尼崎市 市 坪 武 臣

忘れ物を取りに戻ればポケットに

人事異動他人事だから気にしない

他人事でつい口を出し揉める羽目

生真面目がよくよく見れば頑固者

気が付けば僕も立派な高齢者

尼崎市 小 池 幸 子

便利さを競ったつけが恐い現実

メモを執る記憶不安に老いの策

ひとり住む何時まで持つかこの暮らし

杖突かぬ老いの頑固をまだ通す

充実に今日も感謝の日が暮れる

尼崎市 田 原 一 兆

棒に振るかも知れないがそこは意地

少し酔ってデュエット誘う気もそぞろ

錆ついて動かぬ五寸釘の意地

右ひだり記憶異なる耳のたこ

肩書きが消えると目方までも減り

加東市 安 達 厚

あと十年生きる保証がどこにある

増えるのは年と薬と愚痴の数

健康法教えあつてのモーニング

若返りたくて菖蒲の一人風呂

八十路きて友一人減り二人減り

川西市 日 野 岡 和 之

聞くほどに謎が深まる原発禍

復興の灯ちらほら気仙沼

あきらめぬ人生彩る応援歌

よみがえれみどりふるさと海の幸

だんまりも心の叫び東北弁

篠山市 石田 久子

お見舞にやさしいうそも包み込む
なつかしい路地と昭和が遠くなる
災害地また台風もお見舞に
投げ出してしまいたい日の連れ糸
親切が重荷になったおつき合い

篠山市 酒井 真由

ほどほどの欲があるから生きられる
伝言板が駅から消えて以来冬
まずいこと言ってしまった帰り道
子に継がすほどの大志をもたず生き
ばつねんと星降る街の占い師

篠山市 谷田 多美子

お手本にしたい人あり卒寿まで
先輩の姿眩しいいぶし銀
晴耕雨読紫陽花寺で思うこと
蜜蜂もかえっていった寺の鐘
子の心私の膳に溢れすぎ

篠山市 藤井 美智子

原発は極楽地獄持ち合わす
幸運と不運へ神のなせる技
勇気出し言っではみたが残る悔い
出て来ない言葉に辞書も役立たず
客が来る丸い掃除が角形に

三田市 雑賀 一泉

ランドセルタンポポポポ孫の春
如何せん今さら好きと言われても
ねじれから本音むき出す民主丸
はやぶさの小さなゴミにデカイ夢
餅つきに絆かためる年の暮れ

宝塚市 丸山 孔一

太極拳もつと楽だと思ったに
すれ違い残り香にふと振り返る
爪先の過去踵の現在
想い出の写真も家族有ればこそ
膝抱いて柿ピー摘みテレビ観る

西脇市 七反田 順子

クールビズファッション界はしやぎすぎ
エコ対策早寝早起きしています
サマータイム子どもの頃にある記憶
今日もまた地震情報聞いている
ホトトギスウグイス啼いて長閑な日

兵庫県 上田 ひとみ

カーテンも洗おうきつと良い風だ
もぎたての笑顔抱えて君は来る
微笑みにやさしい風も唄い出す
ゆっくりと話を聞いてくれるひと
木漏れ日の向こうにふっと亡母の声

奈良市 大久保 真 澄

木洩れ日のまだら模様に染まる顔
父さんのギュギュッとデカイ握り飯
いい人はいいいねはんなり笑いじわ
子離れの見本か母が翔んでいる
おばちゃんになりきる長い立ち話

奈良市 前田 弘 恵

孤独とは耐えることだと身に聞かせ
達筆な草書読めずに誠意読む
桜木は被災の人も和ませる
弁当は家族の絆愛詰める
捨てきれずレトロの服で大手振り

奈良市 矢野 良 一

朝昼晩韓国ドラマに填まり込む
縄のれん学ぶ処世のABC
表より心安らぐ裏通り
風流な三味の音漏れる帰り道
葦切がぎよぎよしと鳴いて日が暮れる

奈良県 谷 川 憲

風邪の菌鼻腔辺りで暴れてる
やせ我慢が孤高守ると言っている
目を閉じて故郷偲べば海の手
忙中に遊んだ友と古稀の旅
寿命伸び長い余生が待っている

和歌山市 磯 部 義 雄

稲村の火思いつつ非常食
吠える犬いつも尻尾を下げている
名古屋から仕切り直しの大相撲
開店日怒濤の如く魔女の群れ
清貧の紙幣一枚募金箱

和歌山市 坂 部 かずみ

夏みかん脱がせた様に皮を剥く
韓流に嵌り手足が抜け出せぬ
国芳の江戸の時代に逢いに行く
雨音に起きて慌てる木の芽立ち
どこまでも夫婦で違う夢を追う

和歌山市 福 井 菜 摘

蛇行して川は大河に届く夢
ゆつくりとのんびりとゆく老いの坂
終章を輝きたくて辞書を繰る
新緑の小径を母の押し車
当然のように水道ガス電気

海南省 小 谷 小 雪

一杯の水も大事に呑んでいる
枯れ草の下にわんさと芽が見えた
背のあたり誰か支えてくれている
がっちりとななたのバスを受けとめる
ラディッシュの赤遠い日を巻き戻す

紀の川市 宇野 幹子

新時代の先駆者となれ呱呱の声
信じれば答をくれる茄子の花
一字ずつ写経の文字も丸くなる
ほどほどの硬さで絆縫ってゆく
重すぎることなし母の落し蓋

田辺市 大峠 可動

ふるさとに絶景があり神の峯
五月晴れ大脳干して若返り
六月の笑顔だバラも水吸うて
分別に欠けて一点主義でいる
愚者たりていつも鬼門につきあたり

橋本市 石田 隆彦

春の香をお腹いっぱいよもぎ餅
そよ風に野菜の花の舞踏会
好調時不思議な風が背中押す
神様に願いと欲を仕分けされ
今日も暮れ余生と余力減ってゆく

鳥取市 近藤 秋星

大津波魚もびっくりしただろう
原発事故収束せねば落ち着けぬ
びんぴんころり老いの願望とは哀し
帰りたい君と遊んだあの頃に
ペテン師と自分のことは棚に上げ

鳥取市 津守 律子

生ぬるい菅政権に国ゆらく
放射能もれ過酷な試練何時終わる
夫婦喧嘩の出来るあなたに感謝する
精一杯生きた証の今日の汗
ベッドから準備運動して起きる

鳥取市 松原 ひとみ

青虫になった気分でダイエツト
人誉めて目減りはしない自分の価値
おしゃべりが過ぎて日常焙り出る
落胆についつい財布軽くなる
里帰り五感しみ入る母の汁

境港市 中井 虎尾

散歩する犬は花には興味なし
本場所だ技量審査を終えたから
苗植えた水面に映る伯耆富士
つまづいた石にあやまるお人好し
被災民無視か永田の茶番劇

米子市 加藤 正二

親の歳難なく越して八十路ゆく
楽しみは抽選までの宝くじ
能弁が駄弁を生んで迷わせる
話し込みうっかり用事忘れてた
老醜をさらす延命辞退する

米子市 後藤 美恵子

老いの吐息いっぱい溜めた歩道橋
修羅場と化す匂いを背広持ち帰る
早苗渡る風ふる里の匂いする
早乙女はデモ用となる機械植え
しまい込んだうちわ早目に探す夏

米子市 竹村 紀の治

晩酌のつまみで済ますひとり飯
父の日に自分に赤いシャツを買う
酔うだけの酒に銘柄など要らぬ
また一本奥歯が先に旅に出る
もう一人の自分が嫌味ばかり言う

米子市 中原 章子

遣り繰りは赤字出さず臍を繰る
流れにはついて行きます逆らわず
あなたには本音を語る素のわたし
口下手であっただけです聞き上手
この歳になつて気が付くことばかり

米子市 野川 宣子

被災地のハート揺さぶる支援の手
言い訳も出尽くしました休み癖
老いの背にいたわる声のプレゼント
賑やかな声は我が家のバロメーター
ハンドルを取ると人格変る彼

米子市 見山 温子

手作りの漬物ほしい病院食
ベッドの上自分見つめるいいチャンス
良薬の口なおしアメなめている
春ですねリズムも軽く日が過ぎる
ゴキブリを叩く女に興醒める

鳥取県 加賀田 志延

病得て君はあれから座敷犬
ピンポンが壊れ玄関開いたまま
下戸なりに試飲してみる古梅酒
もう無理はできぬ格安車中泊
温泉に四肢を伸ばせば明日の夢

鳥取県 橋谷 静江

立ち話畑仕事の邪魔をする
良く生える畑の草と会話する
近場にはきれいな川がある安堵
肩書が多く留守役食事役
認知症予防に毎日台所

鳥取県 吉野 いさお

傲慢な言葉の綾が怪我負わす
古女房鮮度が落ちて侘と寂
潤いを心に保つ自制心
瓶の外転んでみたいラムネ玉
お喋りでストレッチする舌の先

竹原市 六田 半徳

唐津市 岩崎 實

あれにこれ二の足踏んで先送る
永田町コップの中で不信任

まず前へ後悔あとでゆっくりと
寝て起きてクイズ難題さつと解け

山口市 中前 幸子

トライアングル夜の雫と響き合う
切れ味の悪い言葉が胃に残る

蒼穹や逢うてはならぬ人を恋う
傾いた家族ゲームの床柱

今治市 渡邊 伊津志

ライバルの小声背中で受け止める
修飾語持たぬ男の逞しさ

も一人の僕が笑っているお世辞
人柄を見抜く眼鏡は曇らない

福岡県 豊田 愛

被災地を思い感謝の独り風呂
亡夫の椅子掛けて紫陽花愛でる庭

ゆっくりと遅れる時計もわたくしも
腕振るう料理も独り味気無い

福岡県 本田 さくら

徹子の部屋百までやると意気たかし
福島の乳牛哀れ眼に涙

ワイワイ雨に草木の歓声だ
北斎や写楽他国を魅了する

精一杯やっても落度はありますよ

上等のワイン栓抜き買い替える

間違いはだれにもあると茶に誘い

新芽摘み松の二鉢梅雨に入る

唐津市 吉富 節子

原発の見えない恐怖いつ解ける
花吹雪池に絨毯また美なり

友信じ努力花咲き優勝旗
童謡が同窓会を締め括る

山鹿市 三谷 たん吉

専門家なんて言葉にだまされて
政治屋の低劣加減想定内

妄言と言われる意見うなずける
出て来ぬか少しまともな日本人

山鹿市 米加田 恭代

ライバルは自分の中に潜んでる
辛いけど少し楽あり生きてます

皮肉込め笑みを浮かべて自己主張
逃れたい忘れないものの死の恐怖

シドニー 坂上 のり子

うまそうに今朝のおひさん匂う猫
温もりがほしいと猫がそっと来る

朝の日が射す隅っここの綿ほこり
54基も持って目覚めぬ危機管理

想定で物事はかる慢心が

日野市 大竹 一 良

海沿いに何処へ行くのか牛二頭

当りまえ人智に頼り出る油断

自然界絶対という図面なく

佐渡市 高野 不二

貯金より買いためをする人がいる

本代はどこへ払うかアイパッド

父の日が年に一度の楽しい日

後期後期と容赦のない保険

大阪市 浅井 公平

ラブレター八十路になってまだ書けぬ

妥協しか平和にくらす道はなし

居酒屋へ年金で行く楽しさよ

おもしろい手紙が書いてよろこばれ

大阪市 安藤 なつこ

雑踏の中へ透明人間に

雑誌見せこの髪型といわれても

駐輪場自分の場所のある安堵

もどらない昨日忘れて見る明日

大阪市 平井 露芳

雨の日は大きな傘が杖代わり

打てないと飛ばんボールと言いわけし

将軍様担保もなしに物ねだり

福島で空気読みます測定器

世渡りにちよつとした嘘許される

大相撲監視カメラの目が光る

去りぎわに人の値打ちが見えかくれ

目を見れば心の底が見えてくる

大阪市 吉川 弘泰

老いの身に薬の効かぬ痛み止め

盆供養ガレキの山に線香立て

蚊帳の中古里偲ぶ団扇かな

終戦と震災が増え花手桶

大阪市 吉田 知之

オール電化のご時勢に気が引ける

原発のプロの説明難しい

はんなりと育てた娘奥手です

何気ない仕種に親の躰見る

泉大津市 助川 和美

親切の押し売りされるお節介

父の愛知らず青春悔いている

メールよりたまに聞きたい子らの声

恥ずかしい車内の化粧でも上手

河内長野市 内海 綾乃

歩けないと何処へも行けぬ留守番だ

ゴーヤを植えて節電効果頑張ろう

ひとり住まい望んでいたが淋しいね

風邪を引く熱かん飲めば治ります

河内長野市 山本 エミ

節電に図書館通い昼寝して

まずかった粗品に釣られた返事

上品な言葉借りるところばゆい

借りると忘れ貸すとメモする私流

岸和田市 藤原 昭

ふるさとを国歌にすればみんな立ち

逃げた人が頭になってやめろてか

永田町どうなってるのあれやこれ

ルビないと読めぬ名前で手間が増え

豊中市 荒巻 夢

原発事故違う生き方問うてくる

文明の進歩疑うことばかり

買っちゃった姪の婚礼春の服

足し算で神様どうもありがとう

豊中市 源田 啓生

先に逝く有名人に寂しい日

歳という試練が私を離さない

フエンス越し紫陽花誉めた家が消え

宇宙では地球は泡か塵なのに

寝屋川市 小谷 滋彦

雲の峯さらばと告げて風に乗る

その感動伝える涙もろくなり

敗戦日稲穂の頭重く垂れ

心にもガラクタあれば断捨離に

羽曳野市 磯本 洋一

旬山葵こん畜生と鼻摘まむ

定年後風呂の順今四番目

苦瓜がエコを任せと背伸びする

旧姓で声かけられた里帰り

羽曳野市 安本 美喜

転倒に至らぬことも間々あつて

お月謝の新券溜めて孫にやり

動物のいのち貰って人は生き

聖書とや知恵の宝庫よ読んでみる

東大阪市 西田 いくひろ

一割の実費で病院梯子する

恥かいた数だけ頭打ちしてる

節電でうちわを部屋に置いておく

勝ち負けに凝ると血圧上がります

枚方市 小川 良吉

雑炊は戦時の飢餓がトラウマに

何事も大雑把だと妻いわく

山菜も雑草も萌え里の春

雑念が消えなかったな座禅会

枚方市 河田 洋子

花粉症マスク眼鏡で人違い

アレルギー三度の食事苦労する

雨の日はほっとしてます花粉症

引き返すことのできない老いの坂

枚方市 坂本 ミヨノ

朝食を新茶で茶漬け妻の笑み
老夫婦ほのほのと和をわかちあう
緑の道オゾン満腹ランニング
祖母の味娘に伝え腕上げる

八尾市 田邊 浩三

駅弁を抱えた夫手に地酒
赤のれん揺れて手招く休肝日
父の日のコーナー覗く親父たち
ベンツ乗るババの乗れない一輪車

大阪府 太田 としお

ポイ捨てのタバコに燐るキスマーク

中国は虎ロシアは狐日本猫

老人が元氣過ぎても嫌われる

ピンチでもチャンスに変える凄知恵

大阪府 坂口 公子

スッピンも許して塾居を半年

教室を閉じた安堵と侘びしさと

ご馳走も体調次第著の先

オールドローズ見舞いに貰うた日の寝所

大阪府 高木 道子

颯爽とサマータイムにクールビズ

雨を呼ぶ蛙の声もフォルテシモ

廃屋に真面目に伸びる夏蓬

橋桁をしめつけている鳶青し

大阪府 中井 記久乃

湧き水をくみて美味なるお茶をのむ
夢のある未来を政治に期待する
内輪もめしている場合じゃないはずだ
遠回り目的地には早く着く

大阪府 西川 冷子

残留濃度見極めつけて米作る
涼しげな袴蹴散らし巫女多忙
托鉢へ五百羅漢は微笑んで
連休は毛虫のような高速道

大阪府 若月 祐作

ときめきを封じ込めてのポストイン

美容院戻った妻を褒めあげる

ひとり言めつばう増えて妻の夕

みちのく路瓦礫の山に春を追う

加東市 岩本 美緒子

いつか終点あるから今は元氣出す

嫁に遠慮孫には頼むわたしごと

バラ巡り足の腑甲斐なさ知る疲れ

早い目覚めひとり過ごしの長いこと

加東市 黒崎 美紗子

誘い合いカラオケしてる雨の午後

助け合い道普請する隣組

テレビ見た避難準備の文字出てる

支えられ自然うつくし夫婦松

篠山市 沢山啓子

審判は天から地から孫からも
この年の雨は悲しいだけの色
何となくの幸せがいい小鳥鳴く
木の葉揺れ村に停った救急車

篠山市 永井かほる

菜園へ心も弾む朝の道
手抜きした菜園中が青じゅうたん
今朝の事忘れた事がさみしすぎ
真心で育てた野菜娘の家へ

三田市 尾崎一子

百景に勝る自然が里にある
七色の声もはじけるシャボン玉
光る道暗中模索遍路旅
心にも歳には歳の身だしなみ

三田市 辻開子

まだまだと思った孫の良い意見
じいちゃんの孫見る顔が優しすぎ
出口ない介護疲れが少し出る
絵手紙が届いて友の愛を知る

西宮市 株元玲子

手術待つ仏陀の本に心あずけ
日本丸トンネル抜けず立往生
潔くこたわり捨てて夜が明ける
あれこれと欲張り過ぎてギブアップ

三木市 山口久子

同病で友と院内散歩する
痛い痒い手は届かずに孫の手で
すれ違い挨拶したがどこの誰
台風で我が家を案ず病室で

奈良市 尾畑なを江

手につけた芸と技術で身を守る
とに角も笑えてる時幸福だ
たそがれて鳥も私も巢に帰る
決断が早くてあとでよく迷う

和歌山市 土屋起世子

お日様の笑顔をコピーして介護
体調にあわせて今日の予定表
忙しい時には飯もうまかった
言い過ぎを謝りたくてまた喋り

岩出市 村中悦男

先々の考えすぎを自戒する
安らかに花のたえない辻地蔵
ストレスの起伏で描く人生路
見頃という花の生命のどまん中

紀の川市 北山絹子

水恋し花も恋しい石仏
ふるさとを語れば風が丸く吹く
休耕田花の香りに癒される
柔らかな言葉の裏にある疑惑

鳥取市 大前 安子

倉吉市 前田 喜美子

省エネに配電盤と汗をかく
被災地の泪を見せぬ画にむせぶ
跳び越えぬ季節味わう国に住む
のりしろを信じて集う七回忌

鳥取市 坂本 とも湖

夢の中金に埋って目が覚めた
避難所は人目はばかり泣けもせず
家族より犬の出迎え声弾む

老い進む老母の心を思い知り

鳥取市 山口 千代子

病んで知る家族の絆身にしみる
あじさいと女の顔はよく変わる
いい人と偉い人とは違うなり
氣にするな大器晩成型もある

倉吉市 倉繁 泰輔

朝顔の蔓は日に日に伸びている
昔から貧しい暮らし慣れている
根が貧乏貧乏ゆすりあたりまえ
梅雨寒にしまった服を出して着る

倉吉市 藤井 美津恵

花手向け亡夫に語るかっこう鳴く
葉がぐれに梅の実ふとり梅雨半ば
散歩道すずめさえずる草の中
紫外線気にしながらの散歩道

理想だけ高く掲げてうとまれる
海へだて息をひそめて睨み合う
そこまですると思えど車走らせる
堀と井戸残る政治家今は金

米子市 生田 寒之

退職時撮った遺影を撮り直す
ご破算で願いましてはマニフェスト
意地を曲げ曲がった心立て直す
疎開した頃もあったと避難する

米子市 小塩 智加恵

夏野菜お返し米のパンを焼く
毎日の老々相手疲れます
月一度絆強めるお茶の会
笹巻きを嫁が届ける節句の日

米子市 後藤 宏之

ギラギラとした年頃をふり返る
熟れごろが過ぎてますます元氣出し
追伸が主文となったお伺い
おた福の顔のおかげで店はやり

米子市 田村 周子

白髪染めもうやめようかやめまいか
同期生会傘寿になつても弾んでる
古都の女雅な仕種美しい
風邪ひいて家族の絆ありがたい

米子市 成田 公一

肉林に縁なく酒池に足湯する
ほしいけどこは我慢の思案橋

一点の赤で全体生きてくる

ケータイが財布に代る貴重品

米子市 湯浅 久司

一人ならこっそり飲めるお留守番

しがみつき枯れて離さぬクレマチス

行列のできない店で話する

室内に住所移した蚊が憎い

鳥取県 飯野 莒子

嫁よ来い笑顔さみしい独身者

独身者春は何時くる背が丸い

雪ゆきと暗い空見てにらむ日々

ちぐはぐを丸くまるめる過疎に住む

鳥取県 大塚 美代子

片減りの靴に教わる新社員

見栄と欲捨ててゆつくり田舎道

故郷の美味しい水を金で買い

馬鹿になる事を覚えた老いの知恵

鳥取県 岡村 孝明

老骨も田植を終えて安堵する

枇杷狩りの児らに老い達生気受け

荷が届き小躍りしてる娘の電話

身辺の縁者リストアップの選挙前

鳥取県 下田 茂登子

独り言他人には言えぬことを吐く

あのことは言つてはならぬ愚痴になる

頑固爺の機嫌取るのもひと苦勞

丸い背が知つております過去の傷

鳥取県 田口 清帆

寄りそつて明日の希望に夢開く

化粧した言葉真意がつかめない

じいちゃんは齢のせいにしました逃げる

政争は止めて論争してほしい

松江市 相見 柳歩

金星に移る地球が減ぶころ

叶わない恋にポストも泣いている

ほめちぎる人の舌には乗つてやる

流行と逆のファッション追つて行く

松江市 山根 邦代

花終えたツツジの芽にも風やさし

何処までが嘘か本当か聞きのがす

やつとこさ夏の座敷に風が来る

孫の顔思い小梅を漬けておく

出雲市 黒目 英男

頑固者一途な思い貫いて

人生を愚直に生きて今がある

母の日に母を偲んで墓参り

散歩道僕のテンション高くなる

川柳がいろいろかぶ露天風呂
生きている大正昭和平成を
見ただけで書架の片付け無理と知る
息子きて仕分けどんどん進みすぎ

さざなみ五百号記念誌上川柳大会

作品募集

各題2句

投句締切

9月30日

投句料

1000円

(定額小為替/切手不可)

各題共選

「五」

播本

充子・奈倉

代天

楽甫

「百」

森中

由紀子・松

田代

規世鬼

「紀」

浅野

中恵美子・會

田名本

16-2

投句先

〒466-0855

名古屋市中昭和区川名本町1-16-2

浅野

滋子宛

主催

さざなみ川柳社

しまね文芸フェスタ2011 島根県川柳大会

会場 島根県民会館 3階大会議室

日程 9月18日(日)

時間 13:00~16:30

締切 13:00 開会 14:15

披講 14:30

参加費 1000円 欠席投句料1000円
小為替可、切手不可

投句先 〒690-0056 松江市雑賀町366

錦織禮子 宛 TEL0852-23-0307

投句締切 8月15日(月) 必着

兼題 各題2句

「姿」 新家 完司 選

「古」 竹治ちかし 選

「文」 松本 文子 選

「力」 安黒登貴枝 選

「血」 石橋 芳山 選

「中」 渡辺 康乃 選

「歴史」 熱田熊四郎 選

残暑お見舞い申し上げます 夏バテは早い気遣いして癒そう

2011年 盛夏

我々“川柳塔鹿野みか月”も第31回目の結成
記念大会を12月11日(日)に開催の予定です。

皆様のご支援を心からお待ち申しております。

※ 詳細はあらためてご案内したいと存じます。

川柳塔鹿野みか月

事務局 鳥取市鹿野町鹿野1279 中原 諷 人 方

〒689-0405 電話 (0857) 84-2100

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

旅つれづれ

仁徳陵

謹んで拝せば御陵ただ蒼し

巖島

清盛へ何か云ひたい島へつき

千潮の鳥居は棄てた気味があり

養虫庵に芭蕉を偲ぶ

みのむしの何代目かがぶらさがり

月ヶ瀬

一寸来て月ヶ瀬風邪をひくところ

奈良にて

奈良の宿ドカドカドカと靴を脱ぎ

神鹿

鹿おもへらくなるほど刀掛け

せんべいの薄くなったを鹿も知り

宮様と知れる鹿寄せみて帰り

正倉院

さう聞けば国宝らしい光りやう

お百度も足取早い二月堂

案内人聞いているのかとも云へず

ゆびさすは三笠若奈良ホテル

松花堂へああ江戸の水京の水

見てくれといふは礎石の興福寺

虫すだくまに極楽院は荒れ

猿沢の池

学童へ水が三分に魚七分

十八間戸秘めたる恋もありつらん

まんなをし地蔵

七転び八起きを祈るまんなをし

般若寺

その額も嵯峨天皇で知られたり

東大寺

奈良二郎つかい果たした人も聴き

奈良の奥山

寝仏のこれも一つの生きる道

信心で来たのに桜真っ盛り

花見茶屋毛布はおなじやうにはげ

菖蒲池遊園地にて

夕桜とんばがへりがしてみまし

愛染帖

新家 完司 選

交野市 田岡 久幸

自分より下手な句はわが励みなり

(評) 確かに、上手い句に打ちのめされて落ち込むより精神的に良さそう。優越感はあるをもち、自信は向上心を高めてくれる。

柏原市 森吉留里恵

玉の汗貧乏神をひるませる

(評) 貧乏神に好かれるのは怠け者や放蕩者。額に汗して働いている人には近寄らぬ。貧乏神も働き者には劣等感を持つのだろう。

池田市 上山 堅坊

がらがらのグリーン車の無駄止めようよ

(評) 誰が乗るのか知らないが、いつ見てもがら空きのグリーン車。エコに反しているだけでなく、庶民を不愉快にさせている。

兵庫県 上田ひとみ

ざつくばらんでともしんどい人だ

(評) 知りたくもない家族のことや家計まであけすけ。同じ調子で、こちらのプライバシーにまでずかずか。もう少し節度がほしい。

熊本県 高野 宵草

補聴器を全開にして呼名待つ

(評) 自分の句ならすかさず呼名しなければならぬ。聞き逃したら大変と緊張して待つのだが……。これが、なかなか出てこない。

大阪市 谷口 義

気短な人でも長生きは出来る

(評) 「短気は短命」かもしれないが、気の短い人でも定期健診を受けて摂生すれば長生きできるだろう。悲観することはない。

枚方市 伊達 郁夫

看護婦のお尻気になる回復期

(評) 身体が傷ついているときは、煩惱も影をひそめている。煩惱が鎌首を持ち上げてきたということは、退院が近いということ。

樺原市 安土 理恵

包丁を持ち出す程のことでない

(評) 猛獣を相手にしているわけではないから、いかなる争いにも包丁は不要。国と国の紛争もまた、斯くありたいものである。

神戸市 山田婦美子

花見した仲間が一人旅立った

(評) つい先日、満開の花の下で笑い合ったのに……。自分も含めて、仲間の誰が消え去っても不思議ではない年齢になってきた。

鳥取市 中宇地秀四

もう期待しない政治と宝くじ

(評) 歴史上稀にみる国難を前にして、いま

だに党利党略で動いている為政者たち。このような不屈き者を選んだのは私たちが……。

高槻市

気がいらぬ話を咳で止めさせる

限りある日を楽しむのが務め

堺市

ステテコもカラフルになるクールビズ

慣れてくるほどにケアレスマスが增え

堺市

緊張がとけたら快便になった

父ちゃんが早く寝るのを待っている

西宮市

ヒーローはそう易々と出て来ない

酔うとすぐ眠る愛想のない女

八王子市

三ヶ月振りね単一乾電池

特典もどっさり後期高齢者

鳥取市

急がない人だけ渡る歩道橋

自民なら原発事故は防げたか

豊中市

別人になりたくなってつづけた

一日が二十時間になってきた

寝屋川市

ライバルはジェット機は竹トング

和歌山市

しくじってから読んでみる説明書

福本 英子

片山かずお

村上 玄也

志田 千代

片山 忠

播本 充子

岸本 宏章

池田 純子

籠島 恵子

三島 裕丘

福本 英子

貧乏の割に脂肪が付きすぎる
若松 雅枝

靴までも光って見える恋敵
高橋 岳水

涙腺がどうにかなったようである
太田扶美代

残念を溶かしてくれた生ビール
井丸 昌紀

生きざまが句に現れてくる怖さ
田中 章子

ああボギーあなたは過去の男です
高瀬 霜石

ギブ・アンド・テイク テイクは得意です
矢倉 五月

人間という肩書を大切に
山野 寿之

丸くつてすんませんなど茹で卵
小塩智加恵

熱燗の二合が今日を過去にする
吉村 一風

遺言書書いてみたいが子は一人
篠山市 円増 純子

この歳で不慣れなベクレル シーベルト
大阪市 吉村 一風

幸せな酒が続いて詩が出来ぬ
根回しの酒の途中で酔っている

晩酌はセルフサービス悪しからず
五階から瓦のずれを知らされる

とりあえず深夜のテレビやめにする
仁部 四郎

五目ずし作って母に逢いに行く
谷 久美子

浅漬けの胡瓜さくさく酒はひや
村上 直樹

梅雨寒に毛布掛けたりたたんだり
有沢せつ子

正座して書く投句の字が曲がる
柴本ばつは

テープのお経こんなすげないもんはない
水野 黒兎

妻の留守少し破調の洗濯機
白川 淑子

山彦は旧友いまも里を守る
神戸市 白川 淑子

百均の鉛筆で書く夢無限
鳥取県 竹信 昭彦

コンサート ビリーバンバン老けはった
鳥取県 竹信 昭彦

ごろ寝するにも寒くなし暑くなし
いい気候だから晩酌して元氣

鷹の爪にとまどき意見されている
和歌山市 木本 朱夏

丸かじりするには頼りない菌室
和歌山市 牛尾 緑良

君もまだ健在か 古本屋にて
自然治癒なんて偶然だなきつと

この時を楽しんでますハイタツチ
尼崎市 長浜 美龍

計報欄いつか主役を張るわたし
豊盛市 藤田 千休

パスポートしばし独りになるつもり
大阪府 折尾 奏子

花火終わるこの寂しさは何だろう
高杉 千歩

三欲も失せて微かな好奇心
松江市 石橋 芳山

寝そべれば無口に時間過ぎてゆく
継続を背負って骨の軋む音

いざという時の自分が恐ろしい
誤字ばかり晒し気楽なしゃぼん玉

モノクロの方が本音が良く分かる
和泉市 横山 捷也

脚光を浴びてた頃の名刺です
三田市 北野 哲男

薬だけ忘れずのんで不摂生
長生きへ意地悪はあさんお手本に

楽しみがいっぱい心スリムです
賑やかに舞っても淋しげなホテル

天国で待っていますと恋女房
六十二年連れ添いました恋女房

大阪府 初山 隆盛

「八日目の蟬」見て夜中目が冴える
寝屋川市 富山ルイ子

痴話喧嘩さまり悪くて途中下車
河内長野市 梶原 弘光

特効薬のメシで男をゲットする
和歌山市 柏原 夕胡

誕生はよそであつてもおめでたい
海南市 小谷 小雪

地球儀の隅で蠢く日本国
藤井寺市 鈴木いさお

行水は死語にシャワーを浴びている
芦屋市 黒田 能子

脳味噌は甘いお世辞を舐めたがり
大阪市 岩崎 公誠

家計簿もほっそりとして職がない
大洲市 花岡 順子

ポケットに目算持つて美術館
姫路市 古川 奮水

母として生きる威厳のラツキョ潰け
鳥取市 倉益 一瑠

爺からの五月人形威張つてゐる
堺市 西村りつえ

一二酔い妻の言葉に刺がある
神戸市 山口 光久

要点だけ言うても聞いてない夫
大阪市 古今堂蕉子

大トロはくどいと赤身ばかり取る
堺市 奥 時雄

ツイッターなげきとびかう梅雨の空
鳥取市 高浜 勇

ペディキュアは自分自身のために塗る
橿原市 居谷真理子

逆らえぬ位置で湯割りの独り言
大和郡山市 坊農 柳弘

主夫として野菜見る目が肥えてくる
堺市 加島 由一

よその子の頭の良さを見るクイズ
京都市 高島 啓子

休肝日僕は朝から軽い鬱
河内長野市 坂上 淳司

肩書を外してみたら油虫
鳥取県 吉野いさお

身の丈の暮らしステコ冷や奴
泉佐野市 稲葉 洋

どれがどう効くのか仰山のくすり
大阪府 米澤 俣子

晩酌は迷惑かけぬよう手酌
枚方市 寺川 弘一

じいちゃんに奨めていますベレー帽
倉吉市 野口 節子

妻の根が我が家に張つて平和なり
堺市 大隅 克博

国会は底意地悪いところです
西宮市 泉水 冴子

東北へ励ましにゆく若さ欲し
尼崎市 春城 年代

デパートのフクシマ産を買っている
枚方市 丹後屋 肇

お土産のビリケン撫でてはんわかと
箕面市 広島 巴子

儲かると思えば聞くほど湧く疑問
高槻市 初代 正彦

違反金どこか自慢の後日談
鳥取県 斉尾くにこ

くちびるを尖らして来る反対派
茨木市 藤井 正雄

お隣のケチに染まつた寄付の額
大阪市 神夏磯典子

何してる今はあんたと電話中
三田市 雑賀 一泉

新人がにつこり若さ連れてきた
奈良県 渡辺 富子

おばさんが信心売りにやつて来た
三田市 福田 好文

投票へ行かず不平だけに参加
鳥取県 加賀田志延

物干しで煙草を吹かす頑固者
大阪市 太田としお

年毎に掃除の手抜き多くなり
河内長野市 針生 和代

老衰で死んだと運のいいお人
弘前市 福士 慕情

子が転勤頼りの肩をはずさる
京都市 榎本 宏子

箕面市 出口セツ子
遠い過去の縁で玉ネギが届く

岸和田市 増田 隆昭
締切りの投函すませ縄のれん

島取市 福西 茶子
茶柱が立って派手目の服を着る

西宮市 藤本 直
初歩き手を出しかねる 一步二歩

羽曳野市 吉川 寿美
半額のチラシヘバスを乗り継いで

豊中市 藤井 則彦
直角のお辞儀に透ける下心

倉敷市 撰 喜子
夫よりきちんと帰って来る燕

寝屋川市 岡本 勲
春つらら乗客ゼロのバスが行く

紀の川市 北山 絹子
あいさつも無しで続いている夫婦

岸和田市 井伊 東吉
義援金運配に善意伝わらず

倉吉市 山中 康子
ご亭主を大事に別れきつと来る

橋本市 石田 隆彦
胃カメラが現場で鳴らす非常ベル

西脇市 七反田順子
ごさぶりは内気らしいな仲間たな

三田市 堀 正和
パトカーがねずみとりしている平和

鳥取県 山下 節子
やる気あるのに何もせんでもないと言っ

堺市 荻野 像山
葬式の細目決めて月払い

日高市 根岸 方子
歳知らぬ人が若いと世辞を言う

塩竈市 木田比呂朗
八十路越えひげたくわえて枯れません

倉吉市 岡崎美知江
全身にゆっくり老いの波寄せる

香南市 桑名 孝雄
NHKあんまり斬らぬ時代劇

大阪府 畑中 節子
ガラス戸のむこうで蜂が恋して

米子市 成田 公一
冷えないビールはオンザロックでいい

寝屋川市 森 茜
起き抜けの白髪きよつとする鏡

奈良市 矢野 良一
贅沢は雨音聞いている昼寝

大阪府 小栢こずえ
出費せず回復術は昼寝です

鳥取市 吉田 弘子
産科以外医者とは密なおつき合い

大阪市 小谷 集一
酒飲まぬ友と時間をもて余す

大阪市 大川 桃花
連休になると体調悪くなる

富田林市 中井 アキ
売る程の宝はないが夢はある

米子市 加藤 正二
独り者呆ける閑なごともない

藤井寺市 津田シルク
不味ければまずいと言えるのも家族

和歌山市 喜田 准一
優しさか肩半分は雨が降る

大阪市 岩崎 玲子
宣伝の美女にはなれぬ化粧品

鳥取市 春木圭一郎
死について考え生もふと思っ

加東市 黒崎美紗子
それぞれの人生だった墓地の風

篠山市 沢山 啓子
台風も地震もよけてくれる村

東大阪市 西田いくひろ
節電に早寝早起きしています

羽曳野市 酒井 一壺
楽しみがたくさんあった無駄な道

鳥取県 岩崎 和子
書き忘れ日記のきのう浮かばない

大阪市 奥村 五月
鬱の日は効き目あらたか縄のれん

岸和田市 森元ふみよ
脳トレは漢字クイズできたえてる

富山県 有澤 嘉晃
読み聞かせしているママが先に寝る

誹風柳多留一篇研究 72

山田 昭夫・増田 忠彦
山口 由昭・小栗 清吾
伊吹 和男
清 博 美

565 四位の少将へ諸太夫きずをつけ

山田 四位の少将は「近衛の少将（五位相当官）で、特に四位に進んだ人」（日国）のことだが、江戸幕府の高家の官位でもあった。諸太夫は「③五位の武士の称。武家で五位相当の者（日国）で、一般には平大名の官位。官位はもともと朝廷の官職・位階であり、武家の官位は「公家相当官の外」であつたから、実質の伴わない全くの空名であつた。しかし、武家の格式としては厳然と威力を発揮し、旗本の高家が、並の大名より上の位になる。高家の主な仕事に朝廷との関係があるから、公家との釣り合いを考慮した処置なのかの知れない。

さて主題句だが、四位の少将へ五位の大名が「疵を付け」たというのだから、これは言うまでもなく殿中松の廊下での刃傷沙汰。当時吉良上野介義央は従四位上・左少将で高家肝煎、浅野内匠頭長矩は従五位下で、播州赤穂五万三千五百石の藩主であつた。

浅からぬうらみひたいへきずをつけ

一六四

清 賛

566 たくましき男と小あま土手を行

山田 土手はいわゆる吉原土手、吉原へ続く日本堤。そこを「逞しき男と小あま」が吉原へ向けて行つた。逞しき男は女衞、小あまは売られた少女であらう。

むこい事木綿模様で土手を行 二二五
小栗 賛。ですが変な句ですね。たくましい男に小あま？

伊吹 賛。業平を利かせるか？

清 他に該当する人物も見当たらない。女衞と小娘でいいとするか。

567 岡崎を弾けばそばから母かたり

山田 岡崎は三味線を習い始めに唄う小唄。子供が岡崎の練習をしていると、母親が「岡崎女郎衆く、岡崎女郎衆はええ女郎衆く」と歌詞をつけて唄う。その母親も昔習つたものだから、それを思い出しているのかもしれない。

おかざきハ左手をひろげけいこする

安一鶴 3

岡ざきをへんなでうしでひいて居る

九一六

山口 賛。心もとなひ弾きつづりを応援する意もあり。

小栗 賛。山口説の如くに解していた。全くの初歩の人に三味線を教える時は、口でメロディーを言う。

清 賛。

568 ちうけいでつくやうに駕和尚出る

山田 中啓は「親骨の上端を外へそらし、畳んでも半ば開いているように造った扇」(『広辞苑』)で、僧侶が儀式などで後襟に差して用いる。

駕籠から降りようとする僧侶、頭を下げた形で降りるから、襟に差した中啓が「突く」ようにして出て来るように見えるというのだろう。

すばまらぬ扇を鈴へ和尚さし 萬一24

増田 賛。なるほど、後ろ襟ですか。

山口 賛。面白い形容です。

小栗 駕籠から降りる時、衣の袖が地面に触れぬように手を上げる動作をすると、手に持った中啓を突き上げるように見えるということだと思いましたが、根拠はありません。清 礎賛。

569 政宗を藁苞にして江戸へ出し

山田 政宗はおそらく正宗であろうが、その正体はつきりしない。名酒か名刀か。

酒の銘柄としての正宗は「この名、近年江戸にて大に行はる。安政に至り衰へ」と『近世風俗志』(後集巻二)にあるが、同書は

「天保八年以来、見聞に随ひ、これを散紙に筆し」たものだから、主題句の元句が詠まれた安永二年には存在しないことになる。一方

正宗の名刀だが、これは鎌倉時代のものであるから、勿論この句の時代には存在した。しかし本物の正宗が「藁苞にして江戸へ出」すような事は有り得ない。当輪講メンバーの増田兄はその著「江戸川柳と武具(上) 刀剣」で、「……正宗」の銘を切った奈良づくりの新刀を荷駄にしてだす様子だろうか」と疑問を投げかけておられる。「始めきらめき奈良刀」は、その程度の刀なのですよ、と揶揄している句とも解せないこともないが、どうも落ち着きが悪い。

以上のような次第で、ここは「正宗とは剣菱の酒落であろう(後に至つて正宗という銘酒の現はれたのは、此酒落が現実されたのであると思ふ)」という「川柳江戸砂子」の説あたりが妥当なものでないかと思うが如何であろうか。剣菱は現在は灘だが、当時は伊丹で醸造されていた。將軍家の御膳酒にもなった銘酒で、下り酒の代名詞的存在だった。主題句の場合、剣菱の薦被りとなりそうだが、下り酒一般としてもよいだろう。

何れにしてもはつきりしないので、ご教示賜りたい。

花ハ桜木酒ハけんびし

ケイニ 二六乙37

剣菱の大紋を着るにわかあめ 二六6

増田 賛。なるほど。以前石川女史に伺ったことがあるのですが、「いわゆる銘酒正宗は時代が下がるものの、銘柄『正宗』は古くからあったとも思われる」とのこと。刀でいえば、刀身だけの東刀(奈良には限らず)が藁苞にされて送られることはあったようです。

小栗 酒の「正宗」だとストンと腑に落ちる句だが、この時代に「正宗」があったかどうかはつきりしない。「桜正宗」のホームページには、同社の家祖が、「臨済正宗」の経典を見て「正宗」が「清酒」に通じることから樽印にしたもので、これが天保十一年のこととある。いくつかの解説書がこの説を踏襲しているが「白鶴」のホームページには、「白鶴」は延享四年に命名したものであるが、それは「鶴」や「正宗」などの銘柄がたくさんあったので、それらと区別するために、この名を選んだとある。即ち、延享の頃に「正宗」は既にポピュラーだったということになる。清 どういう訳か、川柳に正宗は出て来ない。主題句もよくわからない。

目下、「江戸の酔っぱらい」と題して、江戸の酒について執筆すべく準備中である。

共選欄

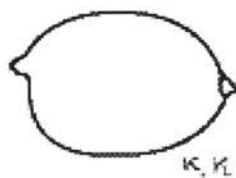
檸檬

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 七一〇句)



「利那」 三宅保州 選

その利那命をかけた跡がある
 その利那正気に返る白昼夢
 人間の利那を笑う大宇宙
 カメレオンの舌の早業撮るカメラ
 なまずの髭がピクリ動いたその利那
 蓮の花開く利那に見る浄土
 初盆に利那の夏の蟬しぐれ
 ニアミスの利那ツバメの宙返り
 化粧した利那女の顔になる
 擦れ違ふ瞬時に光る女の眼
 瞬きの間に消えていた男
 団欒の家族利那の青いバラ
 コンビニで真つ赤なバラにすれ違ふ
 紫陽花が今化けているお静かに
 この世とは利那せつなにも花も咲く

鳥取県	竹信	照彦
京都府	清水	英旺
三田市	上垣キヨミ	
シドニー	坂上のり子	
香南市	桑名	孝雄
和歌山市	福井	葉摘
米子市	後藤美恵子	
弘前市	福士	慕情
箕面市	広島	巴子
堺市	西村りつえ	
和歌山市	柏原	夕胡
鳥取県	斉尾くにこ	
塩竈市	木田比呂朗	
枚方市	伊達	郁夫
大阪市	榎本日の出	

「利那」 山本希久子 選

積み上げたものが崩れてゆく利那
 愛別離苦すべて利那というこの世
 ポンと手を叩けば既に過去のもの
 雨垂れの利那よ今日は四拍子
 人間が哀し咄嗟にエゴが浮く
 幸せの利那を繋ぎ生きて行く
 昨日のはくは昨日のうちに捨てました
 コンビニで真つ赤なバラにすれ違ふ
 ライバルの瞬間芸に拍手する
 宇宙から見れば白寿でさえ利那
 利那から生きる力をもらつてる
 お念仏利那の無我を追いかめ
 人生の利那せつなを立ち泳ぎ
 一日が利那一年まだ利那
 幸運がいま目の前を横きつた

藤井寺市	太田扶美代
和歌山市	古久保和子
堺市	大隅
松江市	石橋
和歌山市	堀
鳥取市	森山
弘前市	高瀬
塩竈市	木田比呂朗
八王子市	播本
生駒市	飛水ふりこ
出雲市	宮田
河内長野市	黒岩
神戸市	白川
米子市	白根
岸和田市	藤原
	昭

夏椿はらり零れる潔さ

音も無く利那に消える遠花火

利那主義花火大会梯子する

くらやみの利那に照らす月あかり

一匹の螢が飛んでゐる利那

枯れて行く利那にレモン振りかける

魂の叫びゴッホの絵の利那

おしゃべりの終わる利那を待つてゐる

子育ての利那利那を生きて母

負けたなと思う妥協をした利那

瞬きの間にジキルからハイド

デジタルで刻む利那を生かされる

利那の果て星になったと信じたい

物の怪に憑かれ利那をまつ盛り

背を見せた利那に勝負ついている

その利那きつと火の中水の中

利那から生きる力をもらつてる

人生の利那せつなを立ち泳ぎ

利那的な楽しみ今に蹴蹴く

運不運色分けされてゐた利那

一日が利那一年まだ利那

お念仏利那の無我を追ひ求め

その利那本音飛びだす感嘆詞

高知市 小川てるみ

高槻市 島田千鶴子

八王子市 播本 充子

神戸市 山根 弘子

藤井寺市 鴨谷瑞美子

米子市 吉田 陽子

香芝市 大内 朝子

米子市 成田 公一

大阪市 笠嶋 惠美

鳥取県 細田 裕花

弘前市 高橋 岳水

松江市 三島 淞丘

大阪市 古今堂蕉子

松山市 高橋 宏臣

鳥取市 岸本 安章

芦屋市 黒田 能子

出雲市 富田 蘭水

神戸市 白川 淑子

寝屋川市 富山ルイ子

大阪市 津守なぎさ

米子市 白根 ふみ

河内長野市 黒岩 靖博

高槻市 乙倉 武史

瞬きの間にジキルからハイド

ふりむいた利那に政権が動く

点滴の利那でつなく命なり

ライバルと会つた利那の好感度

利那を生きて美しきもの追うてゐる

邪心湧く利那逃げ出す青い鳥

大津波利那に夢が砕け散る

情報が利那に渡る広い空

幸せの利那自分を見失う

ためらいのその一瞬にある禍福

大切に利那を生きることにする

躍いた利那思想が翻る

安全神話が崩れてゆく利那

利那主義私が私であるために

今日という利那悔いなく生き尽くす

人間の欲の利那に眼を伏せる

利那せつな右に左に切つた舵

瞬間の判断だった一、二秒

削除キー利那に消える僕の過去

鬱の日を利那のお笑い癒やし

化粧した利那女の顔になる

流れ星願い浮かばず手を合わせ

生かされて利那利那に神と会う

弘前市 高橋 岳水

三田市 田中 章子

大和高田市 鍛原 千里

川西市 米原 雪子

松江市 松本 文子

和歌山市 武本 碧

高槻市 島田千鶴子

鳥取市 中村 金祥

豊中市 松尾美智代

大阪市 升成 好

岸和田市 堤 横代

吹田市 須磨 活恵

さいたま市 星野 育子

篠山市 酒井 真由

箕面市 出口セツ子

八尾市 宮西 弥生

香南市 桑名 孝雄

羽曳野市 酒井 一壺

米子市 竹村紀の治

豊中市 江見 見清

箕面市 広島 巴子

羽曳野市 吉村久仁雄

出雲市 竹治かし

運命の利那あまりに痛む胸

ともすれば独り善がりになる利那

生きてゆく利那せつなにある祈り

一日に一度仏を見る利那

雨垂れの利那よ今日は四拍子

緊張の利那フォルテの音響く

矢を放つ一瞬のは静止する

風船のその瞬間にある気迫

利那にも乗った鬼門の紙の船

驟雨去る女の嘘が消えている

ポンと手を叩けば既に過去のもの

色付きの夢を見ているのも利那

熱ためてためて蒸気となる利那

一瞬のひらめき迷路から抜ける

幸運がいま目の前を横ぎった

利那利那に神の赦しを受けている

ああ利那海が天から降ってくる

醉生夢死を反省させている利那

愛は利那複雑骨折してしまふ

秀句

昨日のばくは昨日のうちに捨てました

その利那神も仏も留守だった

落日の利那に今日を折り畳む

枚方市 小林 わこ

大和郡山市 坊農 柳弘

藤井寺市 太田扶美代

唐津市 仁部 四郎

松江市 石橋 芳山

大洲市 花岡 順子

京都市 高島 啓子

河内長野市 山岡富美子

神戸市 山田婦美子

福島県 七ツ森客山

堺市 大隈 克博

和歌山市 古久保和子

橿原市 居谷真理子

奈良県 渡辺 富子

岸和田市 藤原 昭

米子市 政岡未延子

神戸市 山崎 武彦

大阪市 鶴田 遠野

大阪市 谷口 義

弘前市 高瀬 霜石

羽曳野市 吉川 寿美

西子市 黒田 茂代

利那主義も測つてゐるシーベルト

その利那神も仏も留守だった

手品ではない人が消え街が消え

醉生夢死を反省させている利那

若者は利那反発力がある

これからは利那利那をたのしんで

利那から利那へスイッチ切りかえる

ああ余命利那せつなを泣き笑う

利那利那に神の赦しを受けている

人間の脆さ自然界の利那

擦れ違ふ瞬時に光る女の眼

歴史には残らぬ利那生きている

愛を知る利那に蝶になるだろう

アルバムに愛の利那が甦る

震度六その時何も出来なんだ

ふるりの海に散骨する利那

紫陽花と色の変化に酔う利那

失敗の知恵が利那に生きてくる

利那利那に忍耐のいるくらし

秀句

被災地にはほえみ利那だとしても

負けたなと思う妥協をした利那

散る利那花も女も美しい

堺市 内藤 憲彦

羽曳野市 吉川 寿美

堺市 矢倉 五月

大阪市 鶴田 遠野

美作市 小林 妻子

西宮市 西口いわゑ

尼崎市 長浜 美籠

香芝市 大内 朝子

米子市 政岡未延子

八尾市 高杉 千歩

堺市 西村りつえ

大洲市 花岡 順子

大阪市 梶尾 奏子

枚方市 丹後屋 肇

和歌山市 福本 英子

堺市 加島 由一

豊中市 池田 純子

東京都 井上つよし

鳥取市 土橋 螢

寝屋川市 森 茜

鳥取県 細田 裕花

大阪市 原田すみ子

■句集紹介

『ポコ・ア・ポコ』

藤井 則彦 著

燦
燦

丹後屋 肇

拝啓 藤井則彦様

贈って頂いた貴方の川柳第一句集をテーブルに置いて、マグカップに淹れた熱い珈琲を喫しながら、徐ろにページを開きました。

最初、楓葉先生のお祝いのことばの中にあるように「朝日なわ柳壇」の最難関を僅か十年で、百句以上の入選を果たされたことは、まさに誇るべき快挙である、私も喝采の拍手を送りたいと思います。

そして、その初入選句を拝見して目を剥きました。

久し振り北斗七星あんなとこ

則彦さんの心の動きが素直に胸に響きました。この平易で簡潔な十七音のリズムで大宇宙がしっかり捕えられています。面白いなと思いました。そしてこの一句は則彦川柳の原

点となり、やがて源流となって滔々と流れ、大河の一滴になるだろう予感を覚えました。

もうコーヒースはそっこのけ、一気に読みつづけました。面白くて面白くて釘付けになりました。時に笑い、時に頷き、時に警鐘を聞き、時に哀愁に噎びました。

そして則彦さんの自選二百句に移って、それが更に一段と加重されて則彦ワールドの完全な虜になってしまいました。コーヒースは既に冷めていましたが、私一人、亢奮のルツボで燃え滾っていました。

読後しばらく、大きく深呼吸して冷静に冷静に言い聞かせて、則彦川柳のこの面白さは一体何なのか、自問自答しました。

路郎師が川柳は人間陶冶の詩と宣言され、それを基礎に川柳塔は階を重ねて今日に至っています。が、則彦さんはそこを踏んまえて、人情や世態をよく観察し、その裏に潜むもの、隠れているものを軽く摘み、可笑しくも鋭く抉り出して、見せてくれているのだと思います。薫風師もよく謂われた川柳の本質とも言うべきインサイトが利いて、それが則彦川柳をこんなに面白いものにしてているのだと思います。

一口に人間の観察と言いますが、そのエネ

ルギーの保持は並大抵のものではないと思います。日頃から培われ、磨いておられる川柳眼に今更ながら、深甚の敬意を表したいと思っています。

楽しくて胸を打つ『ポコ・ア・ポコ』本当に有難うございました。すっかり冷え切ったコーヒースはレンジでチンをして頂くことに致します。今度会える日を楽しみに。 敬具

追伸

『ポコ・ア・ポコ』から私の好きな句を並べて置きます。

おはようと妻に言われて畏まり
小説の主人公らと乗り過こし
天井をじっと見つめる目玉焼
踏切がいらいらと鳴っている
階段を踏み外させた脚線美
不透明な会社もビルはガラス張り
口下手が射止めたトップセールス賞
無用だが居るだけでよい人もいる
天井へ独り笑いの赤ん坊
何をしに二階へ来たか又降りる
僕の嘘じつと聞いている僕の耳
ガーベラは一礼をして枯れていく
ユトリ口の白と向き合う孤独な日

季節

岸本 宏章選



寒くても多くの生れた冬が好き
黄砂まで運ばんといて季節風
ひとときの活気過疎地の田植どき
独り居の米研ぐ指に冬を知り
カレンダー通りに四季がやって来ぬ
マネキンの季節一足先に来る
梅雨入りにまたリユーマチの機嫌とり
花愛でる手にはティッシュの花粉症
被災地にけなげにも咲く四季の花
スパイスを効かせる夏野菜カレー
野の花を活けたら季節匂い立つ
節電で季節感覚取り戻す
四季を愛で四季に踊って生きている
ひまわりが夏限定の恋に生き
スーパリーの野菜売場に四季がない
うつろいの早さに齢が追いつけず
座禅くむ暑さに拍車蟬しぐれ
盆休み働き蜂の大移動
天然のクーラー青田風が抜け
梅雨空の鬱に剣刺す花菖蒲
季節に合わせ背広四着持つている
花も鳥も恋の季節を謳歌する

公一 堅坊 千代子 輝夫 正和 雅枝 蜂朗 政勝 充子 志千代 巴子 悦子 遠野 玄也 伊津志 雅美 千休 美千代 キヨミ 弘一

季はめぐる翳んでいると置き去りに
四季を追ひ四季に追われて生かされる
就職に冬の季節はまだ続く
歳時記を大切にする母の四季
暴漢に注意裸になる季節
一浪に春が巡りて木の芽立つ
旬のものだけが持つてゐる真の味
作物の旬を知らない子が増える
一坪の庭に春の芽春の夢
句の味昭和はちゃんとおったのに
華やかな春地吹雪の冬ここの津軽
行水の思い出今年も暑い夏
春は恋秋は別れをしてビエロ
旧暦にぶれない四季を教えられ
悲しみのなか震災地にもサクラ
佳

働いた汗が季節を知っている
かき氷溶けても話まだ続く
茄子カボチャ旬の匂いのする田舎
台本のない人生に雪月花
生も死も小さきことよ四季めぐる
人
復興の春は必ず巡り来る
地
引きすって生きる3・11を
天
晩秋にいま生きるとは死するとは
軸
寒がりへ誰より遅い春が来る

ふみ 唯教 圭一郎 扶美代 螢 (吉いさお) 光久 東吉 茶子 則彦 千歩 芳山 遼昭 緑良 篤子 善信 哲男 一粹 賢子 霜石 小沢淳

気まぐれ

岩本 笑子選



無人駅きまぐれなのは雲でしょう
気まぐれな蟻は道草喰うらしい
気まぐれな一億人の評論家
昨日までワインは赤と決めていた
気まぐれの一手に敵がうろたえる
気まぐれな風に委ねるシャボン玉
そつば向きながら返事をするしつば
ときどきは風に任せて様子みる
気まぐれに長生きしてるわけでない
気まぐれを許す財布が欲しいもの
気まぐれな天気私という勝負
気まぐれの船頭要らぬ日本丸
気まぐれに見えて祖父には祖父の道
気まぐれに剪定鋏持つてゆく
気まぐれなジョークの裏にある本音
気まぐれに植えたゴーヤがやみつきに
きまぐれな雲が運んで来た時雨
風媒花気まぐれ風にさからえず
気まぐれと歩くつまらない一日
きまぐれの意見集めるアンケート
指切りをしても明日の風が吹く
気まぐれのまぐれに潜む落し穴

四郎 昌鼓 ちかし ひとみ (編) 洋 ぬり子 堅坊 美知江 公一 巴子 直 正雄 螢 毅 千代 千代子 ヒデコ (編) 道子 美恵子 宏章 芳生 くにこ

気まぐれに買った妻へのプレゼント
 気まぐれな財布のひもがまたゆるむ
 きまぐれな自分一番悪いなあ
 気まぐれな蝶で待つてる日は来ない
 気まぐれに暮せば帳尻が合わぬ
 きまぐれな風に靡かぬ華でいる
 気まぐれな山に呼ばれる登山靴
 気まぐれに生きてますかと鳴る電話
 気まぐれが満ち足りている百均屋
 気紛れに生きて媚びないビエロの眼
 気まぐれを誘って揺れる熱帯魚
 気まぐれが乱す律儀のマイペース
 寅さんはきまぐれでした好きでした
 気まぐれな風が買わせた宝くじ
 気まぐれで決めたが憎い休肝日

住
 きまぐれな杖が倒れた方なく
 気まぐれに配置してある目鼻口
 気まぐれが自由席から物申す
 気まぐれな猫だ十日も家出する
 きまぐれが一升瓶を下げて来る

人
 気まぐれにも喫水線がありました
 地
 気まぐれな舟頭が漕ぐ泥の舟
 天
 気まぐれをすんなり受ける夫の技

軸
 気まぐれな福の神にもお年玉

捷也 章子 泰女 雅枝 ふみ 茂代 久美子 留里恵 孝雄 (上) 紀子 奏子 順子 (大) としお 義雄 一風 志延 淳司 裕花 久仁雄 善信 ばつは 強一 尾崎一子

ぞろぞろ

林 さだき選



ぞろぞろと企業戦士を吐くホーム
 リクルートスーツぞろぞろ解禁日
 結果論ぞろぞろ寒くなる話
 ぞろぞろと史跡巡って古都の風
 ぞろぞろと外湯めぐりの下駄の音
 ぞろぞろと笑った顔が寄席を出る
 似通った人ぞろぞろと競馬場
 ぞろぞろとハローワークは休めない
 夜の部がはねて追っかけ疲れ果て
 ぞろぞろと未練引き摺るのは男
 ゴキブリがぞろぞろ入るなんて嘘
 ゴキブリぞろぞろ三日留守の間に
 困子虫ぞろぞろ君も必死だね
 逆らえばぞろぞろついてくる小言
 ぞろぞろと裾を引きずるニューモード
 暇なママぞろぞろ集い姦しい
 八百長がばれて引退ぞろぞろと
 だんじりの列にぞろぞろ家族連れ
 B級のグルメぞろぞろ人の波
 ぞろぞろとボロが出てきた収支表
 原子力ぞろぞろ名乗る専門家
 隠してた危険ぞろぞろ出る不安

美千代 まみ子 裕花 篤子 週行 哲男 直 淳 雅明 留里恵 碧 (節) いさお 堅坊 千鶴子 光久 のり子 一弘 東吉 正和 みつこ 一泉 セツ子

先頭の親を信じて行く子鴨
 孵化をした小亀に遠い波の音
 春の音させて猫の子ぞろぞろと
 支払機へ連休前にならぶ列
 ぞろぞろと並ぶこの列なんの列
 いまひとつ旗が靡かぬデモの列
 先頭を行くブラカードだけ元氣
 ぞろぞろと歩く男に影がない
 番記者が大臣の後つきまとう
 避難所でまだまだ並ぶ夕御飯
 白状をすればぞろぞろ出た余罪
 ひまは列の最後にすべり込む
 自慢はなしぞろぞろ並べ鼻摘み
 ぞろぞろと謝罪社長は生き残り
 ぞろぞろと寄つて来るのは欲の皮

住
 妖怪ロード仲間が多いほどいい
 原子力のトラブル絶えることがない
 ぞろぞろと今度こそはとくじ売場
 顔見せか議員ぞろぞろ被災地へ
 ぞろぞろとまだ曳きすつている戦後

人
 老い支度過去がぞろぞろ苦も楽も
 子とが群れる被災地のカレー鍋

地
 霜子 満子

天
 ぞろぞろと出てくるにわか評論家 竹泊ちかし

軸
 肩書ぞろぞろ名刺の裏も御覧あれ

洋 雅美 英子 唯教 敏治 慕情 玄也 准一 振作 かつ子 倫子 ひとみ 公誠 四郎 朝子 大鯨 宏章 修 深千恵子 扶美代

初歩教室

題 — ポーズ

鈴木公弘

なじみのある課題を出そうと考えたのが失敗でした。「ポーズとる」場面の説明句は表面を滑っている句がいつもより多く、その分、傑作が少なかったように思います。

【政治家批判の句】

原 からさわぎポーズに見えた不信任 妙子
原 退任のポーズで政治踊りだす 正二
原 ポーズ取る保身必死の議員達 洋一
原 演説とポーズ上手で票集め 和幸
原 政治家のポーズ飽きあきするニュース 久美子
最初に並べられたから駄目な句、と勘違いしないでください。川柳には批判の目を養うことがとても大切なのです。それを教室の皆様知ってもらうため、前に置きました。知恵のない政治家が増えましたね。

【見直して提出してほしかった句】

原 ポーズとる背延はししたり傘寿です 冷子
添 傘寿の背のばすポーズが心地よい
原 ポーズする横から見れば木偶坊 紀美恵
特に悪いではありませんが「木偶の坊」

です。早い話、寸胴の体型を嘆いておられるのですね。

原 ポーズなら笑顔ピースで本決り 武臣

「本決まり」がよろしいかと思えます。

原 乳のむ娘慈愛に満ちる母まぶし 一子

添 乳のみ兒へ慈愛に満ちる母まぶし

このお子様は女兒なのではないですが、性別に

関係ないから慈愛なのではないでしょうか。

原 ポーズ良くとれた写真がっかりだ 勝治

添 良いポーズ撮れてなかったガツカリだ

原 英会話ポーズを押して繰り返す (蘭) 弥生

添 英会話ポーズを入れて繰り返す

原 句の「押して」が理解できず苦労しました。

添 添削句はすれ違っていますでしょうか。

原 悩ましいポーズで誘う須磨の浦 弘泰

須磨の浦は、和歌が何かに詠まれています

かったた海水浴場ですか？

原 ハイポーズひ孫の笑顔にいやされる (山) 久子

添 ハイポーズひ孫の笑みにいやされる

原 句は中8です。私は認めています。

原 アカンペー孫がおどけて取るポーズ 登美子

ポーズの説明で終わっています。せめて

「アカンペーおどけて孫がポーズとる」と

すれば、どの家でもそうか…という共感を

得ることができます。

原 強がりのポーズときどき軋み出す ひとみ

添 強がりのポーズ相手の口に負け

原 詠むポーズしているうちに十五日志延
俳句でも詠もうとするポーズでしょうか。

原 タイガースガッツポーズを忘れてる 一泉

「兄貴」も歳をとりました。

原 意識してポーズするからきこえない 惠美

添 意識してポーズとるからきこえない

原 句の着想OKですよ。

原 煮物食べ熱さに負けて猫ポーズ 記久乃

添 煮物食べ熱さに負けた猫ポーズ

食べたのは、あなただけ猫？

原 両手挙げポーズとりた明日のため 英男

両手を上げることを一般にはバンザイと言

いませんか…それがなぜ「明日のために」

になるのでしょうか。

原 広告に人の心買うポーズ (宮) 俊子

添 広告に人の心を買うポーズ

原 天を指す彫刻像にみせられて (田) 久子

真似てみたのでしょうか…結論がかけてい

ます。

原 ハイポーズ撮影されるガレキ山 安子

大震災の現場はハイポーズなどと言えるよ

うな状態ではありません。やや目の位置が

高いですよ。

原 ホームラン撃つポーズして併殺打 憲

この場合は「打つ」がいいと思います。

原 遼君のガッツポーズを応援す 律子

誰もが納得する普遍的な句は事実上作れま

せんが、この句の場合は個人的な好き嫌い
ですから、あつそう……という反応になつて
しまいます。意思表示の工夫をしましょう。

原 犬だつて餌ねだる時ポーズとる 温 子
嫉の問題でしょうが「犬だつて」そんなの
だから「欲しい人間もポーズとれ」と言っ
ているように読めます。

原 ライバルのポーズ十年若作り 智加恵
どのようなポーズが若作りにみえたのでし
ようか。そこを示すことが肝要です。

【状況描写・報告になつてゐる句】

ダンディなポーズで去つた児玉さん 眞砂子
幼稚園児親が見てとすぐポーズ 綾 乃
子供らのポーズいつでもVサイン 寒 之
どうして状況描写や報告調の句が駄目かと
言つと、相手（その句を読む側）と感動ま
たは反発を共有できないからです。感情の
共鳴が生じるか否かを無視することはでき
ません。重箱の隅をはじる必要はありません
が、読み手に有意義な情報の送信になつ
ているかを問われるのが、川柳だと考えて
よいと思います。

【入選句】

初スツマネキン真似てポーズとり 開 子
五時チャイム社長ポーズの屋台酒 敏 治
ポーズだけはひたすら秘書任せ (勸) 宣 子
誰よりも綺麗に写るポーズとる (仲) 章 子

ご自分だけそう思つているところがチャー
ムポイントでしょう。

一升の餅を背負つてハイポーズ よしみ
「背負わせ」なら、もつとよいでしょう。

強がりのポーズをみせてそっぽ向く滋彦
スタイルの悪さポーズでカバーする 治 子
生き様がすべてポーズになった猫 のり子
地の底でマグマ噴火へポーズ貯め (高) 道 子
モデル嬢お客を睨むのも仕事 宏 造
壇上の演者カメラを意識する 孝 明
懷妊にガツポーズの里の親 宏 之
名を忘れ思い出そうとポーズみる 美紗子
姿見にまよふようしる風呂上がり (藤) 昭
化粧塩着せられいわし主役の座 節 子
ウインドのバッグのポーズ私呼ぶ エミ
フクシマの野菜食う顔大写し 篤

頼みごと言い出す前のワンポーズ 堅 坊
人柄が良いがポーズが目立ち過ぎ 義 雄
疲れたと口に出さぬが顔を出す 正 彦
「……顔に出る」でもよいかと思ひます。

さりげないポーズの遺影選つておく 孝 代
光追うポーズでいつも生きてゐる 留理恵
幸せのポーズしている笑い皺 起世子
カメラマンポーズ取らせるのがうまい 秋 星
御帰還をヨガのポーズで御出迎え 弘 光
そりゃ豚だ猫のポーズと言うけれど 孔 一
無関心のポーズとられてむきになる (俊) 美恵子

復活のポーズを取つた大相撲 紀 雄
【佳 句】
ビキニには注文多くなるカメラ ちづる
「……多くする……」と書けば自分の位置がは
つきりして、もつと良くなります。

嫁くれた服を着てポーズして見せる こそえ
善人の顔で時々舌を出す 真 澄
ポーズの裏側をカメラは知つてゐる (俵) 玲 子
美しい逃げのポーズを模索中 菜 摘
おじき草謝罪のポーズ板につく 幹 子
靴紐を結ぶポーズに惚れました (白) 淑 子
みせかけのポーズに惑わされぬよう 真 由
老人のポーズ歴史が浮きあがる ふみ子

【今月の推せん句】
いつの日か老いてポーズも似た夫婦 坂本ミヨノ
空気のような存在の裏面でしようね。
胸に落ちぬポーズで返す試食皿 内藤 憲彦
この程度のポーズなら許されるでしょう。
ポーズとる妻に耐えてる古鏡 稲見 則彦
こんなはずでは……と、何度も背中あたりを
見返して、最後には鏡の古さのせいにして
しまふ、妻の馬鹿げた顔が浮かびます。

【私の句】
腰痛のポーズして行く溝そうじ
ふと我に返るポーズの爽やかさ
(登載漏れ方は役員が添削して返却します)

秀句鑑賞

同人吟 福士慕情

— 7月号から —

日本の領土へなんで柳腰

三浦 強 一

北方4島、尖閣島、日本の領海を侵犯されているのに日本の政府は確固たる信念が見られない。外国に侮られてはいけない。

溺れ切ることも叶わぬ水中花

高橋 岳水

呼吸を止めたまま水中で揺れている花。私の姉は筋萎縮症に似た症状で寝たきりになっている。死にたいと言っても、自分の力では死ぬことも出来ない。

出る杭を打つ手加減が難しい

小谷 集 一

後継者を作ることの難しさ、強く打てば直ぐ折れてしまう、だからといって甘やかすのも考えものである。難しいところである。

言葉尻すこし削って丸くする

岩崎 公誠

その時々で感情で言葉尻が微妙に変って、不快感を与える。時に妻との諍いには、語尾を丸くしておれば角がたたない。

爽やかな空気朝刊ひらくまで

山岡 富美子

朝刊を開く、もういいけません。大地震、与野党のごたごた、殺人や事故で紙面が埋まっている。爽やかな気分はもう消えている。

全日本川柳2011年仙台大大会が東日本大

震災の渦中であつて、賛否両論のなか、紆余曲折しながらも6000名を超える参加者で盛会のうちに大会は実行された。

大野風柳会長は挨拶のなかで「川柳は現在を詠う短詩文芸でもある。今こそ、この未曾有の大震災に目を背けることなく、大いに川柳を詠んでいただきたい」と言っておられた。柳人の誰もが作句されたと思う大震災をまだ引き摺りながら337名の同人各位の熱い視線を感じて鑑賞したつもりですが、多くの秀句の中から数少ない句を抽出することの難しさをつくづくと感じた次第です。

冤罪が晴れても戻れない暮らし

柏原 夕胡

冤罪に勝訴したとしても失ったものは大きい、家族、青春、友人、職場など、そして社会は時間と共に風化して行く、割り切れない荷物がまだ背中で燻っている。残りの時間で何が出来るのか、夢を書き直して前向きに生きて欲しいものである。

雨が降るまではわたしの空だった

木本 朱夏

順風満帆、空は晴れていたのに、この雨はなんなのだろう。私の心を塞いでしまった。しかし雨は必ず止む、そして空は前にも増して大きな虹を架けてくれるでしょう。

死神も女神もチャイム鳴らさない

高瀬 霜石

何の予告も無く突然訃報はやってくる。心の準備が出来ないまま、癌の告知、突然の事故、死神には気を付けなければならぬ。女神はいつ来ても大歓迎である。

マンネリをこつこつ築きあげている

石橋 芳山

マンネリの殻を破ろうとするが、まてよと気付く、平凡な暮らしの中にこそ幸せがあることに気付く、幸せをこつこつ築く。

鳥たちが羽根を休める樹になろう

早川 遼行

「雨ニモマケズ」が浮かぶ、疲れた鳥がいたら癒してやれる、そんな樹になりたい。

結果よりやつぱり汗の量とする

岩 佐 ダン吉

企業では努力よりも結果を重んずる人も居るが、流した汗は尊い。骨となり、肉となつて備蓄されてかならずや花開く。

古傷を語れる友に会いにゆく

太 田 昭

老いれば老いるほど古傷を語れる相手が居なくなる。昔の思い出話を共有出来る相手があることの幸せをしみじみと感じている。

本場の六場ガイドに書いてない

海老池 洋

大抵はその地方の主だった風光明媚の場所が記されているガイドブック。地元だけが知っているスポットがある。津軽にお出での際には是非一報のほど。

生き方の変えようもなく老い加速

高 杉 千 歩

今更生き方を変えようとは思っていない千歩さん。しかし年々速くなる歳月の流れだけはどうしても止めることが出来ない。

様々な人と出会える吹き溜り

山 口 光 久

人の吹き溜りには色々な人がいて話題が多い。人間を磨くためには多くの人々との出会いが必要である。

気分転換うまくするのも生きるコツ

長 浜 美 籠

自分をうまくコントロールすることも必要である。日常とは違う自分を曝け出すのも良いかと美籠さんは達観している。

保険屋が仮に仮にと繰り返す

福 田 好 文

保険セールスマンとの会話が伝わってくる。仮に事故に遭つたら、仮に病気になるたら、仮に入院したら、仮にお亡くなりになったら……と勧誘に熱が入る。

五体満足今日も母さんありがとう

坊 農 柳 弘

健康が一番、その健康を創ってくれたのはお母さんである。お母さんに日々感謝しながら柳弘さんは生きている。

花の名を覚え豊かになるころ

古 久 保 和 子

大地震の瓦礫の中で芽吹いた名も知らぬ花にも癒しはある。花は人の心を豊かにする。故郷におひとり様が多過ぎる

中 村 金 祥

働いて働いて、親は子の幸せを祈って都会の大学へと送り出す。子供は故郷には帰らず両親は老いてゆく。そして伴侶を亡くし、一人暮らしの老人が多くなる。

1000年に一度という大震災。目を覆う大惨状、九死に一生を得た人たちの再会の喜びも束の間に、原発の汚染、生きとし生けるものの総てが、絶望に打ちのめされ未来の展望が見えない。それでも人間は強かに明日へ向かって立ち上がる。川柳人が詠めば……

被災地に説得力の無い背広

福 永 ひかり

一億の心被災地はなれない

石 原 淑 子

抱きしめるだけで百万語の会話

黒 田 茂 代

復興への槌音遠い永田町

鶴 田 遠 野

ふと思うそうだ東北訪ねよう

峯 村 勲 弘

無味無臭線量計が震え出す

丹 後 屋 肇

天皇と総理被災地での違い

出 口 セツ子

幾万の御霊に謝する想定外

初 山 隆 盛

天気予報切なく思う北の空

西 口 いわゑ

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 7月号から

池 森 子

天の意のまま風の意のまま鬼こつこ

大 峠 可 動

天の意のままに風雨に晒された太陽は息苦しい程に熱砂を照らすのだらうか？ 地底は海面を押し上げて荒ぶる。

天と地の間で…鬼は何者か？

放射線降つてて花に蝶が舞う

七ツ森 客 山

これ以上降るな積るなシーベルト

震災から原発の未曾有の現実は何と言えいいのか途方にくれる。

そこでしか暮らして行けない花もあり蝶も居る。今迄築き上げた財産と歴史はその人達にしか解るまい。

今日は亀明日は鬼になつて生き

有 澤 嘉 晃

年齢を重ねると毎日を飛び跳ねてばかりはいられない、自ずとその範疇を泳がねば…。

この先は無題で生きることにする

島 田 千鶴子

これまでは生業としてのテーマがあつたがやつとその荷物は降りた、これからの自分を楽しむという開放感、どこまでも無題。

ブライドが時々老いの邪魔をする

近 藤 秋 星

その瞬間高所から見識をひけらかすお人が居ることは知つている。でも自負、自省の念があるのなら…とても可愛いお人柄。

それなりに古自転車も風を切る

小 谷 小 雪

自転車も古いがその主も似た者同士、シニアの講座はとも賑やか、二講座を午前午後と自転車で走る姿はまだまだ若者。

風を切つて…人生はこれから。

一歩引く心が返し針にある

宇 野 幹 子

いろいろな勧誘その他未知との遭遇にはまず立ち止まり疑つてみる必要がある。

確かめて、確かめて…返し針。

念入りに機打ころがして今がある

小 谷 滋 彦

人生はゲームだと思つ。機打を成功させて稼ぐ、その地道な努力があつてこそ…

豊かな今日があるのです。

引き算のない電卓が欲しくなる

木 田 比呂朗

現役引退の身にはもう足し算はないと覚悟はしたが…電卓は引き算ばかりする。

知人曰く、偶数月には講座の後で茶話会をやりましょう…と、思わず現実に戻つた。

胸底に開けてはならぬ窓がある

二 宮 栄 子

開けてはならぬと聞いたらのぞいてみたいと思つて他人事。なれど歳月を重ねた嘆きと悲しみは、もうフイクションになるでしょう。

枯れてなお終きつく指を棘す

田 原 一 兆

枯れても鋭い鋸歯、それは強い意志でわが身を守るしかない女にも似て切ない。

また諸語の悪魔たちから、家族を守らんと魔除けの為に門口に飾られるのは…節分。

無罪放免雨が降るので寝ています

森 下 よりこ

雨が降る日の母は、日頃の疲れを繕い物をしながら解した。私はそんな母が好きで周りを離れなかつた。梅雨と母と紫陽花とわたし。

それなりに満ちたりた顔美人の湯

赤 木 妙 子

美人になる…との温泉なら、女性たちは長湯を何回もしながら美意識に有頂天。

『道程』

林 さだき 著

踊り場

仁 部 四 郎

このたび『道程』を出した、福岡県粕屋町の林さだきさんは、一九四二年二月生まれだが、『川柳塔』のお仲間としては若い。二〇〇七年誌友、同人には二〇一〇年である。

『道程』に私は、「期待の人」という一文を寄せたが、そこで「キャバシテイのある人」という印象を抱かせる人だ」ということを書いた。更めて「キャバシテイ」を高校生用の英和辞典で見てみたら、容積・才能・資格度量・可能性という訳語が出ていて、私の使い方とは間違っていないかと思った。

そもそも、どういふいきさつなり、きっかけがあつて、林さだきさんのおつき合いが始まったのか、私にははっきりした記憶がないのだが、平成二十年の秋から冬にかけて、林さだきさんが、福岡県粕屋町から唐津市へ

私とその逆コースということがあった。平成二十二年十一月の第四十一回唐津市民文化祭川柳会では、「驚く」の選をしてもらった。そうして、林さだきさんのパワーというか情熱に目をみはらされているうちに、『道程』の選句をお手伝いすることになった。

九州には「川柳塔」の人が少ない。それだけに、活みにみちた川柳人が登場したことをとても嬉しく私は思っている。職歴、川柳歴もほとんど知らなかったのだが、第七章「出版おめでとう」に寄せられた知人友人の文章や「著者略歴」を読んで、「よく判りました」という次第で、そこでまた、期待の人という印象を再確認したところである。

膠原病という難病で、福岡市職員を早期退職する頃から川柳に取り組んだわけだが、NHK学園通信教育講座（川柳コース）を10年受講した努力と成果に最初に敬意を表したい。私は、昭和五十四年に、新聞の読者文芸で句が活字になってから川柳を始めたが、系統的には勉強せぬままであるから、講座を10年受講という実践には脱帽する。

電話相談員としてのボランティア体験を十一年余というのも、林さだきさんの川柳の背景であり核になっていて、初校の校正中に発生

した東日本大震災に、急拠第五章「東日本大震災の犠牲者を悼んで、二十句」を編んだところにも、キャバシテイの一端が見える。

「キャバシテイ」にはいろいろな訳語がある。先にあげた五つの意味をどのように組み合わせたら『道程』の紹介としてふさわしいかを考えていたら、「踊り場」という言葉にたどりついた。『道程』は、期待の人、林さだきさんが、大きく深呼吸をして、川柳人としての現在を、将来を「キャバシテイ」を考える「踊り場」ではないのか、私にはそのように思える。

最後に、私の印象に残った句を書き出して句集紹介したい。

宝くじ買う行列は笑つてる

妻の客わたしの居ない時に来る

合併に不満たらたら過疎のバス

とりあえず正直者の列にいる

ああ恋は手帳に略字多く書く

青春の下宿は消えて駐車場

測量の棒が遊び場消してゆく

戦争にやらぬ書名は迷わない

共稼ぎ失ったものないのかな

ふるさとを捨て避難のいさぎよさ

『麻生路郎読本』余滴

(4) 麻生梨里と「川柳雑誌」

桑 原 道 夫

西村梨里（本名リリ）は、大正14年4月4日（土）に路郎の五女として生まれ、平成23年4月21日（木）、満86歳で亡くなった。

「川柳塔」（平成12・7）に、「川柳は十七音字中心だと路郎は言った」というエッセイを書いたときのことである。その内容は、路郎句集「旅人」所収の句の音数を調べたもので、四句に一句が十七音以外の句であることを示して、路郎は決して頑迷な定型論者でなかったことを再確認したものであった。掲載後まもなく、御長男の哲夫さんが葉書を下さった。哲夫さんが私の書いたエッセイを音読するのを、梨里さんが「うんうん」と頷きながら聞いて下さったという内容で、非常にうれしかったのを覚えていた。その頃の私は、「旅人」は読んでいたものの、「川柳雑誌」を通覧したこともなく、麻生梨里が川柳とどのように関わってきたのかもほとんど知らなかった。

『麻生路郎読本』を編纂したときに、「川柳雑誌」の編集にまで携わっていた時期があることを知り驚いたが、それ以上のことは調べ余裕がなかった。そこで、麻生梨里が「川柳雑誌」に残した足跡を記録しておくことにした。

川柳雑誌社が事務所を大阪市西区土佐堀の昭和ビルに開設したのは、昭和12年10月であり、リリはまだ小学六年生だった。翌13年4月、大阪タイピスト女学校に入学した。

昭和15年3月2日（土）、川柳雑誌社本社句会（御津八幡宮）に初出席している。この頃から、川柳雑誌の仕事を手伝うことになったのではないかと思われる。

以後も毎月の句会にリリの名で出席しているが、句は載っていない。本社句会でリリの

句が掲載されているのは、昭和25年8月5日と同年9月2日の二回だけだ。本社句会ではほとんど出句しなかったのだらう。初めて「近作柳傳」誌友投句欄に句が掲載されたのは、昭和15年11月号で、〈網棚のみかん旅行がしたくなり〉（佛滅に遊びに行つて雨になり）の二句入選。昭和18年7月3日（土）、本社支那事變記念句会から梨里に改名。この月には、四女の奈那も出席している。同年10月号の「近作柳傳」では、〈ぶどう籠持ては貧しさ繪の如し〉（涙知らぬ女のほのかたいこと）など七句で巻頭をとっている。

当時の編集長は次男のアートだった。「川柳雑誌」（昭和18・5）の「廻轉椅子」に、〈本誌の編輯長として挺身、二箇年餘の努力を惜しまなかつた麻生アート（筆者註）16年6月号の「後記」に、（本號からアートが編輯部で



「川柳雑誌」（昭13・4）の1頁に「春の住之江公園にて」の見出しで掲載。説明に、〈路郎主幹の二男麻生アート君はヴァイオリニストで少年川柳家、五女のリリさんは大阪タイピスト女学校の一年生で少女川柳家だ。（金田並木撮影）〉とある。

働くことになった」とある)が××(筆者註「召集か?」)のため離脱したので、近く編輯部を改組強化し、職域完遂の實を擧げることにした」とある。

「川柳雑誌」は昭和18年12月に「雑誌奉還」終刊號を出したが、「麻生路郎物語(23)」「(川柳五十四年)路郎、昭和32・7」「川柳雑誌」(古稀特集号)に、(やむなく紙の闇買いをして刊行をつづけた。男の子は皆、応召したので、五女の梨里が、闇紙をリヤカーで印刷屋へ運んで、一カ月も遅刊もなく刊行を続けたが、)とあり、梨里が雑誌刊行に欠かせない存在だったことがわかる。

「川柳雑誌」は昭和21年8月に復刊したが、その頃は、三男の一步が編集長をしていたようだ。「川柳雑誌」(昭和23・11)の「編輯室にて」に、(編輯をしてゐたPOEが、八月の末から健康を害してゐるので、本号から梨里が編輯することになった。梨里は編輯に興味を持つてゐるし、昭和ビル時代に数年間勤務してゐたのでうまく纏めてくれると思つてゐるべなかつてやつていただきたい)とある。POEは、一步のこと。不朽洞会員に鳥山一步がいたので、雅号をPOEとした。梨里より四歳下で御健在である。

昭和23年11月号から梨里は編集長となり、

24年2・3月合併号から「川柳塔」(不朽洞会員の投句欄)に投句しているが、編集の仕事に追われ、投句の回数は多い年で年数回程度である。編集実務のほか、当時毎月のように掲載していた座談会の整理をしたりエッセイを書いている。エッセイと梨里が発言者として出席した対談・座談会を記録しておく。

○エッセイ

- ・「夢を夢みる」(昭和24・11)
- ・「詩人の幸福」(昭和25・10)
- ・「弓削町の女性と川柳」(昭和25・11)
- ・「ロミオとジュリエット」(昭和27・6)
- ・「或る日の台所」(昭和27・7)
- ・「ジョンの死」(昭和27・8)
- ・「近頃娘気質」(昭和28・3)
- ・「猫礼讃」(昭和29・7)
- ・「不透明の良さ」(昭和30・1)
- ・「情熱は續く」(昭和32・7)
- ・「入院つれづれ記」(昭和35・11)
- ・「皇后にもなれる世の中」(昭和36・3)

○対談・座談会

- ・「女流作家は語る」蓼乃、若菜、美奈子、定美、梨里(昭和24・7)
- ・「女性ばかりの句評川柳街(上)」、蓼乃、若菜、白香、良子、茶々、梨里(昭和26・5)

・「女性ばかりの句評川柳街(下)」、蓼乃、若菜、白香、良子、茶々、梨里(昭和26・6)

- ・「対談」野介、梨里(昭和27・2)
- ・「座談句を中心に」没食子、春果、竹荘、梅里、梨里(昭和27・4)
- ・「三人は朗か」幽王、妄夢、梨里(昭和28・1)

- ・「犬と猫飼主座談会」豆秋、喜由、瓜平、一瓢、愛論、梨里(昭和28・6)
- ・「川柳に詠まれた歳末風景」豆秋、花村、水客、梨里(昭和28・12)

- ・「競馬を語る川柳人」没食子、文蝶、貴山、清潮、一瓢、梨里(昭和29・1)
- ・「祭日四方山話」白柳子、梨里、丁路、しげお(昭和29・5)

- ・「親娘対談」蓼乃、梨里(昭和31・2)
- ・「潮花を語る」路郎、蓼乃、梨里、良子(昭和31・12)

エッセイの中から「或る日の台所」(昭和27・7)を全文載せておく。

(先日近所の奥さんが遊びに來られて家庭経済の話になった。話のついでに母に衣服の扱い方や燃料の使い方が上手でないと言うと、母は例の調子で「ふんそやそや、く」)と至極愛想のよい返事、傍で句稿の清記をし

ていたPOEが「ボツ／＼お鉢が廻つて来そうやなあ」と言う。私も笑いながら「ほんまや、あんたかてや」と言つてから小母さんの方へ向いて「なんし私処言うたら私姑さんみたいでしよ。今からこんなんやさかいに私みたいなん姑さんになつたらえらいこつちやなあ、言うて何時も言うてるのよ」と言う。母が「心配せんでも、あんたら姑さんになる時分になつたら一緒に住まんでもえ、」と言う。「そやなあ、ほんなら安心やなあ」私達の会話をきいて居られた小母さんがつく／＼感心したように「お宅は結構だんなあ、ほんにお宅の先生が川柳せなあかん言いはりまつけどほんまだんな。お宅らこないして笑つてものが言えまつしやろ。私処ら一寸注意でもしたら物凄いい言いやいして喧嘩だつせ。みんな目の色変えて言いまつしやろ、ほんまにお宅はよろしいなあ」と言われた。此の奥さんが言われるように川柳をしている御蔭かどうかは知らないが或は母やPOEが傑いのか、兎に角眞剣になつて怒らんならんような事は何もない。私が何処か叩き賣りで安い／＼ネクタイを買つて来てPOEにやると「美しい顔でとことんまで値切り（鉄兎）か」「あほらしい。それでも買つて来たげたさかい半分だけお世辞言うてくれんねんな」と言うぐあ

いである夜など火鉢の傍で話をしていると「ガーゼで割に温いねんな、夏梅さん（お灸の先生）がなあガーゼのスボン下穿いてその上にメリヤスのスボン下二枚穿いたら冷えへん言うてはつた。ガーゼで作つたらえ、な」「もの言へば金が要るなりだから寝る幽王」「ほんまやなあ」と言つて笑つたら大抵のものは買わなくても済む。私の家ではこの句が一番活躍している。他所の人にもこんな風に通用したら借金取り来ても樂ですなあ」梨里は昭和23年11月から7年間余り編集長を務めたが、結婚を機に、編集長を辞した。「川柳雑誌」昭和31年5月号の「公・私・雑記」に、〈梨里が結婚するので、三月号からの編集には携わっていなかった。それを早く発表すると、お祝いの心配をかけるので、からだが悪くならないのでと云つて、秘めていたが、潮花君は編集の關係や踊を教えに来たりするので知らさない訳にいかなかった。ところが潮花君がまる秘ですがと云つて婦人友の会の良子さんに洩らしたり、香林君が仲人さんとブツツかったりしてとう／＼不朽洞会の常任理事会の方へ知れたりして、過分のお祝をあらちからいただき感謝の言葉もない次第、去る四月十三日の吉日を卜して芽出度華燭の典を挙げたので、ここにお礼を兼ねて

御報告を申上げる」とある。梨里が編集長を退いた後、3月から漫才作家の不二田一三夫が編集部入りした。結婚後、梨里は「川柳塔」に投句することはほとんどなかった（昭和33年1月号のみ投句）が、葎乃選の婦人投句欄「金泥集」には投句している。また、川柳婦人友の会の大阪地区理事を務めている。



川柳婦人友の会 五周年祝賀句會。
左が葎乃。右が梨里。

「川柳婦人友の会 五周年記念祝賀句會（中島邸）」の記事が「川柳雑誌」昭和34年11月号に掲載されている。一部抄出しておく。

（9月20日（筆者註：日曜）、オゾン句う諏訪の森はここ中島邸で、川柳婦人友の会の五

周年記念祝賀句会が華々しく開催された。

(略)梨里前編集長は令息哲夫ちゃんと共に、すっかりママぶりも板についてこれまたお元気で哲夫ちゃんの二丁拳銃がトテモ可愛い。(略)五年前、先生のお宅で第一回の会を開いたときは十数人だった(筆者註)第一回の会は、昭和31年1月22日。一周年記念川柳大会は、昭和31年8月26日、光明寺で開催されている)が、今や百名を越す大世帯になり、遠くハワイの新聞にまで紹介されたことをよろこび、これまでに育て上げた潮花氏の労を謝し、こんごはこれより盛大にして、潮花氏にもよろこんでいただけるよう皆さんと共に進んで行きたいと阿茶さん筆者註(当時の会長)の類が紅潮する。(ペン・不二田「三夫」)

当日の出席者は、女性には、霞乃・小石・阿茶・奈良子・一栄・メ女・梨里・操子・きさ子・安子など二〇名。男性は、生々庵・文蝶・潮花・香林・光輪・一三夫の六名。梨里は、兼題「海」丸尾潮花選で、(船室は海をみあいた無駄話)で天に入選している。

「川柳雑誌」は、昭和40年9月号で幕を閉じ、10月からは「川柳塔」と名を変えて新たに出発した。霞乃とアートの同人として参加したが、梨里は参加しなかった。

『麻生路郎読本』の「麻生路郎の人と作品」

に、梨里の「父を想う」(「川柳塔」昭和43・7)を収録したのは、梨里の「川柳雑誌」に対する複雑な思いが表れていると思つたからである。最後の部分だけだが、載せておく。

(今思い返してみても永い日々重苦しい私達の青春時代であつた。来る日も、来る日も編集や校正に追われ、友達と約束をして郊外に出たり、映画を見たりなどと云うようなこととは縁の遠い明け暮れであつた。父が死んだ今、既にそれぞれの道を選んで歩んでいる今、いまさら父にうらみつらみを並べようとは思わないが。これ程の犠牲を払つてするべき仕事だつたのだろうか、それ程川柳と云うものは価値のあるものなのだろうか、いや、価値があろうとなかろうとそうせずにはおれなかった父なのだろう。私は今、父の死を悲しむ気持ちとは別に嵐が止んだ後の安堵に似た気持ちをゆつくりと味合うのである)

「川柳塔」(平成12・7)の、西村哲夫「路郎と言う名の幸二郎」に、(縁あつて河内の古寺に嫁いできた母は、作句を止めてしまつたが、若かりし頃川柳雑誌の校正編集を手伝つていたらしく、少しは川柳人路郎を知っているようだ。(略)川柳を作れなくなつたと嘆く母ではあるが、路郎の心が今も生きていると思いたい)とあり、「川柳塔」に参加す

ることはなかった梨里だが、川柳に対する関心がけつて失せてしまつたわけではないことが窺えるのである。

最後に、梨里作品を抄出しておく。

○梨里作品抄

網棚のみかん旅行がしたくなり
公園の空だけ異ふ色に見え
ぶどう籠持てば貧しさ繪の如し
醫者の門閉めて眞晝の陽があたり
華やかな心となれず爪を見る
一人居れば一人の事を考へる
金銀の誘惑夜の灯が淋し
泣いて出た劇場前がまぶし過ぎ
結局は物質などに馬鹿にされ
淋しいと云はず詩集をめくる音
夕やけへ別々なこと思つてた
女なる悲しみおんな酌をする
食べて寝て猫の現実主義もよし
足組んだとだけ女優さんに似て
都会の哀愁階上喫茶もたそがれる
サンドイッチ山の空気と愛人と
ロケ隊の雨雨山の中の宿
チャンバラの捕っ手にうちの子もまじり
モデル住宅低い垣根の家続く
働いて働いて終りしものを悲しめり

昭和15
昭和16
昭和18
同
同
同
昭和23
昭和24
同
同
昭和25
昭和26
昭和28
同
昭和29
昭和32
昭和34
同
同
昭和35



同じ想いで、ぶんぶん(2)

2月号では「同じ想いで、ぶんぶん」と題して、同想の句について述べました。その中で、「同想句の実例については、今後も折をみてこのコーナーで取り上げます」と、約束しています。ちょうど半年になりますので、その間に私がチェックした同想句を紹介します。整理の都合上、2月号の内容をもう一度記します。

① 顔は知っているが咄嗟に名前が出てこない。
② おでんをいっばい作って妻が外出した。
右二つの状況についての例句は、2月号に挙げていますので省略します。今回の例句を添えて箇条書きにします
が、⑧、⑬はスペースの関係上、例句は省きます。

③ ドッコイシヨが癖になつてしまった。

ドッコイシヨかけ声ないと動けない

つい癖になつてしまったドッコイシヨ

④ こころ(拳)を開くと楽になる。

鉄拳の指をほだけば楽になる

げんこつを開けば温い風が吹く

⑤ 長患いをせずコロリと死んでしまいたい。

健康でピンピンコロリ期待する

ピンコロリ願って今日も一万歩

⑥ バイキング形式の料理では損をする。

バイキングもと取るほどは食べられぬ

がんばって食べて腹痛バイキング

⑦ 世間に揉まれて角が取れるのを石に喩えている。

激流に揉まれて石も丸くなり

転がって流れて石は丸くなる。

⑧ 年金の元を取るまでは死ねない。

⑨ 年金が出ない奇数月はつまらない。

⑩ 休肝日は元氣が出ない。

⑪ 休刊日はなんとなく物足りない。

⑫ 待ち時間の割に診察時間が短い。

⑬ 言い返す言葉を後で思いつく。

⑭ 行列を見ると並んでみたくなる。

⑮ 酒のせいでうっかり本音を漏らした。

⑯ もう十年日記などには必要がない。

右の内容のものは、しばしば詠われています。もちろん、このようなことを詠ってはいけないというものではありません。同じような状況を対象としても、切り口を変えれば面白く表現できるかもしれません。しかし、誰もが見たことがある古い素材では、読者のところに響く良い句にはなりにくいものです。思いついた句が、①、⑬までに該当していないかどうかを見直すのに何分もかかりません。「同想句があるか？」と心配になったときには、「面倒がらずに、必ず照らし合わせてください。」

ここに挙げているのは、私がチェックしたことだけです。これを基本として、これから皆さんが歩んで行く道中で「この内容はしばしば目にする」と気がついた句は見過ごし、必ずメモをしてください。そのように、こまめに記録したものは、あなたの貴重な財産になるでしょう。

■各地句会だより

六甲川柳会

「メダカの学校」

五年目を迎えて

山崎 武彦

メダカの学校は二〇〇七年四月に誕生、今年五月勉強会で五十回を数えた。

メダカの学校は、全くの初心者や独学で新聞等に投句されている方々のための勉強会として発足した。少しでも川柳の楽しさ、作る喜びを共に学び、自由な雰囲気でも語り合える場の提供こそが本来の目的である。

会場は六甲道勤労市民センターで、JR六甲道駅に隣接して極めて交通の便に恵まれた所である。勉強会は兼題三つと自由吟でスタッフの方が選句、披露をされる。選句の間、スタッフの一人が川柳のイロハから講義をされるのが嬉しい。

メダカにとって入選する喜びもあるが、没句について選者が、どうして没句になったかを懇切丁寧にコメントされ、添削句を示し、

後日添削通信として一人一人に郵送されてくることである。この添削通信こそがメダカには生きた教材であり、血となり肉となつていくのである。

開校当初はスタッフを含めて三十名程度であったが、会を重ねる毎に仲間が増え続け、第50回勉強会ではメダカ四十二名、スタッフ、応援して下さる先生方を含め総勢五十名という盛況であり、発足当初を知る者からみれば



H23.2.24 六甲川柳会吟行（日生町頭島）

誠に感慨深い気持である。現在川柳塔同人五名、誌友十一名にのほつている。

メダカの学校を更に発展させるため、メダカの仲間が自分達で新しい企画を立案し、着実に実行し続ける努力をしている。その一つが毎年春に行う「川柳作品展」である。この作品展には神戸新聞社の後援を得て、チラシ、案内状などの印刷物には同社の後援事業と明記することが許可されたのである。

作品展は勤労市民センター中央ロビーで開催、三十九名の参加で短冊、色紙は百四十点を数え壮観であった。

第二は仲間の和を拡げるため吟行を行っていることである。仲間のつてにより備前日生の頭島の民宿「ひろえ」で牡蠣づくしの海鮮料理を満喫できたのである。吟行の兼題は一題でスタッフの互選である。入選句の天地人には「ひろえ」様から備前焼の賞品が贈られ受賞者ともども感謝している次第である。

メダカにはそれぞれの人生や生き方がある中で、川柳という共通の趣味に老若男女が自由に楽しく集い、語り合うこの素晴らしい感動をあらためてかみ締めている。この気持をいつまでも持ち続け、五七五のリズムを刻んでいきたいと願っている。

本社七月句会

七月七日(木) 午後五時
アウイーナ大坂

日本列島に梅雨明け宣言が北上し、本格的な夏に突入した七日、七月句会(路郎忠)が他柳社からの多くのお客様を含む124名(投句8名)の参加で開催された。句会に先立ち、先日亡くなられた同人、清水利武さんへ黙祷を捧げた。初参加は西宮市の泉水芽子さん。今月のお話は中原比呂志さん。「法隆寺や聖徳太子に纏わる様々なエピソードや、法隆寺を訪れた俳人や歌人の作品を交えながら、法隆寺の魅力をたっぷり紹介された。作品の一部を紹介する。

○日の照りて桜静けき法隆寺
思えば遠き旅にありにき

○風鐸に風のある日の法隆寺

○かしこしや玉虫厨子の前にたち

○行く春やはのはの残る浄土の図(秋桜子
時間があればもっと多く聞けたのに残念。

(いさお記)

(司会)美籠・善純(脇取り)真理子・恵子
(受付)扶美代・美花(清記)勝弘)

席題 「押す」 坊農 柳弘選

どうしてもと言われOKした私
押し寿司にしたい男がひとり居る
押し加減母手作りの鯖の寿司
つば押しさえ妻の機嫌をとっている
押しくらまんじゅうみんな子供の顔になる
押し切つてみたが心に残る悔い
ふる里のどこを押しても父母の影
押し問答水面下では手を結ぶ
捨て切れず押絵に残す夏の恋
追い風に誘われやつと動き出す
実印に力を込めて念を押す
はじめの推薦受けてサクラ役
内輪揉め外に洩らさぬブッシュホン
インターホン鳴っているけど出ぬ素顔
追い風に乗り恋の風船が飛ぶ
車椅子押してわかった人の情
太鼓判押した神話が崩れ去り
津波のことで神様に念を押す
逆境へやさしく母が背を押す
押し花のいちまいずつにあるドラマ
ひと押しが足りずマドンナ他人の妻
押し花が鎮座している父の辞書
背中押す無口の両手熱くなる
本物た落款よこを向いている

美花 朝子 シマ子 蕉子 紀乃 正明 たもつ 正明 俣子 寿之 新一 敏治 美籠 賢子 瑠美子 隆彦 まつお 恵美子 賢子 朱夏 いさお 久千代 寿子 たもつ

長男の理詰めに負けたうまい酒
駄目を押したあの日を少し悔いている
続くもの信じて意地を押し通す
過去を消すワープロキーをグッと押す
離婚印押して女は花になる
核ボタン押すぞとおどす国がある
逆さまに判押してある挑戦状
スイッチボチ今日が始まる全自動

佳

深夜ベルどなたですかと妻の声
夕焼けを押すと母が現れる
寂聴の風押しに來た瓦礫山
沙羅双樹夏の扉を押しあける
押されてるうちは毘とは気づかない

人

みちのくの波押し返すいわし舟

地

卒業はところ天でも職がない

天

余り日の熊の古道を風が押す

軸

追い風に乘つて一気に駆け抜ける

兼題 「半額」

上野多恵子選

ヒョウ柄の服半値ですと吠えまくる
半額になつても原発は要らぬ

新吉 一風 楓 玄也 希久子 俣子 一步 扶美代 弥生 浩子 集一 哲夫 日の出 哲夫 遠野 富美子

半額の夏本番へ手が伸びる
 半額の鯛が半身で訴える
 半額になっても要らぬピカソの絵
 半額にしたら私を買いますか
 赤札を半額にする大阪弁
 半額の顔が高座でよく売れる
 半額のカラオケ妻が帰らない
 真つ当な移きで半額品を買う
 半額のデイナーどなたを誘おうか
 半額の切符が買える手帳持つ
 半額で買った我が家は崖の上
 肥料不足紫陽花五割程度咲く
 金が必要半値で売った牛に託び
 その話半額にして聞いておく
 半額になるまで待てぬしサイズ
 半額のパンブス街を闊歩する
 マネキンの笑顔が歪む半値札
 半額のプラスマイナス天秤に
 半額の値札せなかに達成感
 半額に弱い黄色の財布持つ
 保険金半額になるやるせなさ
 半額のシールの下を確かめる
 折半と古い言葉で責める価値
 半額のおひとりさまに棲む魔物
 半額にバツとひらめく妻の脳
 残り半額真摯に生きていくつもり

寿子 隆彦 完司 寿之 紀雄 哲夫 明子 眞理子 節子 新一 昌紀 宏子 一風 弘風 朱夏 いわゑ 柳弘 能子 滋彦 蕉子 富美子 美津江 ばつは 浩子 公誠 ルイ子

熟年の恋半額の映画観る
 半額の刺身と発泡酒がうまい
 半額の時間を知っている紳士
 半額と胸のあたりに貼っておく
 佳
 愛一つ下さい半額でない愛を
 半額に五欲葬めく蟻の列
 半額のツアーは片道だけだった
 半額のシールを僕が僕に貼る
 ブラームスを聴く半額の喫茶店
 人
 雨降って半額にする天の川
 地
 半額のバラでもバラは美しい
 天
 半額の桃の傷から梅雨上がる
 軸
 半額で日本列島いかがです
 兼題 「拗ねる」 川端 一步選
 拗ねている理由わからぬ反抗期
 時どきは拗ねて夫を確かめる
 梅雨時の干し物拗ねたよに乾き
 探り入れてみたいワインが拗ねている
 達観か拗ねているのか藁
 思い切り地球が拗ねた大津波

耕治 新一 蘭幸 惠美子 柳弘 寿之 保州 眞理子 節子 惠美子 能子 朱夏 哲男 千里 淑子 寿子 たもつ ルイ子

お迎えが来たら一度は拗ねてみる
 拗ねている姿可愛い三歳児
 拗ねてみたが帰りの出口見失う
 気づくまで隅で座っている無口
 拗ねている男に正露丸飲ます
 聞かなくても母は知ってる拗ねる訳
 鬼一匹が拗ねる男をみて嗤う
 とりあえず拗ねて空気を読んでみる
 世を拗ねて年金だけはありがたく
 独酌でテレビ相手に拗ねている
 スイーツの土産を拗ねる血糖値
 中国へ贈くとアメリカ力が拗ねる
 美しいひとは拗ねてもうつくしい
 世を拗ねて吉野に住んだ西行師
 拗ねてると鏡にだけは見抜かれる
 拗ねた人の意見やさしく聞いてはる
 婿殿が子供より先拗ねている
 与野党が互いに拗ねて世が踊る
 隅っこが好きで拗ねる理由じゃない
 腑に落ちぬ今日の人事にひとり酒
 丸虫のかたちで拗ねる今日の僕
 久し振に女房が拗ねて若返る
 輪を乱す毒舌拗ねたのがひとり
 イエスマンたまには拗ねてみてやろか
 左膝庇うと右が拗ねてくる
 美しく拗ねて独りを食べている

則彦 いわゑ 希久子 郁夫 義 たもつ 唯教 楓楽 眞理子 紀雄 美津江 完司 朝子 公誠 善純 美花 宏子 黒兎 まつお 茂 昌紀 見清 浩子 勝弘 光久 惠美子

住

ジャンケンの鬼はとっても拗ね上手
歳時記がずれる地球が拗ねている
挫折にも拗ねたりしない団子鼻
一本の向日葵だけでそっぽ向く
原発が拗ねて世界の震度十

人

断層が拗ねて地球を困らせる

地

拗ねている背中に答え書いてある

天

にぎやかに拗ねる七夕さまは雨

軸

拗ねている僕を鏡が笑つて

兼題

「ビタミン」

古今堂蕉子選

最高のビタミン被災者の笑顔
十五穀混ぜてビタミン補給する
人間復活ドリンク剤を一気飲み
物忘れ多くビタミン振り掛ける
お喋りは即効性のビタミン剤
老いの目にビタミン剤の水着美女
四世代ビタミン剤のような孫
ビタミンで埋まらぬ情緒不安定
ビタミンC黄色いピアスつけている
ビタミンの名でないらしいAKB

善純 堅坊 新一 寿之 富美子 弘風 りこ 宏子 真理子 保州 弥生 富美子 光久 寿之 直樹 唯教 寿子 惠美子

ビタミンより友の言葉がよく効いた

遠い日の肝油ビタミンAとD

腹痛も風邪引きも飲むアリナミン

ビタミンを補給しにいくコンサート

コラーゲンもビタミンCも飲んだ顔

ビタミンが通販サプリに追い出され

ゴキブリはビタミンなんか要りません

ビタミンに愛があるのは日本だけ

猫までがビタミン剤を飲まされる

覇氣がない君はビタミン欠乏症

ビタミンEヨガのポーズが決つて

図書館へ脳のビタミン足しに行く

旅カバンビタミン剤とパスポート

恋はビタミン私のこころ弾ませる

オロナミン飲んでマージャン勝ちました

ストレスとビタミン混ぜて飲んでます

遠い日の脚氣治した夏みかん

スニーカー青葉若葉をビタミンに

ビタミンが不足してきた前頭葉

ビタミンが効いて水たまりが飛べた

ビタミンは足り過ぎてますベジタリアン

ビタミンが切れてもしばらくは動く

佳

気休めと言つてビタミン剤くれる

ビタミンに欲しい味覚と満腹感

倦怠期ビタミン愛が足りませぬ

好

図書館へ脳のビタミン足しに行く

旅カバンビタミン剤とパスポート

恋はビタミン私のこころ弾ませる

オロナミン飲んでマージャン勝ちました

ストレスとビタミン混ぜて飲んでます

遠い日の脚氣治した夏みかん

みつ子

正雄

朋月

真理子

耕治

忠昭

紀雄

黒兎

日の出

光久

美花

好

舞夢

光久

則彦

郁夫

冴子

いわゑ

まつお

瑠美子

淳司

蘭幸

佳

ダン吉

弘光

啓明子

好

その裏を読むには少し若過ぎる

裏ばかり読む癖がつき目が失る

調子良い話ついつい裏を読む

裏から来て裏から帰る隣組

駅裏の路地はわたしのけもの道

少年は透明裏のない一途

居酒屋で明日のビタミン補給する

ビタミン剤枯れた恋にも火をつける

ビタミンのような笑顔をひとつくれ

美しく化するビタミン剤を撰る

地

天

ビタミンをたつぷり撰つているお顔

軸

梅雨時のシヨパン私のビタミンE

兼題 「裏」

住田英比古選

その裏を読むには少し若過ぎる

裏ばかり読む癖がつき目が失る

調子良い話ついつい裏を読む

裏から来て裏から帰る隣組

駅裏の路地はわたしのけもの道

少年は透明裏のない一途

人間の裏を覗かぬ眼がきれ

向日葵の裏の貌にもある主張

官房長知りつくしてる裏の裏

梅雨明けを待ち兼ねている足の裏

裏技を持つているから自然体

酒の席紳士の裏を垣間見る

裏をかく技を覚えて生き上手

マスコミの世論調査に裏がある

まつお

滋彦

耕治

惠美子

月子

准一

雅明

みつ子

弥生

わこ

寿子

勝弘

完司

新一

みつ子

集一

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

和夫

裏の裏読んで眠れぬ日がつつく
 本当の生活知ってる足の裏
 屋根裏と言えばアンネを思い出す
 駅裏のあそこでお待ちしています
 酔うとすぐ出るのは同じ裏話
 裏ばなしになると盃盛り上がる
 もう時効だからと喋る裏話
 ふつきれぬ悔いに枕を裏返す
 座つても立つても君が目裏に
 舞台裏を覗きその後の失語症
 君となら裏道を行く逃避行
 苦勞人でまず裏方に氣を使う
 裏の裏読んでしまつてからの鬱
 足の裏から女ひとりのものごと
 裏口はいつもきれいにしています
 幸せが転がつていた裏の道
 人の匂い嗅ぎに行きます裏通り
 謙遜の裏から自慢透けて見え

佳

人

月子 遠野 靖博 多恵子 昌紀 玄也 好 多恵子 正明 正明 節子 昌紀 惠美子 月子 ルイ子 堅坊 時雄 楓楽 桜竜 正雄 惠美子 理恵

地 路地裏に僕の昭和が未だ残る
 天 足の裏に一度もお礼言つてない
 軸 裏窓から見る下町の生活譜
 兼題 「炎 天」 小島 蘭幸選
 炎天も苦になりません句会の日
 避難所の屋根容赦なく灼く日差し
 炎天からやつと帰れば節電中
 青シャツへ塩漬き出してきた炎暑
 あきらめてまた歩き出す炎天下
 敬礼したい炎天に立つガードマン
 炎天へ海も開けぬ瓦礫片
 炎天でないが地下街風がない
 被災地のひまわり炎天と対話
 向日葵にお辞儀をさせている炎暑
 電柱の幅で避暑する炎天下
 炎天下元氣すぎて心配だ
 炎天に暑中見舞も暑苦し
 炎天へ出て行く喪服出している
 炎天に晒す私も梅干し
 地下街を出て炎天に立ち向う
 炎天に節電 これは難問だ
 炎天に向つてひまわりの笑顔
 八月の炎天母とわたくし泣きました

弘風 日の出 勝弘 淳司 まつお 呀子 希久子 宏子 賢子 求芽 英比古 玄也 郁夫 理恵 滋彦 哲男 美津江 見清 修 満作 ばっは

炎天の仏花造花にしたいほど
 炎天から降ってくるのは放射能
 炎天下も姿勢崩さぬ語り部よ
 炎天にも豪雨にも遭う七曲がり
 アスファルトぐにぐにや私消えそうだ
 炎天下本氣になれるものがない
 炎天の名水旅がまた弾む
 太陽を味方に天へ物申す
 炎天に晒す蚯蚓に似た生命
 炎天に脳が逆立ちしてしまふ
 炎天に西も東も祈りの忌
 炎天と仲よくなつたボランティア
 ごろ寝ごよし責が流行る夏の怪

佳

人

地

天

軸

(宣) 宣子 英比古 保州 楓楽 月子 惠美子 弥生 惠美子 克己 一歩 弥生 義子 朱夏 真理子 いわゑ 正明 保州 朱夏 完司 加藤 俊宣

二賞選考規定（要約）

① 路郎賞 川柳塔欄の入選句から5句

川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から5句

昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月10日必着で本社宛郵送する。

② 第一次選は主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長・選考委員で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。

③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席（5点）、第二席（4点）、第三席（3点）、第四席（2点）、第五席（1点）の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。

④ 第二次選者

本社関係 主幹・理事長

地方関係 主幹・理事長

北海道・東北 関東 北陸（2）

【京都・奈良（1）】大阪（6）兵庫（3）

【和歌山（2）】鳥取（4）島根（3）

【岡山・広島・山口（2）】四国・九州（2）

計25名

地方関係の選者は、適宜交代制をとり、均衡をはかることにする。

⑤ 川柳塔欄・水煙抄欄に6ヵ月以上出句した人に応募資格を認める。

川柳塔社各賞選考規定

① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬抄賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年10月に表彰する。

② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。

③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を授賞しない。

④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には授賞しない。

⑤ 路郎賞・川柳塔賞の選者は、その任期中は路郎賞の対象としない。また、愛染帖・檸檬抄欄の選者も、路郎賞の対象としない。

⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、別途に定める。

⑦ 愛染帖賞は選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。

⑧ 檸檬賞は二名の選者がそれぞれ5句ずつ選出した10句の中から主幹が決定するものとする。

⑨ 一路賞・各地柳壇賞は、常任理事会の委嘱を受けた選者が受賞句を決定し、主幹の承認を得るものとする。

（備考）

この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成十八年度から実施するものとする。

平成二十三年度二賞選考委員

第一次選者（七名）

小島 蘭幸・西出 楓楽・川上 大輪・新家 完司
河内 月子・村上 玄也・木本 朱夏

第二次選者（二十七名）

本社関係（二名）小島 蘭幸・西出 楓楽

地方関係（二十五名）（一）内は人数 ブロック内五十音順

【北海道・東北 関東 北陸ブロック（2）】

高瀬霜石・早川 遡行

【京都・奈良ブロック（1）】居谷真理子

【大阪ブロック（6）】

江見 見清・籠島 恵子・宮崎シマ子・吉岡 修

米澤 俣子・山本 蛙城

【兵庫ブロック（3）】

奥田みつ子・長浜 美籠・古川 奮水

【和歌山ブロック（2）】田中 みね・玉置 当代

【鳥取ブロック（4）】

白根 ふみ・野口 節子・春木圭一郎・福西 茶子

【島根ブロック（3）】

伊藤 玲子・三島 淞丘・原 章峰

【岡山・広島・山口ブロック（2）】

岩本 笑子・福原 悦子

【四国・九州（2）】黒田 茂代・仁部 四郎

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を
選択して応募してください。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳
塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、
間違いないようにお願いします。

平成二十三年度各賞選者

愛染帖賞 新家 完司

檸檬賞 三宅 保州 山本希久子

一路賞 小西 雄々 松原 寿子

各地柳壇賞 太田 昭 政岡未延子

お世神壇

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
編集部

岸和田川柳会(大阪) 仲谷 弘子報

手間かけず舌をうならす母の味
手間かけて育てた愛が風化する
四十歳過ぎてても手間のかかる子で
手間取っていては出来ない大津波
手間賃に惚れて原発アルバイト
手間かけて作った花にほやかれる
女性持つ物見よ手間がこんなにも
ボランティアの精神被災地に生きる
心頭を滅却したが腹は減る
精神の病も癒えぬ避難民
幸不幸次第で決まるもの
曲げません尽す幸福知る私
部長にはやらやら機械取る課長
ちゃらちゃらと歩けば男付いくる
ちゃらちゃらとちよつと気兼ねな義援金
厄払い小銭ちゃらちゃら寺めぐり
ちゃらちゃらと十七歳の反抗期
顔ぶれが揃うと空気が変わる
近頃は入学式も川の字で
避難所の絆揃って明日を向く

善 純 富 子 富 子 隆 昭 笑 司 珠 子 蛙 城 いさお 洋 俊 昭 淳 風 千 鶴 忠 也 玄 太 昭 弘 子 房 枝 信 子 植 代 清

ともだちの靴も揃える小さい手
不揃いの美学戸棚の皿小鉢
神の田楽揃う早乙女
百均で整いました新所帯
卓袱台に家族揃った昭和の日
百の息一つになつているタクト
何もかも揃って味の無い男
歩調揃うやつぱり僕は似合わない
逢いに行くネクタイピンが弾んでる
ネクタイで古本縛る定年後
ネクタイという束縛が外せない

竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

へソクリが近頃でさぬ暮し向き
へそくりで妻への感謝指輪買う
いつの日かでつかい夢をへそくりで
へそくりも貯金もなしで元気で
がらくたの整理論がひよつこりと
作戦はまずへそくりを貯めてから
へそくりが尽きたか家にずつという
へそくりの尻尾がのぞく額の裏
昼の月これまで独りこれから
果報は寝て待て昼寝でもしようか
雑用はとめ一人の昼を駆け廻る
昼食は畑でうまいにぎり飯
学が気になればみんなが手本だよ
爺ちゃんも小学英語学ぼうか
人生論五七五からよく学ぶ
いつの世も学ぶ道あり法話聞く
喜寿卒寿いつでも学ぶことがある
学の字が一生涯ついて離れない

朝 子 理 恵 義 泰 香 代 和 美 仁 緑 丹 吉 ひろ子 幸 子 あきこ 笹 舟 弘 子 汎 美 千 代 栄 恵 比 呂 子 蘭 幸 輝 恵 静 風 慶 子 慶 子 房 子 泰 子 半 徳 節 生 規 代 笑 子 一 路

和歌山三幸川柳会 武本 碧報

晩学の攻めの一步をふと迷う
天と地の恵み試練を学び合う
学歴はとつくに消えたシャボン玉
笑ったと思えば泣いて元気で
道端に小さな幸せクローパー
何も彼も失した生の声を聞く
九ちゃんの歌が救っている日本
若さとはいいいなボキボキ指が鳴る
そろそろと終い仕度の鐘が鳴る
わに口を鳴らす強さで解る欲
風鈴が鳴る仕舞い忘れただけのこと
鳴り物入りの耳と枕を共にする
警鐘を鳴らして通じない相手
音までも鳴つていそうな万華鏡
喉自慢聞かせどころで鐘一つ
踏んばれよ鳴り物入りに負けぬよう
備前の楽器奏でるよい音色
日の丸の弁当格差ない時代
自分史へ腰弁当がぶら下がる
塩むすび遠い海鳴り聴いている
うれしいね弁当箱が空つぽだ
幸せなりズムをくれるお弁当
弁当に妻は怒りや愛を織る
親のエゴ詰め込んだお弁当
弁当屋春の天気は神頼み
人生が凝縮された顔の皺
玄関にその家の主婦の顔がある
世界中から善意の顔が駆けつける
正座した真顔に嘘を引っ込める

敬 子 淑 子 力 史 子 千 枝 厚 子 栄 香 智 三 武 雄 元 三 か ず 子 み ね 准 一 喜 久 子 順 一 房 代 碧 絹 子 朱 夏 イ セ 登 美 代 孝 子 正 美 か ず み 義 雄 俣 子 純 子 東 吉

ライバルの笑顔が持っている野心
はろほろと顔のメッキが剥けてくる
本当の顔は仮面の下にある

モノリザものつべらぼうになる夜更け
叩かれて意地見せてくる釘の顔
かあちゃんはスッピンがいい寛げる

アトですピカソもうなる福笑い
輝いているのは春のニューフェース
縦のものの横にもでかす損ばかり

カラスにも性格わかるゴミ袋
怒っている我慢しくなくていいんだよ
人柄へ流れていった花筏

諸行無常あなたを置いて死ねません
川柳塔打吹(鳥取)

父上様は風に匂いと四季をいく
父さんは働き者で強かった
悩みます両手に花の夢の中

お土産をあこれ悩むパス旅行
ひとさまの悩みに悩むことはない
悩みごと聞いても打開出来かねる

七十年未だ判らぬ道がある
禿頭叩き撫でたが生えてこぬ
仏壇の前で悩みを経に替え

悩んでも悩まなくても朝はくる
悩むだけ悩んで強いねじれ松
悩んでる人がひきずる長い影

還暦の話題の一つボランテア
奉仕後何も求めぬ爽やかさ
鮎一個奉仕の礼へ差し上げる

菜摘 八重子 当代 町子 章子 昇 夢子 次根 和子 起世子 富子 幹子 保州

野口 節子報

美ツ千 久芽代 清 善江 玲坊 泰輔 道子 紀美恵 義人 螢 照彦 芳光 陽之助 恭子 みち子

寄り添って話を聴くも奉仕かな
撒き餌して雑魚に奉仕をする私
結婚は奉仕そのもの老いてなお

得をした気分になさる奉仕品
奉仕品買いいだめしたら腐らした
役に立つこともあるから生きられる

知らぬ間に奉仕を受ける側にいる
奉仕する人金品を盗む奴
どぶ浚い何時も用事の有るおひと

荷造りは男結びでギユツと締め
足腰を鍛えて荷にはならぬこと
荷が果立ちやつとは肩の荷がおりた

荷が重いがそうなる車追いこそぬ
引越しの荷物の中に居る夫
荷が重い軽いと言わぬ霊柩車

肩の荷を下ろした時は天の風
お荷物は打出の小槌だけでええ
重い荷だ六十五キロ我が身体

青空がひよいと荷物を軽くする
川柳塔おつばひ吟社香川 川崎ひかり報

時折りに見せる笑顔に敵がない
若者の重荷とならぬ意地で生き
重き荷を夫婦分けあい五十年

父ちゃんは重荷背負って四苦八苦
大津波思わぬ荷物置いてゆく
娘の荷物軽くなるよう祈る両親

小さな荷故と風味の母心
この辺で荷を降ろしたい喜寿の坂
何一つ荷物を持たず避難する

貴恵 重忠 和子 龍枝 悦子 公恵 富恵 節子 紀の治 楨元 美知江 三津子 勝憲 石花菜 完司 くにこ はつ恵 賢 ひかり あきら 八重子 よしみ 弘 いさむ 放任

佳句地十選 (7月号から)

清 川 玲 子

良く見える無職になったその日から
ピサの斜塔支えるようにポーズとる
テレバシーください窓は開けておく

ありったけの愛を被災地に注ぐ
生きんかな一粒の種風に乗る
さわやかに振られましたと言える歳

生かされた命の意味を問う夜明け
夢も大志も野心も横に日向ぼ
指の先向きを変えれば灯がとる

曲がってるだけできゅうりは間引かれる
誠一 弘之 久仁雄 一 眸 忠 あり 寿美 文子 節夫

川柳ふうもん吟社(鳥取) 夏目 一穂報

因習に愛の絆をカットされ
喧嘩せぬ様に残高ゼロで近く
廃校の守衛になった金次郎

拉致の子を持つ老父母へ時間切れ
それぞれの子で家族が帰宅する
終章へ煩惱ひととずつカット

残高の黒字が繋ぐ夫婦仲
バイキングこぼる程取る欲の皮
去勢した豚は肥育のために生き

流れ星も老父の命も時間切れ
幸せなひとときすぐに時間切れ
酒吞まにやええ人ですがこぼるです

時間切れおかまいなしにまだしゃべる
美雪 善夫 圭一郎 とも湖 大 鯉 回春子 無限 一 京 昌鼓 義徳 洋々

こばるならなくしてしまえ原子力
時間切れ素足で走るシンデレラ
贈答の予算カットへ包装紙
脳味噌の残高なくて認知症

頼りない男に鈴を付けておく

妻の留守へそくり残を数えてる

給料はカット最後はリストラか

披露宴こばる祝辞で引き締まる

東電の辞書から消えた時間切れ

神様は余命残高教えない

デートする二人に時間切れは無い

君の過去何があっても気にしない

さまざまな色に誘惑される白

時間切れになった一句が秀句です

平凡に時間切れても生きたる影

駆け込んで拜んでみたが時間切れ

タイムサービス時間切れですまた今度

妻怒る残高ゼロだどうしよう

神仏にカットされないよう願う

マニフェストあれもこれもが時間切れ

残高を数えるくらゐ夢のゆめ

ガキ大将こばるが未来賭けている

わかあゆ川柳会島根 松本はるみ報

風を追い風に追われて旅に出る

とおいい日に遊んだ友はセピア色

うとうとと夢に亡夫を見たような

同姓の間違い電話よくかかる

ママの掌が客を上手に踊らせる

踏んばったつもりよろよろしてならぬ

ドラマにもならぬ一生風が吹く

隆浩 振作 地佳平 雅女

孝男 凱毅

孝二 柳

金祥

春名

清信

稔

美恵子

茂登子

悦郎

蟹郎

喜子

弘康

菊香

清帆

妻

梓

一

梓

好栄

恵美子

英子

伸子

ちよえ

かつ子

はるみ

びつたりの言葉は爺やに出てこない
びつたりと合傘またとない縁

博利 清泉

高知川柳社 小川てるみ報

日本の宝庫原発に汚染され

六十年の愛が詰った宝箱

親達の過保護が駄目になった宝

本性がきつと出てくる宝島

代々の果宝守っている暖簾

軸一本家の宝と渡される

究極の宝家族の笑い声

私には宝と思う母がいる

川柳塔唐津佐賀 仁部 四郎報

天国をちよつと覗いてみた全麻

伊達殿よ御覧か大地震青葉城

頬張ってやりたいけれど女の身

お互いに耳の遠さを語り合い

四五日の留守に庭木のその新芽

定年日近所大学入學日

川柳塔みちのく青森 小寺 花峯報

夫婦杉恋に恋して天をつく

風切った過去を知ってる万歩計

沢あながぶんぶん臭う過疎のバス

死ぬことも恐れぬ愛が燃えた夏

一本の百合部屋の香を一人じめ

筋書どおり老いに合わせる万歩計

結婚を競うごとくに子が巣立ち

リハビリの苦い記憶や万歩計

万歩計きつといらぬカタツムリ

京子 千鳥 正躬 暖 哲史 ふき 健 てるみ

蜂朗 輝夫 高明 勝視 四郎

信子 一湖 つとむ きよし 初枝 吞舟 柳子 洋子 ひとし

ゆつくりと余生は競うこともない
好きだからあなたの膝で半世紀
レコードの溝で音符が競い合い
万歩計つけると元氣出る歩幅

災害のまことと元氣出る歩幅

ぶんぶんと堆肥が匂う土耕し

満開へ今日足向く万歩計

落ちこぼれた僕を見ている蟹の穴

北風に負けない風を子と揚げる

熱愛の発覚派手な週刊誌

人妻をはめると妻が角を出す

熱愛を演じ続けて舞う虫

川柳くらだの会鳥取 岸本 宏章報

雨の日もあつて休める畑仕事

民主党ぞろぞろいるが顔みえず

ナースコール押せば笑顔が飛んでくる

本気だが気まぐれですと言分けす

ぞろぞろと造幣局の通り抜け

キツネたち虹のアーチでお嫁入り

きまぐれな空洗った物をもてあそぶ

意識する人が子分引き連れ空威張り

ぞろぞろと子分引き連れ空威張り

待つ人が居て門灯があなたたかい

ぞろぞろともぐら家族が畑荒らす

季節感野菜売場が狂わせる

川柳塔きやらばく(鳥取) 大塚 恵子報

勿体をつけて開かぬ八重牡丹

原子力人の力で御しきれぬ

温もりのあの場所亡父に逢いたいな

美鈴 芳生 則彦 花匠 愁女 井蛙 黙人 岳水 慕情 一花

美鈴 芳生 則彦 花匠 愁女 井蛙 黙人 岳水 慕情 一花

ふさふ 花匠 愁女 井蛙 黙人 岳水 慕情 一花

花匠 愁女 井蛙 黙人 岳水 慕情 一花

愁女 井蛙 黙人 岳水 慕情 一花

井蛙 黙人 岳水 慕情 一花

黙人 岳水 慕情 一花

岳水 慕情 一花

慕情 一花

一花

富貴子 都 紀子 大鯨 玲子 孝子 清

邦昭 せつ子 寿賀子 宏章

恵子報

晴子 千代 麗

千代 麗

麗

麗

麗

麗

麗

麗

麗

麗

麗

麗

麗

麗

麗

さがし物窮した時はお茶にする
晴れた晩歌手に手向けの荷が届く
原発は止めるべきだと神の声
死神はアボなし急ぐ身辺整理
北の海知らぬ存ぜぬ言わせない
押しよせるみどりに負けず立ち上る
焦点の合わぬ会話にテーピング
小面が何気なくして福々し
懐にリッチな話入れておく
人様の福は輝いてきれい

川柳ささやま兵庫

遠山 可住報

道草をしながら渡り今がある
世渡りの厳しきシャッター下りたまま
忠に孝昔の人は偉かった
太平記歴史のロマン光明寺
年金があつて平和な老い二人
世界史に原発事故が影落とす
平穏な日々を夢みるかたつむり
木々みどり平和は青い空の中
年金は三途の川の渡り賃
撮り直しいやな予感のレントゲン
政権を渡せ渡さん日が暮れる
夢を見て渡り歩いて傘寿すぎ
戦争と震災歴史の頂点に
人類は平和が有れば欲も出す
年一度レントゲンから肩たたき

川柳塔まつえ吟社(鳥根) 相見 柳歩報

七十二年結婚指輪共に生き
勝つためと出した指輪がいま惜しい

恵子 瑞枝 蘭 寿々子 鶴子 ゆき 春枝 ふみ 喜周 未延子

長吉 政子

指輪ひとつこころも心が弾むもの
モナリザに指輪をそつと嵌めてみる
もう抜けぬ指のリングにある絆
不機嫌でスルリと抜けたエンゲージ
指貫とミシンは大切な宝
ベアリング日本男児の白い指
単純な言葉で攻めてくる手紙
純粋な泡が転がす喉仏
純だったあの日別れた夏の駅
こおつてで電話している純な人
ブタバコの中でようやく目が覚めた
覚めないで郷ひろみとの夢デート
すぐ冷める趣味川柳に辿り着く
冷めた仲猫を間においてみる
覚めてみりや吐いた言葉が舌足らず
災害が起こつて神話から覚める
酔いざめの水だとさわぐ飲んだくれ
アビールは一番前が指定席
赤ちゃんのアビール時々泣いてみせ
出しやばらず主役に添うてカスミ草
もつとアビール婚活の葱坊主
シユブレヒコール真つ赤な薔薇がよく似合う
昼間からカーテン閉めてどうしたの
遮光カーテン締めて私の基地とする
カーテンの端つこ持って揺らしている
カーテンを閉めて淋しくしてあげる
カーテンもわたしも古くなりました
カーテンの裏で可愛い声がする

南大阪川柳会

吉川 寿美報

酒止めと俺をいじめる血糖値

弘風

禮子 涼子 浜丘 幸子 ミツコ ちかし 久枝 芳恵 知恵子 ゆき 茂美 寿代 昌枝 左余 孝流 とも子 千里 幸代 博子 芳山 草庵 美智子 柳歩 畔 桂子 叮紅

守るべき親がいじめをする世相
なにもかもいじめと思う更年期
東北をいじめまわした震度九
我が書斎タワーを築く積ん読書
タワー・マンション地震におびえ住み替える
五重塔は歴史をくぐり抜け
女人高野匠の技を仰ぐ塔
無関心を装うて聞き耳をたて
装うた言葉ここに届かない
善人の仮面脱げない肩のこり
無関心装いじつと聞いている
紫外線怖い怖いと厚化粧
月下美人ひと夜の愛を装うて
装うた鎧を脱がす酒の席
衣更え古いルールを脱ぎ捨てる
見栄張つて装う心嘘つばい
震災地まるで戦後の焼け野原
看板とまるで異なる美人の湯
カレー汁母の味だと被災の子
縫うた跡名医に会えたメモリアル
原発は人災だから憎まれる
三業を積んで人生いろは坂
連敗のトラが求めるトラの巻
青い海とねばり強さがある限り
膝折れに陛下にぐつと目が潤む
傍目にはまるで他人の夫婦仲
五重の塔ビル乱立で貧弱に
目標のタワーが明日へ歩かせる
経済のパワーに比例塔伸びる
まるで地獄地震津波に放射能
優勝旗握つてまるで夢心地

弘子 柳伸 太郎 正春 なきさ 直子 寿美 柳一 集一 昌紀 和雄 柳弘 克己 栄己 更紗 一步 弘泰 勝弘 志華子 忠昭 たもつ 直樹 ひさ乃 萬的 紀乃 東吉 庸子 庸佑

ローズ川柳会(兵庫)

木村貴代子報

共有は出来ぬが分かち合う痛み
山育ち料亭よりは畔小昼
日本中痛いと呻く原発事故
とどこにに優しい椅子が置いてある年
旅に行く話で二・三若返る
労いの言葉が光り優しい目
痛目にあつて天狗の目が醒める

富柳会(大阪)

古田 千華報

ささやかれた恋に火が点る
むし焼きの答えに残る火の匂い
先輩を立ててクールな影法師
その先が見えて苦労が一つ増え
ピンチユーズの先が火になる蹴られそう
愛ふわりつかみどころのない絆
次の風見逃すまいと鯉幟
句の味匂にいたたく分岐点
足して二で割って好かれて共白髪
参謀がボスに耳打ちした秘策
失敗はボタン一つを掛け違う
雨の音拾って綴る愛の詩
考える葦に渦巻く躁と鬱
この指に止まってくれたのはあなた
指先の向こうに揺れる橋がある
泣き笑いいっぱい詰まる黄楊の櫛
氷上でピス一本のミステーク
未来図は天にまかせて悪い酒
嘘一つ混ぜたら軽くなる明日
指先があしたの風を読んでいる

伸雄 紅紫朗 七和子 晴美 登子 田鶴子 佳子 昌成 武人 欣之 奏子 信子 アキ 鬼焼 彦次 千華 深雪 華 高鷲

七彩にわたしの命光らせる
うたたねに毛布かけてる思いやり
裏側の謀反が見えて来る眼鏡
今日もまた先手打つても転んでる
せつかくの耳打ち風が読めなくて
透明になれば五月の風は青

川柳塔鹿野みか月鳥取 土橋

打掛けを着せてニホンの美を守る
粗相したレンタルドレス舐めておく
赤いドレスは確かな闘志だと思ふ
オークションで国家予算になるドレス
ドレスなどうちの家内は持っていない
もう一度ふと強がりを夢ドレス
花を抱き白いドレスで逝く涙
ベビードレスに着飾った宮参り
菊人形の菊は見事なドレスです
泡沫の夢鹿鳴館のドレス
姉いもと着廻しドレス二、三回
ドレスなど似合わぬ私野良着だけ
二度とない家族連れ立つこの緑
七坂を夫婦みちづれ世を渡る
峠まで道づれになり縁貫う
道のりは長く連れ添いたい夫婦
菜の花とみちづれでゆくおぼろ月
道づれの幾つ峠を越えたや
みちづれのあなた選んでから奈落
みちづれの影は決して見捨てない
みちづれの合言葉です愛してる
毎日を安全で行く老人車

惠 壽峰 よしみ 寿之 森子 螢報 茶子 蟹郎 美ツ千 孔美子 照彦 富久江 菊乃 かのる 忠良 盛桜 永子 房子 みどり いさお 久枝 実満 諷人 八重 和子 宣子 くに子 小鹿 節子

堪忍袋ほどどど生きた返し縫い
ふたありで駈ける者は果てしない
渚から貝殻音を踊ろうよ
大津波がれきの山で泣く渚
お祓いを受けて大海風いである
予感さ渚の波がうねりだす
渚から女の叫び声がする

川柳クラブわたの花(大阪) 西川

桜咲き人はやさしい顔になる
北国にも時は流れて花散るよ
耐えている人がいるから輪が丸い
被災地の人から学ばないや
蛙の音が昭和の旅情呼び醒ます
復興の街でツバメが宙を舞う
ふるさとのどこかに似ている旅の町
一致団結未曾有震災日本国
身に染みる電気水道日日感謝
好に染まる暑さ寒さのない五月
子の為には母は鬼にもなりもする
新調の服が出たがる春日和
新緑の古寺で飛び交う外国語
住み馴れた土地へ帰る日まで我慢
被災地に届けとばかり花吹雪
古希すぎて触手を伸ばす好奇心
スイートルームからの奢りて寝付かれぬ
渡り鳥ママと遊んだ国へ旅
声だけで心射止める猫の恋
津波受け花より人の愛を知る

義明報 孝子 和子 ますみ 美代子 耀一 知佐子 民 博子 愛子 奈良司 宏至 いづみ 宏 義明 正春 妙子 俊子 はじむ 晴美 浩三 風

川柳茶ばしら(愛知) 板山まみ子報

男には思いつかない主婦の知恵
牛たちが思いもしない安楽死
若者に考えられぬこの肉
夫には思いつかない隠し場所
大人では思いつかない子のあそび
女には思いもつかぬ遊び方

川柳塔なら 坊農 柳弘報

震災がヒントになったボランティア
苦戦する阪神打線繋がらず
活断層繋がってます日本中
繋がりの善し悪しあつてむづかしい
成功の秘訣は妻のアドバイス
カルガモの親子仲良く行儀よく
就職へあちこち繋がりを探して
分岐点風にヒントを得た花野
しばらくは針の筵の手術待ち
就活の自宅待機はましな方
式はまだ子も待機する腹の中
待機して無になる構え鍛えます
変わり果てた故里拳握るのみ
自宅待機すい分長くなりまして
温かい心繋げるボランティア
脳天から覚える師の拳
ケータイで見えぬ鎖に繋がれる
また負けて待機のファン泣かす虎
点と線繋ぎトリック解き明かす
竹ペラへヒントを掴む欠け埴輪
奴風明日へ翔べる風を待つ

廻行 雅美 美千代 かつ子 幸子 まみ子
彰治 おたか 紀雄 勝弘 満作 いさお 千梢 成子 芳子 次郎 隆之 隆子 萌子 太郎 堅坊 修 弘風 一風 克己 野鶴 寿之

さりげないヒントで咲いた赤い花
四分音符あんだのヒント愛が見え
リベンジを果たして天を突く拳
午前二時妻は包丁研いで待つ
男と女仲を取り持つ花言葉
運命に逆らう拳震わせて
映像へ握りしめてた油汗
さりげない誘いにヒント遊ばせる
一粒の種が大地を割るヒント
寝ていても俺の出番は知っている
悠久へ繋がる宮跡の風
裂帛の攻めの拳が美しい
苦勞した母のヒントはあたたかい
最強のヒント逆境から拾う

城北川柳会(大阪)

伊達 郁夫報

上品に喋ってみたら舌を噛み
退職日帰って見れば家はカラ
葉桜のかすかな葉すれ拾う耳
マニキュアの指で鯛の腹を裂く
人形になり切る老いの処世術
絵手紙も桜の便りもないポスト
散る花に背を押されて墓参り
厚化粧落せば自分の顔がない
思案するこの服置こうか捨てようか
上品な貴女は何時も花ですね
母シヨック性転換をした息子
煌めいた時もあつたな良き昭和
裂帛の気合みなぎる老弁士
悲喜包む桜を愛でつ夢託す
春雷が古木を裂いて通り雨

辰雄 寿美 良一 富子 順啓 國治 賢弘 柳弘 道盛 隆盛 真理子 証子 朝子 理恵 縣男 隆男 美智子 榮子 妻子 とし子 麗 郁夫 ルイ子 千加 あさ子 満作 正 杵香 寿子

上品なおつしやり方でじれつたい
上品とはこういう事が肩が凝る
ダイエットどこかが裂けた音がする
上品に構えて一食食べそびれ
本を読む明治の父に会いたくて
ご用心揉み手の裏の二枚舌
裂く音が足をとめさせる竹細工
精一杯生きて明日の風を待つ
ブレートへ子らの未来へ思案顔
春の樹の精に吸われてゆくシヨック
美しく裂けて石榴の自己主張
避難所に鯉のぼり立つ子どもの日
切り裂かれた愛に燃えてる曼珠沙華
黙らせておけばすこぶるいい女
海が裂け地が裂け心まで裂いた
秒針の余生を剥がす音がする
天辺の一步手前を踏みはずす
いのちありおしい御飯食べている
3・11日本にとってシヨックの日
余生とよくよくすまい花遍路
はたる川柳同好会(大阪) 水野 黒兎報

宏 弘風 求芽 克己 葉樹 一直 野鶴 賢子 典子 集一 倫弘 柳弘 修 令子 朝子 たもつ 勝弘 志華子 黒兎報 桂子 長一 正子 黒兎 扶美代 久子 公子 順子 康子

苦瓜で西日をしのぐ四畳半

苦いほどよく効くという正露丸
一切をのみこむ津波地図も変え
いい女と飲むから恋の血が騒ぐ
粹がつて乗った話に血を抜かれ
行ってくる残した耳に弔辞聞く
まぐれやといつも謙虚なお人柄

京都塔の会

都倉 求芽報

被災地をなぐさめるよう桜咲く
無事出産御礼の絵馬も嬉しそう
あやかりたし梅さつしりの子沢山
静かなる雨も客呼ぶ花しようぶ
睡蓮に解毒作用がありました

オーブンの日にはわんさと来る庶民
この空気一ヶの鮎が窓を開け
ハンバーガー若いとあんなに口が開く
子を叱るための逃げ道開けておく
やさしさが足りない時はみずす読む
開いたり閉じたりこころ騒がしい
眺めてる間にも進む核汚染

すり傷で済んだあわやの曲り角
あわやと言つときをぐつてきた育児
サスペンスあわやの時こマーシャル
約束は今日あわやと忘れるとこだった
東電の株買うつもりだった秋
ロゼワインあわやよめきそうになる
あわやの時手を握る人予約済み
しあわせをあわや粗末にするとこ
あわやのところでプライド捨てかけた
ヒーローはあわやの時に現れる

春代 美智代 見清 幹治 勝 契子 純子 綾子 満子 順子 美義 宣子 保子 求芽 昭 公子 ますお 欣之 葉子 能弘 宏子 芳子 益子 昌乃 扶美代 啓子

話にも老眼鏡を掛ける父
その話昨日も聞いたでお母ちゃん
途中から話を変えるのはあなた
ばあちゃんの胸に童話の森がある
泣きながら疑いながら聞く話
金のないときに役に立つ無駄話
噂話したその日から立つ煙
青い目の大阪府を聞くチャペル
千年も伝えた源氏物語
いつの日か笑い話になる苦勞

はびきの市民川柳会大阪 徳山みつこ報

野の池で起きた悲劇を忘れない
農大の手入れ届いた柿若葉
羽曳野の池に螢が舞った夢
原発のストレス溜まる池の底
武者修行行出で母さん不眠症
影武者の動き急場切り抜ける
鬼籍までああ人生は武者修行
復興へ日本列島武者震い
タレントの片手間で書く本が売れ
大津波想定外と片付ける
ターミナル意外な人とはあわせ
関白と思つた人がやさしくて
防波堤を越えた津波の地獄絵図
札束は意外に重く嵩も張る
横断歩道譲つてくれたのはダンブ
意外性あるから若さ面白い
自分でも意外こんなに怒りんぼ
母さんのバイクの音は夫も知り
配達にバイクの音が冴えている

比ろ志 福子 わこ 由美子 義昭 則彦 文代 肇 紀子 英旺 雄太 美喜 敏 喜久子 庸佑 佳代子 ちづる 猿杓 アヤ子 フジ ヨシ枝 美代子 章司 六点 悦子 登志子 一壺 りつえ

長柳会大阪

坂上 淳司報

バイクにまたがると別の顔になる
ベンツよりバイクの機動性が好き
赤バイクの来るのを待っている合否
谷底のバイクに添える花の束

学校に何故叱るかとおねる親
甘い球迷さず打つて名球会
叱られる慣れしてしまったこの恐さ
好奇心頭巡らして逃げるボケ
パパですか兄貴ですかと迷うシャツ
エプロンがだんだん似合い主夫になる
攻めだけの男の背にある不安
バーゲンで眼鏡選いの品も買い
斜めから世相見ている色眼鏡
タレントが奇抜な眼鏡で自己主張
叱るよりおだてて褒めてもち上げる
父ちゃんは母が怒ると苦笑い
叱られる蒲団がばらす世界地図
子を叱る親へ試練の反抗期
十数えそれから叱る丸い顔
叱る母子を抱きしめて共に泣き
子を叱る娘の小言妻に似る
不用意なあの叱責に悔い残る
もう一度叱つて欲しい父の声
時々眼鏡をかけて世間見る
傷口を天眼鏡が覗きこむ
飢えもせず叱られもせず何もせず
頼打つて子を諫めてる手の痛み
家の中行方不明の眼鏡あり
身についた叱られ上手次男坊

扶美代 いさお 泰子 久仁子 弘光 よしお 光弘 マサ ヒロ 正博 隆彦 たけし 正子 輝子 もこ エミ 孝代 けい子 武男 英美 敬二 ふみ 和子 直子 幸子 正一 芳野

眼鏡かけ目葉差した慌て者
防御策甘く見ていた原子の火
百均のメガネで心さえ読める
叱られたばなし総理まだする気
叱るより褒めて育てる小さな芽

川柳花の輪大坂

妻谷

重風報

バランスは一にも二にも塩加減
存在のバランスだろう父のひげ
母の日の花数同じ嫁二人

長寿の輪笑顔で歌う人氣者

人氣落ち初めて分かる人の情

年金バラ撒き孫の人氣をとつてます

偉人伝息子に読ませたが不発

受験生まわりがみんな偉くみえ

家庭平和貴女大將山の神

わかつたふりして偉そうに見てる書道展

偉い人なれとは言えない親である

父さんが褒めたんやから偉い人

あかつき川柳会大阪

山本

柳昌報

助け合う心ひとつに他人さま

内緒ごと他人に言えよボチに言う

他人にはやさしい妻と言っておく

身内でもないが他人じやないお方

大喧嘩やはりあなたは他人様

井戸端は他人の尾ひれ料理する

噂話他人の顔で聞いている

冷凍解凍冷凍解凍もう他人

外面は他人行儀な妻の見栄

コケコッコー大きくなったひよこ組

久美子

正美

靖博

ともこ

敬子

重風

風

ミヨノ

楽鬼

一幸

勇太朗

やすの

昭好

薰

克衛

泰子

朝子

篤

いさお

見清

すみ子

たかこ

秀夫

義

柳弘

生枝

組違いこんなものだら僕運
テレながら腕組歩いた御堂筋
みちのくの神よいつまで腕組みか
エコライフ太陽と組む土と組む
あの人と組めば分つていた結果
いいんです僕はライトが嫌いです
一条の光を放つ彬の碑

太陽に勝る光はおまへんな
まるで光のように駆け抜いた季節
ケータイの圏外で撮るサンライズ
びた銭の穴から見える江戸の月
無料でもスカイツリーに昇らない
ベクレルにおどおどしてる花菖蒲
札束を見ると震えが止まらない
どたん場で死んだふりする丸い虫
臆病が薄目をあけて見る世間
見逃しの三振の恋手も触れず
原発はやんべとドイツスイスでは
米所田植出来ない地獄絵図
冤罪へ普通に返る半世紀
メドという便利な言葉ありました
安全な筈の原発局に唾
大津波ストレス溜めてるアサリ
政治家の厚顔きつと象の皮
死ぬまでの資金計画繰り直す

川柳塔わかやま吟社

川上

一筋の汗に命の音がする
汗は本物勝負の鞭が温かい
ユツケ食つた数を思えば汗たたり
がんばれと言われる度に汗が出る

克己

忠昭

のぶ久

富美子

まつお

勝弘

房男

太郎

信子

榎子

一筒

和雄

祥昭

愿

隆充

敏子

宏

一行

君代

たもつ

武

哲男

廣子

桃花

美津子

大輪報

ほのか

寿子

愿

保州

地のままで飾らないのが私流
わたくしのどこを切つてもある誠意
私を主張する程偉くない
前だけを見る私の処世術
抜け殻にならないようにペンを持つ
生き残りかける私の離れ業
どう終わつてゆくかわたしを俯瞰する
あかたれだけどと譲れぬ意思がある
何を隠そうときどき夜叉になる私
強敵は私の中にいるワタシ
支えられ私が弾んでく未来
辻褄を合わすとアリバイが揺れる
真実の叫びに心揺すられる
両親のボタンの位置に子が揺れる
初老でも揺れるハートは未だ枯れず
錯覚の中で恋ころが揺れる
吊り橋を何度も渡り今がある
風鈴がエコだエコだと風を呼ぶ
まあまあと出来ばえ眺め自我自尊
まあまあで頑張つてます老いに鞭
形ある限り揺れると壊れます

八尾市民川柳会大阪

宮西

弥生報

茶の間和ます薬味のような母の声
砂嵐泣いて目洗う芸がある
真つ直ぐに生きてもしとど雨が降る
茶畑に三ベクレルの雨が降る
砂浜の海鳴りの音淋し過ぎ
神様の不安だろうか春の雪
風邪引かぬ程度私のクールビズ
今日も雨心の紐も緩みがち

紀子

美羽

英子

精子

小雪

利治

あきこ

夕胡

輝子

俣子

泰女

緑良

准一

智三

佐一

登美代

紀久子

秀子

美子

克子

一風

園

華

いさお

耀一

扶美代

柳伸

寿鶴

大將は君だケチケチしなさんな
一に傘二に弁当はあらがくに
人間で凄いやさしいあたたい
原発の安全神話メルトダウン
I-Tの森は泉の賢気楼
無我夢中攻め方知った破れ靴
遠き日の父母を思っている棚田
生と書き死も書き降り積る時間
まっすぐな亡父がわたしの道標
カレーライス素の薬味はこめんです
居るだけで薬味になっている無口
床料理風もおいしくなる薬味

翠洋会大阪

佐々木満作報

涙もろいコラムニストのペンが好き
世相切るコラムに胸のすく思い
溜飲の下がるコラムに鬱晴れる
古川柳コラムの中に生きている
コラムからヒント生まれる梅雨最中
そうだと拍手を送りたいコラム
コラムには目が釘づけになる時も
辛口のコラムニストの離婚劇
中国産何でも毒に見えてくる
酒飲んで毒づく友の目が潤む
泣き叫ぶ子に虐待かと過敏
総理殿もう泣きたくはありません
最後には女の涙トドメ刺す
節電下月の明りで酌み交わす
ノラ猫の足からまつて梅雨に入る
橋下さん浪速の維新先駆ける
はんなんの意味はおぼえたがどうしよう

草 欣 賢 紀 留 寿 秋 森 朝 幸 弥
風 之 子 雄 里 之 子 子 子 子 子 子 生 生

気の毒に原発の為自殺者が
節電に徹し猛暑を撃つ覚悟
白線まで下がって少し考える
機嫌良く酔って半音狂う歌
アル中となじられ今日は休刊日
加齢にもめげぬ食欲持て余す
添い遂げて夫婦は同じ色になる
震災に泣き原発炉に泣かされる
子の世話にならんと励む心技体
遠慮せず泣けと一人にしてくれる

西宮北口川柳会兵庫 小林

わこ報

激流に逆らう雑魚に雑魚の意地
煮魚の骨までしゃぶる魚好き
故郷の海で育った魚買う
出漁に期待をかける被災の地
たかが魚されど鮎の鰯の味
ゆりかごのうたにつれなき相馬の灯
つれなきとも都合良くとる楽道家
親鳥がつれなくなると果立つヒナ
相合傘恋の雫で濡らす肩
悪友を見送る重い雫して
命日に花と涙のひと雫
子育ての海女の雫に汗混じる
真夜中に水道の栓締めに起き
耐えて来たらしいマツ毛が濡れている
軒の雫傘に受けて立つ立話
人の世の驕りに神のひとしずく
椿はろり恋の雫かなお紅い
一服で貧乏ゆすりやと止み
いらいらの家系どの子も早産だ

舞 富 捷 浩 真 集 弘 満 正
夢 子 也 二 澄 一 作 雄

手術室なかなか消えぬ赤ランプ
いらいらを妻のアルトが包み込む
ナースにも鈍臭いのとテキパキと
避難所はいらいらの渦巻いている
眼鏡かけ辞書をめくって指を折る
ちっとはね親の暮らしを尋ねてよ
何もかも脱げば周りがよく見える
美しく老いるためには金が必要
見馴れた空だが二期一会の空である
お日様は光に影を添えて呉れ
夫婦別姓妻は自由に生きている
欲張らず等身大の幸でいい
姦しい一団去ってバラ香る
男には出来ない長い立話
冗談の中に隠した唐辛子
蛍まで夏の節電協力し

岬川柳会大阪

八十田洞庵報

満開のつつじも今は悲しそう
長雨で手持ちぶたさの小屋の中
自粛より活動の良さ皆知る
忠告もやさしい口調とけぬいて
花びらに散り急ぐと言ってみる
原発のおさまり見えす国迷うてる
手間かけて咲きにし花の散るあわれ
被災地と国会の距離五万キロ
避難所に託びて小さな旅をする
川柳作家人前で涙せぬ
頼つた姪のまさかのガン告知
べからずをしつかり守る生きる知恵
生涯を通す十指に善意の輪

安 直 正 順 基 勝 野 比 忠 哲 無 光 美 玲 弘
造 和 輔 弘 鶴 志 男 限 久 津 子 子

元氣を出そう花木も芽吹く皐月時
桜前線追つかけて北海道
長かった通院治療やつと終え
セザンヌの美女ははにかみ見せてない

川柳塔さかい(大阪)

村上 玄也報

にこにこ老いの繰り言きいたげる
何度でもヘルバーさんは聞いてくれ
くどいから徳利置いて逃げてくる
溶岩は怒ったままで固くなり
帯解いてきようの悲しみそつと脱ぐ
わだかまり溶けてお茶から酒になり
わだかまりとけてないけど手を握る
街の憂さとかす山・川・鳥の声

雪どけへよもぎたらの茅山之路
一冊の本に溶けてるエネルギー
長年の恨みかけたデスマスク
わらべ歌胸のしこりが溶けてくる
老夫婦ふかいところで溶けている
物忘れ徐徐にとけ出す僕の脳
溶け出した核がゾンビになる恐怖
フラッパがとけてゆきます生返事
とけ合つて熟年離婚せずに済み
抱擁の温み五感に溶けてくる
常温で溶ける程度の軽い鬱
雑踏にとけ込み悩み軽くなる
合う度にまだ一人かと伯母が聞く
内臓が溶けだす程に飲むビール
船とけてないのに話しかけられる
忘れてた記憶を溶かす音に会う
わだかまりとかす言葉さをがして

令子 桜琴 東吉 洞庵 八千代 半銭 世紀子 時雄 みつこ 好 愿 冬虹 綾乃 公誠 朋月 かりん 唯教 としお 誠一 日はは 日の出 天笑 扶美代 五月 敏治 雅子 さくら 政男 のん子

片恋がワイングラスに溶けてゆく
好き勝手言わせて母を介護する
例外を作り出すのはお偉方
澄ましても意地の悪さが顔に出る
例外はない銀行は三時まで
気がつけば一人ぼっちのくどい酒
札束で叩けば裏口が開く
例外の事故へ安全見直され
すべもなく折る海辺にカモメ飛ぶ
スマイルもいつかは消えてた空元氣
好き放題生きてさつさと風になり

川柳同友会みらい(鳥取) 吉田 陽子報

生きてこそ希望の光見えてくる
今日の愚痴飯面とともに洗い去る
背のびしたスーツがやつとプロポーズ
ギョツと抱く希望の明かり消さぬよう
とりあえず私にできる義援金
ばらばらにされて臓器が生き返る
引力がポストとともに消えていく
六十路坂小石ぐらいい蹴飛ばせる
想定外が一石を投げかける
値上りのニュースばかりで凍えそう
天よ地よふるえを止めてくれまいか
多すぎねばならないのリクエスト
黄砂降り呼吸を控えめにしている
別々のころに同じくさくら散る
震災の手助けまずは節電を
真実が隠されるほど胸騒ぐ
悪いことそんなに続くはずがない
気配りをおこたる足場風化する

深雪 清晋 玄也 俣子 月子 健吾 像山 千代 雅明 美江 葵 ひとみ 千恵子 純宏 陽子 寒之 信子 三郎 勝之 みち子 くにこ 敦子 嘉子 温子 久司 美恵子 美恵子

今どきの新語こつそり聞いてみる (山)ふみ子
この国は夢から覚めてしまつて
後からいきなり押すと倒れます
埋もれ火の役目覚悟の灰かぶる
老眼を押せば懺悔の音ばかり
東電の二枚舌には脱帽だ
ずり落ちる眼鏡姑をなつかしむ
蓮華田の孫ひらと蝶になり
傍にいて欲しいコーヒー冷めるまで
突風に負けぬ覚悟の傘を差す

サークル檸檬(大阪)

松尾美智代報

こわい世だ不信任案身内から
体重計ぞーつとさせる事が好き
程ほどの欲ありわたし元氣です
鰻頭がこわい酒はもつとこわい
子を守る母は何にも恐れない
怖いから見たい聞きたい触りたい
悔いのない一日だった日が沈む
こわい物知らない無垢の目に出合う
目を閉じないと見ておられない画面
ちぐはぐをわたし自身で許してる
文明の便利さこわさ知りました
もう二度と降らせてならぬ黒い雨
煽てられてるの気になってゆくこわさ
誤解されているのか寒い背の辺り
倉吉川柳会鳥取 竹信 照彦報
そこにある穴は覗かぬ方がよい
そこまでは話したくない内輪もめ
そここの席空いてますかと美女が来る
美ツ千 風露 喜美子

白い布取つたらそこがボクの顔
幸せはそこにあるのに先を見る
年とればそこに居るかの声もなし
そこにある運もお金もつかめない
何着ても打吹山は美しい
重ね着を少しずつ脱ぎ蝶になる
ゴージャスな見た目涼しい夏を着る
罪を着て私を救つてくれた人
人の恩着たり脱いだり温かい
勿体無い娘の捨てた服を着る
ブランドのシャネル着ている案山子さん
マネキンイメージ通り着こなせず
年金で世界漫遊して暮らす
理想とは家族元気で暮らす事
私の理想は夫を送って天国へ
放射能すべてを食すバクテリア
亡くなって理想の夫と思う今日
理想だと結婚してみたものの
復興へ理想の村はほど遠い
日本の理想こわした大地震
合掌をする何にも怖くない
そうかなあ信じてみたり案じたり
何事もそうかそうかといひ旦那
そうか私八十路か鏡じつと見る
テレビ見てそうか私も老人だ
そうかなあ少し疑う立ち話
そうかそうか学費かせち子の日記
ダイエツトそうか決めたが続くかな
そうかももうそこがあの世か花ざかり

六甲川柳会兵庫

伊勢田

穀報

無いものを数えて嘆く風の私語

無限

盛桜 恭子 英子 瑞子 石花菜 由紀子 康子 鬼一 醉芙蓉 萩江 悠子 龍枝 完司 宏 賀津恵 次男 日出子 美栄子 貞子 よしえ 螢 智恵子 泰輔 和子 けいこ 重代子 重忠 祐子 照彦

エコ自慢未来の子らに青い空
方言がお国自慢に溶けている
梅雨空に紫陽花菖蒲胸を張る
自慢話人の手柄も入り混じり
二度聞いた自慢話を聞く辛さ
庭の花見事に咲いて自慢げだ
歌自慢本人だけが盛り上がる
自慢とは劣等感の裏がえし
自慢気にはなまる貰つて孫翔る
つかみどころ嘶家の目は笑わない
急降下トンビ獲物を掴み取る
しあわせを掴んだつもり魔女の髪
情報を早く掴んで裏をかく
ヘルパーの心を掴むありがたう
ビジネスは手心え掴み知恵勝負
袖の下そつと掴んだ下心
割り勘のお酒の席でもらう知恵
割り勘で気楽に続くお付き合
勘定を見て割り勘に切り換えた
割り勘勝ちしたら吐き氣と二日酔い
割り勘がいつも良いとはかぎらない
割り勘の積りがおこるはめになり
割り勘に居心地悪い上座席
耳澄まし夫婦喧嘩を聞くインコ
いつまでも歌い続ける母の膝
貧乏も自慢話の戦中派
携帯の廃棄にうまるレアメタル
あじさいが絵になる細い雨が降り
最初から当てにせぬなら呼ばないで
九十のハードル目ざす老いの坂
二次会では下戸が幹事で後始末

芳江 寛子 政一 浩司 武臣 千代子 保雄 康子 照子 義博 繁義 弘 寿朗 登美子 勤 和子 美恵子 利子 洋一 茂 忠貞 弘 千賀子 孝子 盛夫 基輔 夏子 和郎 弘子 勝

掴むならしっかりとついでに行ける人
朝の鏡夕の鏡も嘘はない
掴むものないから揺れにまかせてる
川柳藤井寺(大阪) 鴨谷瑠美子報
おめでたい家族が増える嬉しい日
別棟で生活しても家族です
笑いある家族に何時も青い風
百坪に住んだ家族も独りの灯
我家の家族名前を呼ぶとニヤンという
大袈裟は嫌い希望は家族葬
うらみごと海には言わぬ漁師たち
くどくどと言つまい星を見てごらん
震災地夕焼け空が泣いている
露天風呂化粧落してトドの群れ
好きな人出来たらしいなうわの空
古里の空は今でも温かい
青空のように善人透き徹る
空おそろしい原兎いまだ未終決
青空にふたりの夢を画いてみる
次の世は恋人のまま逢いましょ
手品師の女夫を消したまま
さすがだとはめておだてて乗せてやる
さすが日本あ津波から立ち上がる
手遅れでさすがの名医匙を投げ
ゴキブリを素手で掴んだママさすが
天地人さすがと思う句に会える
飲兵衛もさすが病に勝てません
森にきてさすが心が緑いろ
咳払いだけで反論押え込む
さすがだと言える政治家何処におる

和宏 美穂 能子 庸佑 ヨシ枝 紀雄 婦美枝 昌子 ちづる フジ子 弥生 一步 惠美子 喜代子 雅枝 龍一 シルク 政男 登志子 一筒 雄太 扶美 史郎 いさお 悦子 アヤ子 栄 六光 点男

原子の灯さすがの神も手が出ない
さすが今軍歌を叫ぶ人を見ず
さすがだなく見抜かれていた返事
瑞美子

川柳あまがさき兵庫 田原 一兆報

賢人はその場に應じ絵が描ける
あの人の「大変よ」には慣れている
勝手にしつはいよいよいつか厭じやない
本当はどうなんですか問いつめる
ふるさとのバラがのんびり咲き出した
空腹で行くと大変買い過ぎる
真相は心の奥に秘めている
丁寧に女房の愚痴を聞いてやる
喜寿の朝祝いの膳も七分粥
悲しみは熱い涙になつて出る
急ぐのに保険証どこかわからない
あの顔を見ても真相わからない
まかしとき肩がす用意出ている
庭の花出掛ける勇気つけてくれ
父の日に只で喜ぶ父に酌
あの人の一人はぶちに上げる蓋微
真相はチョコが余つただけのこと
花道を歩く力士の汗の粒
負けましたくどいあなたのラブコール
旅半ば風と戯れ花に酔い
ご予算で如何ようにもと葬儀場
ダイエツトせぬのに体重減つていく
古稀迎えソツと差し出す無料バス
真相を涙に託す会見日
三面鏡どこにホンマの妻が居る
婚活の衣裳に車泥かけた

みつこ 清之 瑞美子
キヨミ 一兆 洋子
幸香 政江 雪菜
泰子 柳明 野薫
比る志 柳明 野薫
あかり 龍 五月 江美
里美 耕治 義久
祐康 哲男 美代子
登子 美也子 靖鬼
奮水

アリバイを妻には言えぬ訳がある
瘦せ馬を応援したい負けつぶり
失恋の真知つている日記
自分史の煌めく章は薄いまま
真相を胸におさめて持つて近く
お手本を赤いカンナに背を伸ばす
どの説が真相なのか専門家
残り火が時に応じて噴火する
愛は順調ヒソヒソ話す花の陰
豊中もくせい川柳会大阪 藤井 則彦報

川柳さんだ兵庫 堀 正和報

喧嘩でも裏表ありよく見てよ
停電のローソクちよびり誇らしげ
泳がせて半蔓式に検査する
悩みごと聞いてヒントを呉れた友
運命を肌で伝えるベーターベン
気配りの言葉の奥が伝わらぬ
お腹の中でママとお話する胎児
反省し俺が悪い喧嘩なし
原発に付いていなかったジス・マーク
明日も雨雲の行方をマークする
だんまりとふくれつ面の長期戦
路地裏のアジサイ初夏のロゴマーク
被災地のこころバリンと割れたまま
停電に備えホテルを飼つてます
雷公の喧嘩はへその奪い合い
切り口もシャープ紫陽花盗まれる
晴れマークの予報に回る洗濯機
口下手は一生治らないかしら
じつくりと急げば事はうまく行く
一からの出直し誤解そのままで
動かねば始まらないとドッコイシヨ

正和 朋月 芳子 菜々子 勝巳 求芽 美籠
郁子 幸雀 庸佑 由美子 隆 佐和子 美津子 雀舎 千恵子 佳恵 幹治 歌留多 志津子 多恵子 則彦 千代 巴子

たわい無い喧嘩いつばいして夫婦
幼い日の祖母の民話が聞こえま
す何回も曲がり原点まで戻り
好きな趣味の息抜きにする別の趣味
居座りの総理で国が動かない
被災地のどこか動かし善意の輪
温度差で鍵が合わないときもある
野の花に動く心をいとおしむ
妻のマグマ軽い喧嘩で温度下げ
伝えたいことがありすぎた涙

川柳さんだ兵庫 堀 正和報

口あけて注す目葉がファウルする
戻らない自販機足で蹴つ飛ばす
女運悪い顔に書いてある
凶と出たおみくじだけは信じてる
ギザギザの感情線がよく喋る
戻る家なくとも家族一つの輪
幸せのかたちで咲いた路地の花
一人でも仙人という暮しぶり
ばあちゃんはどうちかつの平和主義
故郷へ錦を飾る汗を積む
相憎の傘をたたんでいるしずく
「罪と罰」漫画になれば読む積り
悲しみは一人で墨を磨るならい
永田町泥んこ試合もう止めて
試験して買わずに立ち去るのも勇氣
全試合一本勝ちの金メダル
人生は占いにないサブライズ
軽い気で押した実印付きまとう
アルバムを開くと涙はとり落ち
結果まで責任持たぬ占い師

美智代 千枝子 見清 満子 美義 求芽 堅坊 葉子
哲男 忠 朋月 光久 菜々子 裕美 ひとみ 順子 美和子 千津子 徹 哲司 雅一 茂山 淑子 好文 歳子
キヨミ

日本エコの昭和へ巻戻す
いい土を作れば結果ついてくる
一人しか審判ない草野球

岩美川柳会(鳥取)

石谷美恵子報

腕組んで目をつぶつても金は来ぬ
腕組みの父の不安がまだ解けぬ
母と子が組むと崩れる父の岩
この人と組みたい握手固くする
銭じゃない嫌な人とは組めません
あぐら組む父さんやはり安泰だ
夫婦坂先が読めない組合せ
腕組んで見たけどよい句出て来ない
陽が落ちて一日減っていくいのち
津波ショック想定外が多過ぎる
ポーナスが鼻上に乗けた日のショック
日傘など差してはおれぬ畑仕事
色黒も日傘をさせばおれぬ畑仕事
俗に言う道楽息子だったけなあ
道楽で命洗濯しています
時化の海釣り道楽の子を案じ
道楽の道に迷って出られない
ささやかな道楽ひとつコップ酒
実益を兼ねた道楽見つからぬ
家の中夫のちぎり絵溢れてる
道楽だ放つておこうか構おうか

岸和田川柳会(大阪)

仲谷弘子報

宣子 章子 正和 蟹良 忠子 幸子 節子 たぬ 清帆 一京 孝男 主一郎 茶子 昭弘 昭お 一瑠 重忠 菖子 一粋 雅女 和子 美恵子 弘子報

理恵 哲矢 侑子 世紀子

優勝の目ないけどやはりトラが好き
念仏の代りに今朝もアイラブユー
好き嫌やのうてはんりの添うてます
お役所もラフな制服クルビズ
制服に親も近所も騙される
制服を着ればきりりと別の顔
長生きへ詩囊満たしているのです
蓄えがあつても拾う御飯つづ
一円玉蓄え場の抱く大志
子や孫に蓄えたモノ狙われる
蓄えのないものが出す義援金
もう先が見えて来たから使います
蓄えの残見て余命うらたえる
蓄えた筋力僕の宝物
近頃はちよいちよい飛んでいる記憶
店の金ちよいちよい抜いたら書く日記
気まぐれで思いついたら書く日記
我が家にもちよいちよい来ます青い鳥
夜の街ちよいちよいガスを抜きに行く
対策を持たずちよいちよい口を出す
日本中原発事故でノイローゼ
妻が元気なので私はノイローゼ
そばに在るだけで精神安定し
帰宅後はすべて着替えて洗濯機
五月晴れなのに若さの五月病
ノイローゼ僕はなれない肥満体
メタボ病む近頃私拒食症

米子住吉川柳会(鳥取)

渡辺多美子報

閑節の悲鳴を聞いてダイエツト
くじ引きで一等当たり笑みうかべ

和美 みつ江 昭 浩子 愿風 泰弘 明子 ひろ子 蛙城 いさお 清代 隆昭 東吉 玄也 忠太 義昭 俊昭 珠子 ダン吉 富子 竜之介 幸代 香枝 房枝 弘子 仁緑 すみえ 欣子

快晴に永遠の里へとお見送り
今日も又目標届かぬ万歩計
延命はいらぬ天寿をまっとうし
寿を送るメールの弾みよう
大福を貰い休憩ダイエツト
日本から世界に余震響かせる
健康法ガツテン流が迷わせる
マンシヨンのペランタ泳ぐこいのぼり
大滝句座(鳥取) 新家 完司報
瓢箪の括れを目指すストレッツ
耐えきれぬものを背負って防波堤
どこよりもいっちゃん安心ゴミのなか
ドクダミよ君はわたしの医者さま
耳学問左入口右出口
安全な螢の光窓の雪
写経する漢字は読めぬままの筆
掃除機を嫌う不逞なゴミがある
もう少し安くならぬかゴミ袋
食べて寝てお酒の好きな粗大ゴミ
お決まりの文句で今日も黄昏る
ウエスト絞り姿勢正せばまだいける
わたくしも虫干しして梅雨晴れ間
生きることまだまだ学ぶことばかり
細いけど今に根が張る植えた苗
勉強をしなかった今背負う
被災者は笑っているが悲しい目
どうしても見付けてほしいかくれんぼ
勉強はできなかったが生きている
分析すれば私の話愚痴ばかり
ベン持つ力細って病進行中
何喰つたらうか死んで困るまだ少し

多美子 宏之 ふみ 未延子 公一 正二 紀の治 礼子 美ツ千 芳光 大鯰 やえ 照彦 石花菜 水歌 泰輔 幸代 寿代 美智子 知恵子 重忠 けいこ 久子 悦子 希美 仁美 克枝

体調が天気具合で良し悪し
元気がと問えばフツと返される
細繩のつるんと情けなど無用
ヨメハンの小言は豆腐屋のラッパ

川柳大版

長井

善純報

母の日に母が生きててくれたなら
ポケットで小さくなってゆく理想
皇后様の理想の笑顔に癒される
何よりも元気が理想他にな
老後生活安心できる国がいい
モデルハウス物の少ない家がいい
理想論ばかりで芯のない男
三食が黙っていても出る我が家
蒼総理想と現実の違い過ぎ
信用を落した店が憎らしい
真実の響きが人を引きつける
ぬか床に響く祖先の言い伝え
聞き上手うまく話を響かせる
夫婦して打てば響いて四十年
年金に響かぬように飲むお酒
終点のない戦争に人は何故
点滴が寝たきり父を生かして
はまきをしめて原点問うている
頂点の風は厳しい孤独感
欠点があるから魅力感じます
東電の汚点世界史に残る
要点はどこなんですかこの話
サヨナラはたった一点だけでよい
どこからかすかに響く亡母の鈴
あなたとは打てば響く問柄
何事も胸がドキドキ出発点

鈴野 紀の治 芳山 完司

芳香 堅坊 義明

珠生 美世子 柳弘 紀雄

照月 美籠 柳昌 柳風

ゆめこ 五月 喜楽 川童

笑風 鉄心 花笑 美花

勝弘 万紗子 青道 功

合格点あげよう君の目玉焼き
一つだけ美点あります恋が好き
恋文の点字へ指先が躍る
満点に近いと思う内助の功

川柳塔すみよし大版

岩崎

公誠報

歳忘れ席をゆずっている私
夢乗せたレールまだまだ続きます
僕のこと口が軽いの知らないな
真つ新の明日があるから救われる
紙芝居昭和貧しくなつたしく
口づぐむ返事はきつとノーだろう
まだ脈があるんだ今日も叱られる
つまるとこ自分を救うのは自分
被災児の心のケアはゆつくりと
あるがまま生えればそれでいいです
自らの策にすつぽりはまり込む
心技体どれをとつてもまだまだだ
心地よい風に救われ進む道
散策のけやき並木にある息吹き
口程にも言う目はサングラス
定年後妻にはできぬ口答え
愛された記憶の中にある秘策
妻の口はたしかに僕より肥えている
瞬いて老いた策士は動かない
仕舞風呂あしたの策を練っている
地震やんで打つ策もなく積む瓦礫
まだまだをあつと言う間が迫りくる
辛口の批評を呉れる真の友
一秒に救われた人消えた人
隅つこの異なる意見よく光り
国難に日本の行儀試される

まつお 一歩 朝子 善純

美世子 芳香 勝弘 朝子

正太郎 萌 日の出 克博

温子 昌紀 かりん 裕之

チエコ 五月 柳弘 太朗

半夢 美籠 妙子 玄也

蕉子 公誠 遠野

川柳塔すみよし大版(前月分) 岩崎
長生きをして下さいとこき使う
おのろけを聞いて珈琲おごらされ
逆立ちが出来て天狗になった子
それぞれの思い異論の渦となり
どんどんと引きあがられてレベル7
十人十色だから人間おもしろい
労働の出来る喜び知った老い
せんと待つお葉だけでいいですか
知識者の意見異なり迷う民
いたわりに愛と違えた老いの恋
花粉症カラス天狗が闊歩する
労働はいいな天狗にかく腹が減る
多産系いんな天狗居て楽し
労ってくれるなら肩もんでくれ
異なった臓器が人を助けている
大地震地球に異変起きている
魚屋で買う時もある釣天狗
異なった天狗になるには限らない
鼻折らぬ程度に残す自尊心
新幹線ヘルツの違い走りぬく
兄弟は皆んな飲むに僕は下戸
謙遜の言葉の裏にいた天狗
恋する天狗の鼻もこんなにやくに
労りが過ぎると軽石が沈む
家を背にすると凜凜しい父である
釣り仲間みんな天狗で仲が良い
花の香で酒乱になっている天狗
始末書の多い男がいま社長

日の出 ばつは 太郎 かりん 勝弘 一歩

美世子 妙子 昌紀 昌子

シマ子 半夢 芳香 桃花

直子 チエコ 舞夢 克博

無名子 五月 裕之 柳弘

美籠 五月 蕉子 公誠

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 みちのく	20日(土) 午後5時締切 耐える・中毒・うとうと	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川柳 ねやがわ	21日(日) 午後2時締切 旅・疑う・忙しい・自由吟	寝屋川市立総合センター 4F 第1研修室 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	21日(日) 午後2時締切 合併・もったいない 席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	21日(日) 午後2時締切 工面・部屋・思い出	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳塔 わかやま 吟社	21日(日) 午後1時40分締切 仏・溶ける・じりじり 水泳の種目	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪
南大阪 川柳会	22日(月) 午後6時から やかましい・一喝・駆ける 和解	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松露 川柳会	22日(月) 午後8時締切 昼寝・音・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口1757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	26日(金) 午前9時30分から 鰻・海・塗る・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
和歌山 三幸柳会	27日(土) 午後0時30分から 空気・のんびり・始まる	和歌山商工会議所4階 第2会議室 ニュース和歌山編集部 「読者のひろば和歌山三幸柳会」係
川柳塔 すみよし	28日(日) 午後2時30分締切 音・湿る・no(ノー)	住吉区民センター 南海高野線沢之下下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
八尾市民 川柳会	第58回 八尾市民川柳大会 28日(日) 午後1時締切 家・魚・志・名・雅・波・手	八尾文化会館 5F レセプションホール 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
はびきの 市民 川柳会	28日(日) 午後2時締切 霊・のんびり・ジョーク・急ぐ	綾南の森 公民館 近鉄高鷺駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	28日(日) 午後1時30分締切 訂正・ヒロシマ・落ちこぼれ	鳥取駅 2F シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原美雪
京都 塔の会	29日(月) 午後2時締切 怖い・あがく・会	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

8 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 さ か い	第29回 夜市川柳大会 7月30日(土) 午前10時30分開場 (詳細は本誌7月号131頁)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 な ら	4日(木) 午後1時開場 眠る・裾・信念	奈良市立中部公民館4F 近鉄奈良駅④番出口 徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城 北 会 川 柳 会	6日(土) 午後1時開場 看板・乱れる・スリル 自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富 柳 会	6日(土) 午後1時開場 浮・迫る・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL.0721-25-0603 池 森子
川 柳 塔 ま つ え	6日(土) 午後2時締切 模様・血・泊まる・カーテン	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
倉 吉 川 柳 会	6日(土) 午後2時締切 有名・預かる・確かに	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
西宮北口 川 柳 会	8日(月) 午後1時45分締切 急所・省く・ギラギラ 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレにしのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川 柳 あまがさき	9日(火) 午後2時締切 根気・寝る・しんみり 自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほ たる 川 柳 同 好 会	9日(火) 午後1時30分締切 坂・かなう・さくさく	豊中市立堂池公民館 阪急・モノレール 堂池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
あかつき 川 柳 会	12日(金) 午後2時締切 磨く・海・花瓶	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2階) 地下鉄[谷町6丁目]駅③番出口から3分 道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳大阪	13日(土) 午後2時締切 だから・鍵・進化	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 打 吹	13日(土) 午後2時締切 コンテスト・渡る・なだめる	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
豊 中 もくせい 川 柳 会	15日(月) 午後1時40分締切 生える・我慢・さぞ・自由吟	豊中市中央公民館 阪急曾根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さ ん だ	16日(火) 午後1時から 偲ぶ・拭く・ビール・大勢 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
岸 和 田 川 柳 会	20日(土) 午後1時30分締切 世間・助ける・次々 ノーベル賞	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代

柳界展望

ンドホテルで開催。同人の特選は次の通り。

半分こ小さい方は仏さま

高瀬 霜石

★連続テレビ小説「てっぱん」川柳には224名「二三八

句の応募があった。

尾道市長賞 木本 朱夏

ひまわりがファイトファイトと灯をともし

優秀作品

三宅 保州

てっぱんを貫くものは愛である

政岡未延子

てんやわんやを美味しい味にするてっぱん

柏原 夕胡

喜怒哀楽素直に出せる家に住む

武本 碧

初恋ヘトランベツトは鳴り止まず

古久保和子

尾道の風が運んできた元氣

藤井 正雄

てっぱんのダンスで朝のパンが焼け

北野 哲男

保育所でてっぱん踊りし

た自慢

☆小沢淳氏(同人・札幌市)

は、5月30日・6月12日までに喫茶みきで川柳展を開催した。これまでの作品約40句を色紙や短冊にして展示、好評を博した。

☆鈴木公弘さん(理事・鳥取市)は、昨年の34回全日本川柳鳥取大会実行委員長として、仙台大会前夜祭に於て感謝状を授与された。

☆平成22年度川柳塔みちのく年度賞は高瀬霜石さん(理事・弘前市)に決定。

☆木本朱夏さん(常任理事・和歌山市)は、「葦群」18号に「いま書くべきこと」を執筆した。

☆麻生路郎展「命日に合わせて8月15日まで、尾道市東土堂町の文学記念室で開催。午前9時から午後6時まで。問合わせ先0848(22) 4102

☆杉野十佐一賞作品募集課題「岸(3句詠)

選者「徳永政二・なかはられいこ・樋口由紀子 他

投稿料11000円

新同人紹介

錦織 禮子

町紅・湊丘・知恵子推薦

竹村 紀の治

蘭幸・雄々・未延子・ふみ推薦

締切8月31日

投稿先030-0861 青森市長

島4-23-4-102 守田方

第16回杉野十佐一賞係

▽コ厚志お礼△

○コキ封筒(株)より、大判封筒二千枚、1寸封筒二千枚寄贈頂きました。

○初山隆盛さん(同人・大阪府)より、夫人の供養として金一封を拝受しました。

▽お詫びして訂正△

7月号P5上段20行目

副耳→福耳 P118下段18行目、天と地→天と地へ。P

30分

12月164上段27行目、11月号↓

▼削 除▲

○7月号、P4上段7行目、被災地が晴れの予報にホッとする、は作者から二重投句のため、取消したいと申し出があり、削除します。

常任理事会①第17回川柳塔まつり関連②賞選考方法について③新理事・常任理事の推薦④高野山合祀祭の日程⑤定例確認事項⑥各部報告事項⑦その他

次回8月5日(金) PM13時

次回8月5日(金) PM13時

次回8月5日(金) PM13時

次回8月5日(金) PM13時

次回8月5日(金) PM13時

第35回 井笠川柳会誌上大会

薬(ひこばえ)

課題と選者

「苦 勞」	「予 定」
長川 哲夫	山本 芳男
平山 三鶴	船越 洋行
田辺 進水	岩本 笑子

各題3選者による共選

応募要領 便箋か所定の用紙に各題2句
郵便番号・住所・氏名・柳名・電話番号・
所属柳社を明記し応募料と共にご送付
下さい

応募料 1000円(発表誌送付)

締切 8月31日(水)消印有効

投句先 〒714-0081 笠岡市笠岡2289
井笠川柳会 TEL 0865-62-6200

賞品 各題共、天位獲得者より総合
成績を勘案し、各題1名の句碑進呈者
を決定します

主催 井笠川柳会

第63回 西日本川柳大会

とき 10月15日(土)・16日(日)

ところ 久米南町文化センター
岡山県久米郡久米南町下弓削

日程 10月15日 18:00~20:30
前夜 川柳まつり
10月16日 9:00~16:00
川柳大会

兼題 (大会当日11時締切・各題2句)

「実る」	久本にい地	選
「青空」	小島 蘭幸	選
「積む」	長島 敏子	選
「土」	平山 繁夫	選

特別席題 (当日発表・1句)

新家 完司 選

◎参加賞 2000円(昼食・大会誌呈)

◎前夜選柳祭 計画中

◎宿泊 津山駅前

「ホテル・アルファワン」を幹旋

主催 弓削川柳社

あかつき川柳会創立10年・鶴彬忌 記念川柳大会

=川端一步・文集「紙つぶて」発刊=

日時 9月11日(日)12時開場

会場 大阪健康福祉短期大学・ホール
JR阪和線堺市駅より3分

◎特別投句

「十」川端一步 謝選
(ハガキで一句8月20日締切)

兼題 (各題2句、特別投句以外の欠席
投句は拝辞)

「挑む」	木本 朱夏	選
「包囲」	植野 美津江	選
「許す」	板野 美子	選
「完走」	田中 新一	選
「時代」	小島 蘭幸	選

会費 2000円(大会誌・記念品)

懇親会 3000円

投句先 〒599-0232 阪南市箱作1586-14
森村 美花

主催 あかつき川柳会

尼崎川柳大会

月日 9月3日(土)

場所 兵庫県立ピッコロシアター
阪急バス「塚口」停留所下車すぐ

開場 12時 締切 13時

会費 1500円(句集進呈)

兼題 「仮縫い」 古今堂蕉子 選
「デッサン」 嶋澤喜八郎 選
「介護」 大森 一甲 選
「脈」 西 美和子 選
「きつと」 前川千津子 選
「響く」 長浜 美龍 選

(各題2句、席題なし、欠席投句拝辞)

懇親宴 4000円

連絡先 尼崎川柳協会事務所

山田 耕治(06-6491-1612)

主催 尼崎川柳会

(ご祝儀の儀は、固くご辞退申しあげます)

せんりゅうぐるーぶ GOKEN
第10回 誌上川柳大会作品募集

◎題 (共選)

「意」 榊 陽子
徳 長 怜子
井 上 せい子
木 本 朱夏
「雑詠」 井 上 一 筒
原 田 否可立
田 中 博 造
村 上 氷 筆

◎締切・発表

9月20日消印有効 11月発表誌送付

◎投句料 1組 1000円 何組でも可

◎投句先 〒791-0212 東温市田窪1976-17

野口三代子 方

せんりゅうぐるーぶ GOKEN

誌上川柳大会係

◎お問い合わせ

松山市千舟町7-6-504 原田否可立

電話 089-921-5377

第25回記念 NHK学園
「全国川柳大会」作品募集

日時 11月19日(土) 午後1時～4時

会場 東京都国立市「くにたち市民芸術小ホール」

事前投句の課題と選者(各題2句・2人選)

①「伝える」 西出 楓楽・島田 駱舟

②「自由」 萩原美和子・四分一周平

当日投句の課題と選者(各題2句)

午後12時50分締切

③「響く」 森中恵美子

④「深い」 竹中瓢太郎

特選句を語る「特選者のあなた」に迫ります

司会 大木 俊秀

投句要領 専用の投句用紙(無料)をご請求下さい。

投句料 雑詠のみ2句 1000円

雑詠と課題「伝える」「自由」の6句 2000円

投句締切 9月16日(金) 消印有効

賞 大会大賞作品は、文部科学大臣賞

の候補作品となります。

投句用紙請求・問合せ先

〒186-8001 (住所の記入は不要です)

「NHK学園 全国川柳大会事務局」

電話 042-572-3151 FAX 042-572-0061

主催 NHK学園 共催 国立市

後援 文化庁・NHK・社全日本川柳協会

国立市教育委員会

第42回 奈良県芸術祭参加
第83回 奈良県川柳大会

日時 10月2日(日) 11時30分開場

会場 橿原市商工経済会館 7F

出句締切 13時

宿題 (各題2句 締切 13時)

「前途」 笹倉 良一 選

「揺れる」 毛利 元子 選

「始末」 宮田 宜子 選

「人情」 那須 鎮彦 選

「求める」 稲葉 長生 選

「構図」 島岡美智子 選

参加費 1500円

お問い合せ

〒634-0835 橿原市東坊城町22-45

植野美津江

TEL・0744-24-0273

主催 奈良県川柳連盟

担当 なまと番傘川柳社

富田林市民文化祭
富柳会 第61回 川柳大会

とき: 9月17日(土) 正午 開場

ところ: 富田林市中央公民館2Fホール

(近鉄南大阪線 富田林駅下車

南へ200メートル)

課題 (各題2句) 午後1時締切

「開」 薮 帆子 選

「面」 太 田 扶美代 選

「消」 萩 野 浩子 選

「連」 黒 嶋 海 童 選

「散」 松 本 初太郎 選

「溢れる」 池 森子 選

会費: 1500円 (発表誌呈、お茶)

懇親宴: 4000円 (当日受付)

お問合せ: 池 森子

(電話 0721-25-0603)

主催: 富柳会・富田林市川柳会

第9回 おかやま県民文化祭参加 井原市文化祭川柳大会

と き 11月12日(土)
ところ 井笠地域地場産業振興センター
(井原駅より北へ300メートル)

事前投句 各題2句

「萬」 高 木 勇 三 選
「年」 山 本 久 月 選
「青」 石 原 淑 子 選

事前投句締切 10月7日(金)

投句料 1000円(郵便子為替)

当日投句 各題2句

兼 題 「面白い」 久本にい地 選
「走る」 武村 一美 選
「紅葉」 坂東 弘子 選
「雑 詠」 天根 夢草 選

席 題 「当日発表 1句」 広畑こうじ 選

当日会費 1500円

投句先・連絡先 〒715-8601 井原市井原
町311-1井原教育委員会内

井原市文化祭川柳大会係宛て

主 催 井原市文化協会

美と川柳 観月の夕べ

と き 9月15日(木)

受付開始 13時30分 美術館1階・レクチャールーム

投句締切 14時30分

句 会 15時40分～17時15分

月見の宴 17時30分 館内レストラン・20時頃終了

ところ 兵庫県立美術館 阪神岩屋駅下車
南へ400メートル TEL.078-262-0901

兼 題 各題2句 欠席投句拝辞

「アニメ」 山 本 忠 良 選
「月」 山 口 光 久 選
「借りる」 菱 木 誠 選
「小さい」 長 島 敏 子 選

会 費 4500円 下記を含む

美術館観覧料、句会費、月見の宴

申込は会費を添えて下記まで

山本 芳男 〒655-0871 神戸市垂水区

松風台2-1-1-1005 TEL.078-751-1327

毛利きりこ 〒651-1142 神戸市北区甲

栄台3-4-10-407 森方 078-591-9164

主 催 兵庫県川柳協会

残暑お見舞い申し上げます 暑さ御自愛くださいますように

2011年 盛 夏

“鳥取県川協”では第35回鳥取県川柳大会を
別紙のとおり10月15日(日)に開催します。
皆様のご支援をお待ちしております。

鳥取県川柳作家協会

会 長 森 山 盛 桜 鳥取市鹿野町中園180方
〒689-0423 電 話 (0857) 84-1491

第17回 川柳塔まつり

と き 平成23年10月10日(月・祝)

午前11時開場・午後1時開会

と ころ ホテル・アウィーナ大阪 4階 金剛の間(中・西)

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 TEL 06-6772-1441

(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車)

《各賞表彰式・記念句会》

表 彰 式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「R・H・ブライスと川柳」

R・H・ブライス研究者・岐阜保健短期大学教授 吉 村 侑久代 氏

兼 題 「勢 い」 神 奈 川 菊 地 政 勝 選

「平 均」 鳥 取 倉 益 一 瑤 選

「積 む」 青 森 佐 藤 古 拙 選

「気くばり」 兵 庫 黒 田 能 子 選

「ア ッ プ」 大 阪 村 上 玄 也 選

事前投句 「道 」(9月1日必着) 川柳塔社 主幹 小 島 蘭 幸 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正 午(午後4時半終了予定) ※各題の「天」位に賞呈

◎会 費 2,000円(当日いただきます) ※記念品 呈

ご昼食は各自でお済ませください

《懇 親 宴》

と き 平成23年10月10日(月・祝) 午後17時～19時

と ころ ホテルアウィーナ大阪 3F 葛城の間

☆会 費 7,000円(会席料理) 先着申込 120名様

☆宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8,000円(朝食付き)

*事前投句および懇親宴・宿泊のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(御希望の方は事務所)にて9月1日(木)までに本社事務所宛、お送り下さい。

*懇親宴・宿泊のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主 催 川 柳 塔 社

大阪市天王寺大道1丁目14番17号201

〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490

振 替 0 0 9 8 0 - 4 - 2 9 8 4 7 9

編集後記

★敗戦日われ人生を二つ生
き 薫風

★「川柳杜人」の発行所は
仙台市青葉区である。発行
人は山河舞句。編集人は広
瀬ちえみ。2011夏（通
巻230）に、「実録・あ
の日あの時、私は13・11
東日本大震災」と題して12
人の臨場感あふれる体験記
を掲載。そこには私が映像
を通じて観たこの世の地獄
が綴られていた。

★箱庭にひよいと顔だす大
津波（逸志）わけ有りの車
が屋根の上に居る（靖弘）
笑いながら壊れていった話
する（ちえみ）がんばれが
んばれと「テレビの中の日
本人」が（みさ子）互喋々
原無番地となる我が故郷
（はるか）泳ぎ切ったよう
に我が家が立っていた（み
ずき）以上は杜人の作品の

ごくごく一部である。私が
もつとも衝撃をうけた作品
は「戦争と地震どちらかに
〇を」作者は4月16日86歳
で亡くなった大友逸星さ
ん。時事吟は利那の文芸云
という論争がかつてあっ
た。が、しかし、ここに発
表されている作品群には血
も涙も、体温もある。当事
者ならではの訴求力があ
り、魂の叫びがある。

★六月のさる日NHKで作
家辺見庸を観た。このたび
の震災における自身の、人
間としての在りようを話す。
病に倒れ半身は不随ながら
も眼光は鷹のごとく鋭く、
ジャーナリストとしての責
任、作家の自負を語る。

★辺見庸は言う。「言葉は
他人に対する関心である。
汚泥に沈んだ言葉たちを拾
い集めて、丹念に洗い清め
て抱きしめたい」。また五
月二日の朝日新聞で詩人・
谷川俊太郎は「何もかも失

ひとこと

内閣が変りや君まで大臣か

路 郎

時事吟を手掛けていた頃があつた。諸先輩から「時事は刻一刻動いており、そのとき面白くても、直ぐに虚しい言葉になる。時を経ても、人の心に響く句でなければいけない」と忠告されていた。

路郎師も『麻生路郎読本』の「時事吟に就て」に於いて、「あまりおすすめしませんが、句作の練習にはなる」が、「いかに内容が面

白くとも格調を乱してはならない」と書いておられる。

今回、目に留まったのは「旅人&旅人その後の作品」にあった冒頭の句である。路郎師がどの内閣の時代に詠まれたのかは判らないが、時まさに内閣不信任案騒ぎ。

この句は「平成二十三年〇月〇日付〇〇新聞」で通用する。路郎師がご健在とさえ錯覚してしまう。時を経て訴求力のある真理を衡いた時事吟とは、こんな句を言うのであろう。（澤井 敏治）

って 言葉まで失ったが言葉は壊れなかった 流されなかつた ひとりひとりの心の底で」とうたった。

★私たちも言葉を持つてい
る。ひとりひとりに発表し
た川柳がある。路郎賞・川
柳塔賞の応募を忘れないで
頂きたい。締切は八月十日
必着のこと。

（朱）
ワセんりゅう飛行船に「川
柳は楽しくもあり苦しくも

ある。入選すれば嬉しいが
生みの苦しみ」と書かれて
ありました。本当にそうだ
と思います。自分なりに納
得する句をと思つと、なか
なかな出来ない時もあり、生
みの苦しみを味わうことになつてしまうのです。

▽母として人ひとりの命を
産む時も苦しいものです。
それでも赤ちゃんの可愛らしさ、這えば立ての成長の
楽しみからまた二人目の出
産となります。

▽苦しんで出来た川柳が時
々誉められ、喜ばせてくれ
す。その句が取り上げられ
います。そして生みの苦し
しみもわすれて懲りずに私
だけの可愛い川柳を生み続
けるのでしよう。その繰り
返して川柳にとつぱりつか
って過しています。（能）

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(10月号)」

地名

都道府県
市町村
姓
雅号

きりとらせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「錯覚」(8月15日締切)

10月号発表

池 森子 選 — 共選 — 福士 慕情 選

B

A

B

A

地名

市都
県道
府
姓
雅
号

地名

市都
県道
府
姓
雅
号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



応募要項

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六カ月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成22年9月号から平成23年8月号までの自分の入選句から5句を選ぶ

路郎賞——同人は川柳塔欄から応募

川柳塔賞——誌友は水煙抄欄から応募

③ 5句と掲載月、掲載頁を楷書で書き、8月10日(水)必着のこと

④ P 104・P 105を参照して下さい。

川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者	☐ ☐
	〒 —	 		年 年
	月から半年 月から一年 5000円 9800円 該当の方に○をつけて下さい			

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980141298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



作品募集

10月号発表（8月15日締切）

川柳塔（8句） 小島蘭 幸選
水煙抄（8句） 川上大輪 選
愛染帖（3句） 新家完司 選
檸檬抄「錯覚」（2句） 福士慕子 共選
池森 森子 共選
一路集（3句） 高島啓子 選
「叫ぶ」 升成 啓子 選
「はしこ」 宮脇道子 選
「かなり」 鈴木公弘 担当
初歩教室 「港」（3句） 鈴木公弘 担当

11月号

檸檬抄「支える」
一路集「渋い」「退屈」
「つくづく」
初歩教室「にぶい」

本社8月句会

とき 8月5日（金）午後5時開場・6時20分締切り
開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
ところ アウイナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ヶ辻町19-12 電話06・6772・1441
おはなし「川柳にみるシテアハ」 新家完司
兼題「手柄」 木本朱夏 選
「のこのこ」 堀松まつお 選
「扇風機」 居谷真理子 選
「誇る」 鶴田遠野 選
「倍増」 小島蘭 幸選
（各題2句以内）
会費 1000円 投句料 500円（切手可）

本社9月句会

7日（水）午後5時から
兼題「天使」「マニア」「防ぐ」
「辻」「雑魚」

第30年度 夜市川柳募集

第3回「耳」矢澤和女選
ハガキに3句 8月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）・檸檬抄は本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックス等のご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円（送料84円）
半年分 五千円（送料共）
一年分 九千八百円（同）
（二〇二一年平成二十三年）八月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一四一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話 〇六・六七九・三四九〇番
振替 〇〇九八〇・四二九八四七九番

杵つき製法の「すりごま」
オニザキの

すりごま




長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。
オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。
今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。

株式会社 オニザキコーポレーション
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL  0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>